また太郎君は顯光と聞えし。堀河の左大臣と申す。長德二年丙申七月二十日、右大臣にならせ給ひにき。御年七十八にやおはしましけむ、治安元年五月廿五日ぞうせ給ひし。此の五年ばかりにやなりぬらむ。惡靈の左大臣殿と申し傳へたる、いと心うき御名ぞかし。其の故ども皆侍るべし。此の北の方には村上の先帝の女王の宮、廣幡の御息所の御腹ぞかし。其の御腹に、男一人女二人ぞおはしましし。男君は重家の少將とて、心ばへ有識に、よおぼえ重くて、まじらひ給ひしほどに、世に久しくおはしますまじかりければにや、出家してうせ給ひにき。女君一所は、一條院の御時の承香殿の女御とておはせしかど、院うせ給ひて後、末には爲平の式部卿の宮の御子源宰相頼定の君の北の方にて、あまたの公達おはすめり。其の程の御事どもは、皆人しろしめたらむかし。其の宰相うせ給ひにしかば、尼になりておはします。今一所は、今の小一條院の、まだ式部卿の宮と申しをり、婿にとり奉らせ給へりし程に、東宮に立たせ給へりしを、うれしき事におぼしかど、院にならせ給ひにし後は、高松殿の御匣殿にわたらせ給ひて、御心ばかりは通はせ給ふことたえにしかば、女御も父おとども、いみじうおぼし歎きしほどに御病にもなりにけるにや、過ぎし未の年の二月ばかりにうせ給ひにき。いみじきものになりて、父おとど具してこそしありき給ふなれ。院の女御には常につきわづらはせ給ふなり。其の腹に、宮たちあまた所おはす。

語釋　○此の五年ばかりにやなりぬらむ　惹去より今年万壽二年迄五年なり　○惡靈の左大臣　顯光の女延子、敦明親王の寵を蒙る

然るに道長の女入りて其の寵を奪ふ、延子怨んで死す。顯光は道長を呪詛す、又死後にもたゝりをなす　○此の北の方　顯光の室　○五の宮　盛子内親王　○廣幡の云々　盛子内親王は廣幡の御息所の御腹なり　○其の御腹　盛子の御腹　○世に久しくおはしますまじ云々　長命すべからざらざればにや、○承香殿の女御　元子　○小一條院　敦明親王　○高松殿の御匣殿　道長の女、明子　○御心ばかりは通はせながら　御心にはかけてゐられるが　○未の年の二月　後一條天皇の寛仁三年二月なり　○いみじきものになりて　惡靈になりしをいふ　○院の女御　御匣殿　○其の腹に　延子の腹に生れたる小一條院の御子

通釋　また太郎君は顯光と申しました。堀河の左大臣と申します。長德二年ひのえさる七月二十日、右大臣になりました。御年七十八でありましたらう。治安元年五月廿五日失せました。今年萬壽二年迄五年ばかりになりましたらう、惡靈の左大臣殿といひ傳へたるは甚だ面白からぬ御名であります。其の名についた故ども皆ありませう。顯光の北の方は、村上天皇の皇女五の宮で、廣幡の御息所の御腹であります。其の皇女の御腹に男一人女二人生れました。男君は重家の少將とて、心ばへ何事にも通じて明に、世間の人望も重くて、世に立ち交際して居られし程に、長命し給ふべき因緣がなかつた爲か、出家して失せました。女君一所は一條院の御時の承香殿の女御とて居られましたが、院失せ給ひて後、末には爲平式部卿の宮の御子源宰相頼定の君の北の方にて、あまたの公達居るやうであります。其の程のことは皆人の知つて居る所でありませう。其の宰相失せましたれば、尼になつて居られます。今一人は今の小一條院がまだ式部卿の宮と申した時、婿にとり奉らせ給へりし程に東宮に御立ちになられたことを、うれしき事に思ひましたが、小一條院は東宮を御退位になり院になりました後は、道長の女高松殿の御匣殿に御出でになつて、御心にかけては居られたが、延子の方には通はせ給ふこと絶えましたれば、延子も顯光も甚だなげかれて、延子は御病にかゝりましたらうか、過ぎし未の年の二月頃に失せました。延子は惡靈になつて、父の顯光と共に恨みある人に仇をなしてありきました。院の女御の御匣殿には常について仇をなしました。延子の腹に宮たちあまた居られます。

□

また堀河の關白殿の御次郎、兵部卿有明の親王の御むすめの腹の君、中宮の御一腹にはおはせず。これは又、閑院左大將朝光と申して、父おとどのおはしましゝをり、兄の大臣宰相にておはしける程は、此の殿は中納言にてぞおはしける。ひきこされ給ひけるぞめでたき。すべていみじかりし御世おぼえにて、かたちも心もすぐれ給へり。御まじらひの程など、殊の外にきらめき給ひき。胡籙の水晶の筈、冠のすきびたひも、此の殿の思ひ寄りしいで給へるなり。何がしの行幸にぞや、仕うまつり給へりしに、此の胡籙おひ給へりしは、朝日の光にかゞやきて、さるめでたき事やは侍りし。今は目馴れにたれば珍らしからず人も思ひて侍るぞ。何事につけても、花やかにもていでさせ給へりし殿の、父殿うせ給ひにしかば、世の中おとろへなどして、御病も重くて、大將も辭し給ひてしこそくちをしかりしか。さてたゞ按察大納言とぞ聞えさせし。和歌などこそいとかしこくあそばししか。四十五にてうせ給ひにき。

語釋　○次郎　朝光　○有明の親王　醍醐天皇の皇子　○中宮　堀河の中宮嬇子　○兄の大臣　顯光　○ひきこされ給ひける　兄の官位をこえて進んだ　○御まじらひ　交際　○きらめき　はでやか　○胡籙　背に帶びて矢を盛る器具　○水晶の筈　水晶にて作れる筈　○すきびたひ　冠の甲に月形の穴を作り羅をはりてすかしたるをいふ　○何事の行幸　如何なることの爲に行幸せられしかたしかならず　○仕うまつり　御供した　○世の中おとろへ　世の中の勢力の衰ふること　○按察大納言　按察をかねた大納言

通釋　又堀川關白殿の御次男は、兵部卿有明の親王の御女の腹の君で、中宮皇子の御ひとつ腹ではありません。これは又閑院左大將朝光と申して、父大臣の居りました時、兄の大臣は宰相でありました時は、此の殿は中納言でありました。朝光は兄の顯光をひきこして昇進せしは、めでたいことであります。すべて非常に世間の人望があつて、容貌も心もすぐれてをりました。世間の交際の時など、殊の外に華麗にいたしました。胡籙の水晶の筈、冠のすきびたひも、此の殿の始め給へるものであります。何處の行幸でありましたか、供奉せられました時、此の胡籙をおひましたれば、朝日の光にかゞやいて、此のやうな立派なことはなかつた。今は目馴れましたので人も珍らしいと思ひません。何事につけても花やかに事をしました殿が、父の殿失せましたれば、其の威權は衰へて、御病も重くなつて、大將も辭しました事は殘念でありました。さて後には、たゞ按察大納言と申しました。和歌などは立派に作られました。四十五にて失せました。

□

北の方には、貞觀殿の內侍のかみの御腹の、重明の、式部卿の宮の御中姫君ぞおはせしかし。その御腹に、男君三人、女君のかがやく如くなるおはせし。花山院の御時に、內へまゐらせ給ひて、一月ばかりいみじう時めかせ給ひしを、いかにしてけることにかありけむ、まうのぼり給ふ事もとどまり、みかども渡らせたまふことたえて、御ふみだにみえきこえずなりにしかば、一月二日さふらひわびてこそは出でさせ給ひにしか。又さあさましかりしことやはありし。御かたちなどの、世の常ならずをかしげにて、おぼしなげく、見奉りたまふ父の大將、御せうとの君たちいかがはおぼしけむ、その御一つ腹の男君三ところ、太郎君は今の藤中納言朝經の卿におはすめり。人に重くおもはれ給ふめり。二郎三郎君は、右馬頭少將などにて、皆出家しつゝうせ給ひにき。此の右馬の入道の御男子なり、今の右京大夫は。

語釋　○貞觀殿の内侍のかみ　尚侍登子なり、師輔の女なり　○中姫　三人兄弟の中の君　○かがやく如くなる　容貌の美なること　○時めく　寵遇　○さふらひわひて　終に居たまらずして　○又さあさましかりしこそやはありし　さやうに意外なることは他になかりしとなり　○おぼしなげく　姚子のなげくなり　○二郎　右馬相任　○三郎　左馬頭登明　○右京大夫　遠光なり、右京大夫は平安城の西京の政務を執る右京職の長官なり

通釋　北の方には、尚侍登子の御腹の重明の式部卿の宮の御中姫君ぞをられました。その御腹に男君三人と、女君のかがやくやうな容貌の美しき方が居りました。花山院の御時に女御となつて、一月ほど非常に寵遇されましたがいかなる譯か、參内も止まり帝も御出でになること絶えて、御文だに賜ふことなかつたから、一月二月たつて、居苦しくなつて禁中を出られました。また、そのやうにあさましいことはあらうか。御容貌などのなみなみでなくすぐれてゐて、思ひなげくさまを見てをられる父の大將や兄君達は、どんなに思ひましたらう。その同母の男君たち三人あります。長男は今の藤原中納言朝經の卿でありませう。人に重んぜらるゝやうに見えます。二男三男は右馬の頭少將などで皆出家して失せました。今の右京大夫は、此の右馬の入道の御男子であります。

□

此の閑院の大將殿は、後には此の公達の母をばさりて、枇杷の大納言延光の卿のうせ給ひにしのみ、そのうへの年老いて、かたちなどわろくおはしけるにや、ことなる事聞え給はざりしをぞすみ給ひし。德につき給へるとぞ世人申しゝ。さて世おぼえも劣り給ひにぞかし。もとのうへ御かたちもいとうつくしく、人の程もやんごとなくおはしましゝかど、不合におはすとて、かゝる今北方をまうけて、さり給ひにしぞかし。此の今のうへの御もとには、女房三十人ばかり、裳唐衣させて、えもいはずさうぞきて、すえならべて、しつらひありさまより始めて、めでたくしたてゝ、かしづき聞ゆる事限りなし。大將ありきて歸り給ふをりは、冬は火おほらかに埋みて、たきもの大きにつくりて、伏籠うちおきて、褻に着給ふ御ぞをば、暖かにてぞきせ奉り給ふ。すびつにしろがねのひさげ甘ばかりをするてさま〳〵の藥をおきならべてまゐり給ふ。疊のうはむしろに綿入れてぞ敷かせたてまつらせ給ふ。寢給ふときには、大きなる熨斗持ちたる女房三四人許り出できて、かのおほとのごもるむしろをば、暖かにのしなでてぞ寢させ奉り給ふ。あまりなる御用意なりしかし。大方のしつらひありさま、女房の裝束などはめでたけれども、此の北の方は、練色のきぬの、綿あつきふたつばかりに、白袴うちきてぞおはしける。年四十餘ばかりなる人の、大將には親ばかりにぞおはしける。色黑くて、額に花形うちつきて、髮ちぢけたるにぞおはしける。御かたちの程思ひしりて、さまにあひたる裝束とおぼしけるにや、まことに其の裝束こそ、かたちにあひて見えけれ。さばかりの人の北の方と申すべくも見えざりけれど、もとの北の方重明の式部卿の宮の姫宮、貞觀殿の内侍のかみの御腹の、やんごとなき人と申しながら、かたちありさまめでたくおはしけるに、かゝる人におぼしうつりて、去り奉らせ給ひけむほど、思ひ侍るに、たゞ德のありて、かくもてかしづき聞ゆるに、思ひのおはしけるにや。

語釋　閑院院の大將　朝光　○此公達の母　重明親王の姫君　○そのうへ　延光の内室　○ことなる事　格別よいこと　○すみ給ひし　通ひ給ふ　○德　財產　○世おぼえ　朝光の心のいやしき爲に世の人望おちた　○もとのうへ　重明親王の姫君　○不合　夫の

心に合はぬ　○今の北方　新しき北の方　○裳　女の盛装に腰より後方に垂るゝもの　○唐衣　女子正装の時にうは着の上に着す　○しつらひありさま　室内の装飾　○かしづき　朝光を大切にする　○ありきて　他行して　○おほらか　澤山に　○たきもの　練香の類　○伏籠　かごをふせおくなり　○褻　常に　○ひさげ　藥を煎ずる具　○のし　火のし　○練色　うすき黄色　○花形　疱瘡のあと　○德　財産　○かくもてかしづき　朝光を大事にすること　○思ひのおはしけるにや　其の財産に思ひのあつたことにか

通釋　此の閑院の大將殿は、後には此の重明親王の女をば離婚して、枇杷の大納言延光の卿の失せました後に、其の北の方は年老いて容貌などあしくあつたのか、格別の事も聞えませんで居らるゝ婦人があつたが、それを妻君として住んで居られました。利德についたと人は評しました。それで世の人望は落ちました。始の北の方は御容貌も美しく、品の程も尊くありましたけれど、家風に合はぬとて、とのやうな今の北の方をめとつて、離縁しましたのであります。この今の北の方には女房二十人ほど裳唐衣きせて、言ふに言はれぬほどかざつてすゑ並べて置き、飾り調ふるより始めて、結構に作りたてゝ、大將を大切に待遇すること限りありません。大將の外出して歸り給ふ時は、冬は火を多くおこして灰に埋めて、薫物を多くつくつて、伏籠をおいて、平生着る御衣をば、あたゝかにして着せました。すびつに銀のひさげを二十ばかりすゑて、さまゞ〳〵の藥をおきならべてあげました。又ねたまふたゝみのうすべりには綿を入れてしかせました。寢たまふ時は大きな火のしを持ちたる女房三四人出で來て、大將のねる席をば暖かにのしなでて、ねさせました。あまりなる用意であります。大方のしつらひありさま、女房の裝束などは結構であるけれども、この北の方は薄き黄色の衣の綿のあつきもの二つばかりに、白袴をはいて居りました。年四十ばかりなる人で、大將には親のやうに見えました。色黑くて額にあばたのあとがあつて髪は縮れて居りました。容貌の醜きを自分でも知つて、さまに似合うた裝束と思うたのか、まことに其の裝束は容貌に合うて見えました。さばかり立派な大將の北の方と申されぬやうでした。もとの北の方は重明の式部卿の宮の姫君で、貞觀殿の内侍のかみの御腹で貴い人と申しながら、容貌も美しくありましたに、かゝる醜き人に心うつりて、離縁したことを思ひますに、只利德あつてかやうに大切に待遇するのに、心があつたのでありませうか。

□

やんごとなき人だにこそ、かくはおはしけれ。あはれ翁らが心にだに、いみじき寶をふらして、扱はむといふ人ありとも、年頃の女どもを打棄ててまからむは、いとほしかりぬべきに、さばかりにやんごとなくおはします人は、不合におはすといふとも、翁らがやどりのやうに侍らむやは。此の今北の方の事により、世の人にも輕くおもはれ、世おぼえも劣り給ふらし。いとくちをしき事に侍りや。さばかりの事おぼしわかぬやう侍るべしや。あやしの翁らが心に劣らせ給はむやはと思ひ給ふれど、くちをしく思ひ給ふる事なりしかば、申すぞやとて、ほゝえむけしき恥しげなり。さばかりの人だに、かくおはしましければ、それより次々の人のいかなるふるまひもせむ、ことわりなりや。翁らが、こゝらの年ごろ、あやしの宿りに、わりなき世を念じすごして侍りつるこそ、ありがたくおぼえ侍りつれ。心よくうちすみたりし顔けしきこそいとをかしかりしか。さて時々、もとのうへの御もとへおはしまさむとて、牛飼、車副などに、そなたへ車をやれと仰せられけれど、更に聞かざりけり。此の今北方、侍、雜色、隨身、車副などに、裝束ものとらする事はさるものにて、日毎に酒をいだして飲ませあそばせ、いみじき志どもをしける。そのけにやかくしけるを、それ又いと怪しき御心なりや。雜色、牛飼の心に任せて、それに

よりてえおはしまさざりけむよ、さることやは侍るな。さるは、此の大將は、御心ばへもかたちも、人にすぐれてめでたくおはせし人なり。又堀河殿の御子大藏卿正光ときこえしが御むすめ、源帥殿の御中の君の御腹ぞかし。今の皇太后宮の御匣殿とてさふらひ給ふ。只今の左兵衞督の北の方。また上野の前司兼定の君ぞかし。まことや、北面の中納言とかや世の人の申しゝは時光の卿、それまた右京の大夫にておはせし、この大夫の御子ぞかし。今の仁和寺の別當律師尋清の君。堀河殿の御末かばかりか。

語釋　○扱はむ　もてなす　○年頃の女　長年つれそうた女　○翁らがやどりのやうに侍らむやは　世繼等の妻のやうに夫婦喧嘩などはいたしますまい　○ほゝゑむ　世繼の微笑するなり　○こゝらの年ごろ　多年　○あやし　貧賤　○わりなき世を念じ云々　致し方のない世の中とあきらめて　○心よく打住みたりし云々　愉快に夫婦同棲せし若き時の顏、ありさまは樂しかりきとなり　○牛飼　牛車の牛をつかふもの　○そなたへ　前の北の方へ　○裝束もの　衣服　○そのけにやかくしけるをそれ又いと怪しき御心なりや　其の爲に牛飼らは車をもとの北の方の宅へやらぬものか、それにしても朝光の心もいとあやしとなり　○さることは侍るなんなことはあるまいよ　○堀河殿　兼道　○源帥殿　源高明　○只今の左兵衞督　藤原公信　○また上野の前司云々　公信の北の方と兼定と同腹なりとのことなり　○かばかりか　これ位で少くあつた

通解　自分の貴い人でさへかやうであります。あはれ私(世繼)らの心にさへ、非常なる財寶をまき散して待遇せんといふ人あつても、長くつれそうた妻をうち棄てゝ行くのは、氣の毒に思はるべきに、それほどに身分の貴い人は、たとひ心が合はずといふとも、翁らが宿のやうに夫妻さし向ひで居るものではなからうから、離緣するに及ばぬ。さて大將はこの今の北の方の事の爲に世の人に輕く思はれ、人望も劣つたらしい。甚だ殘念なことであります。これ位のこと、わからぬ事はあるまい。いやしき翁らが心に劣ることはあるまいと思ひますれど、殘念に思ふことであるから申すのでありますとて、ほゝゑむやうすは、恥かしさうであります。さやうに貴い人でさへ、かやうでありますから、それよりしも〳〵の人は、いかなるふるまひもするのはことわりであります。翁らは多くの年いやしき宿に、せんかたなき世を忍耐しくらして居りましたことは、ありがたく思ひますと心よくすました顏けしきは、いと面白くありました。さて時々もとの北の方の御許へ參らうとて、牛飼車副などに「その方へやれ」と仰せられけれど、更に聞き入れませんでした。此の今の北の方は、侍や雜色や隨身や車副などに、裝束ものを與ふるは勿論で、毎日酒を出して飲ませ遊ばせ、心を盡して親切にしました其の爲にや、車をもとの北の方の方へやりませんでした。併し朝光も、もとの北の方の方へ行かぬは、又甚だ陋劣な心であります。雜色や牛飼の心にまかせて、それによつて御出でになることは出來なかつたことは、よもやあるまい。さて此の大將は心もちも容貌も人にすぐれて美しい人であります。又堀河殿の御子大藏卿正光と申した人の御女は、源師殿高明の中の君の御腹であります。今の皇太后宮の御匣殿とて居られます。只今の左兵衞の督の北の方であります。また上野の前司兼定の君も御匣殿と同腹であります。まことや北面の中納言とか世の人の申したのは時光の卿で、それまた右京の大夫でありました。今の仁和寺の別當律師尋清の君は、この大夫の御子であります。堀河殿の御末はこればかりか、御末は振ひませんでした

□

此のおとど、すべて非常の御心ぞおはしましゝ。かばかり末たえさかえずおはしましける東三條殿を、故なき事により、御つかさ位をとり奉り給へりし。いかに惡事なりしかは、天道も安からずおぼしめしけむを。其のをりのみかど圓融院にぞおはしましゝ。東三條殿かゝるなげきのよしを、長歌によみて奉

りしかば、御かどの御かへり「いなぶねの」とこそ仰せられければ、しばしばかりをおぼしなげきしぞかし。

語釋　○此のおとど　兼通　○非常の御心　悪い心　○東三條殿　兼家　○天道　神　○長歌によみ　拾遺集にあり　○いな舟の云々　古今集にあり「最上川のぼればくだるいなぶねのいなにはあらずこの月ばかり」の意により、しばし時をまての意を寓し給へり　○しばしばかりをおぼしなげきしぞかし　少しの間をなげきしのみぞ

通釋　この大臣はすべて剛情の人でありました。かやうに末たえずにある東三條殿の兼家を何の仔細もなきに、官位を取りました。如何にも悪事であつたから、天道も怒りましたらう。其の時の圓融院でありました。兼家は官位を取られた歎きを長歌によんで奉りましたれは、帝も御返歌を「いなぶねの」と仰せられましたので、少しばかりの間をなげきましたことよ。

□

堀河殿、はては、われうせ給はむとて、關白をば御いとこの頼忠のおとどに讓り給ひしこそ、世人いみじきひがごととそしり申しゝか。此の向ひをる侍のいふやう「東三條殿のつかさとり奉らせ給ひしほどの事は、ことわりとこそうけたまはりしか。己れがおほぢ親は、かの殿の、年ごろのものにて侍りしかば、こまかにうけ給はりしは、此の殿たちの兄おとゝの御中年ごろのつかさ位の劣りまさりの程に、御中あしくて過ぎさせ給ひし間に、堀河殿の御病重くならせ給ひて、今は限りにておはしましゝほどに、東の方に、さきおふ音のすれば、御前に候ふ人たち、誰れぞなどいふほどに、「東三條の大將殿まゐらせ給ふ」と人の申しければ、殿聞かせ給ひて、年ごろなからひよからずして過ぎつるに、今は限りになりたりと聞きて、とぶらひにおはするにこそはとて、御前なる見苦しきものとりやり、おほとのごもりたる所ひきつくろひなどして、入れ奉らむとて待ち給ふに、「早くすぎて内へ參らせ給ひぬ」と、人の申すに、いとあさましく心うくて、御前に候ふ人々もをこがましく思ふらむ。おはしたらば、關白など讓る事も申さむとこそ思ひつるに、かゝればこそ、年頃なからひよからで過ぎつれ、あさましく安からぬ事なりとて、限のさまにて臥し給へる人の「かきおこせ」とのたまへば、人々怪しと思ふほどに、「車に裝束せよ。御前催せ」と仰せらるれば、物のつかせ給へるか、うつし心もなくて仰せらるゝかと、怪しく見奉つる程に、御かうぶりめしよせて、裝束などせさせ給ひて、内へ參らせ給ひて、陣のうちは公達にかゝりて瀧口の陣の方より御前へ參らせ給ひて、昇明池の障子のもとにさしいでさせあへるに、晝の御座に東三條の大將、御前に候ひ給ふ程なりけり。此の大將殿は、堀河殿既にうせ給ひぬと聞かせ給ひて、内に關白の事申さむと思ひ給ひて、此の殿の門を通りて參りて申し奉る程に、堀河殿の目をつゞらかにさしいで給へるに、御かども大將も、いとあさましく思召す。大將は打見るまゝに起ちて、鬼の間におはしぬ。關白殿御前についゐ給ひて、御氣色いとあしくて、「最後の除目行ひにまゐり給へるなり」とて藏人頭めして、關白には頼忠の大臣、東三條殿の大將をとりて、小一條の濟時の中納言を大將になしきこゆる宣旨くだして、東三條殿をば治部卿になし聞えて、いでさせ給ひて、程なくうせ給ひしぞかし。

心いぢにておはせし殿にて、さばかり限りにおはせしに、ねたさに内に參りて申させ給ひし程、こと人はすべうもなかりしことぞかし。されば東三條殿つかさとり給ふことも、ひたぶるに掘河殿の非常の御心にも侍らず。事の故はかくなり。「關白は次第のまゝに」といふ御文おぼしめしより、御妹の宮に申してとり給へるも、最後におぼすことどもしてうせ給へるほども、思ひ侍るに、心づよくかしこくおはしましける殿なり。

語釋　○此の向ひをる侍　世繼の話をきいて向ひにをる青侍　○已れがおほぢ親　青侍の親ト祖父　○かの殿　兼通　○年ごろのもの年來仕へたもの　○さきおふ音　警蹕の聲　○東三條の大將殿　兼家　○御前なる　枕もとなる　○をこがましく思ふらむ　取りかたづけたのを馬鹿らしく思ふ　○おはしたらは　弟の兼家が來るならば　○かきおこせ　兼通の家來にいふ語　○御前催せ　前驅の用意せよ　○物のつかせ　妖怪つく　○陣のうちは云々　朔平門から内は公達の肩によりて　○昆明池の障子　清涼殿の内にある衝立障子なり、支那の昆明池を描きたり　○畫の御座　日中出御の御座　○内　天皇　○つづらかにさしいで　目を圓くして出でたり　○ついゐ　坐す　○御氣色いとあしく　不平の色で　○除目（ぢもく）　大臣以下の任官をすること　○濟時　藤原忠平の孫　○心いぢ　思ひ立つたことは必ずやり通す心　○さばかり限りにおはせしに　そんなに重態であつたのに　○ひたぶる　專ら　○心づよく　意志堅固

通釋　兼道は遂にわれ死なんとて、關白をばいとこの頼忠の太臣に讓りましたことは、世間の人は甚しき惡いこととそりし申しました。さてこの向ひ居る青侍の言ふやう、兼家の官位を取りました時のことは、道理あることと聞きました。私の祖父は兼通の家に年來奉仕したるものでありますので、細に聞きました。兼道と兼家との兄弟仲は年來の官位の優劣の爲に御仲惡くして過きました間に、兼通の御病重くなりまして、今は限りと思ふ程に、東の方に前驅の音がしましたので兼通の御前に居る人たちは誰であらうと言うてゐる中に、兼家が參りましたと或人申しました。兼道これを聞いて年來不和で過ぎましたに、病氣篤いと聞いたので、訪問するのであらうとて、御前にある見苦しきものを取り棄て、臥してゐる所をひきつくろひなどして兼家を入れ奉らんとて待つて居ましたのに、早く門前を過ぎて禁中に參りましたと人が申しました。兼通は甚だあさましく心面白くなくて、御前に居る人々も馬鹿らしく思うであらう。今來たらば關白をゆづる事を申さんと思ひましたに、このやうに人情うすいから年來不和で過ぎましたのである、あさましく、やすからぬ事であるとて、もはや死ぬやうなさまで臥してゐた人が、かき起せと言へば、人々不思議と思ふ程に、車の仕度せよ、前驅を用意せよと仰せられた。人々思ふやう物の怪のつきたるか、現つ心もなくて言はるゝのかと、怪しく見ますうちに、御冠をめしよせて、裝束を着て參内し、陣の中は御子達の肩にかゝつて、瀧口の陣の方より帝の御前に參りまして、昆明池の障子のもとにさしいでましたに、晝の御座にて、兼家は帝の御前に伺候してゐました。兼家は兼通が既に失せましたと聞いて、帝に關白のこと申さうと思うて、兼通の門前を通つて、參内して申し奉つたのである。然るに兼通は目を圓くしてさし出でましたので、帝も兼家も甚だあさましく思召しました。大將はすぐに立ちあがつて、鬼の間に參りました。關白殿は帝の御前に一寸かしこまつて、御樣子は甚だわろく、最後の除目を行ひに參りましたとて、藏人頭をめして、關白には頼忠の大臣、兼家の大將を取つて小一條の濟時の中納言を大將になすといふ宣旨をくだし、兼家を治部卿となし、禁中を退出され、程なく失せました。心意地のある人で、それ程病氣重くあるに、兼家が憎さに參内して除目を行うたことは、他人では出來ることではなかつたことよ。されば兼家の官位を取りたることも、たゞ普通の剛情の爲ではありません。事のさまは以上の通りである。關白は兄弟順のまゝにといふ御文を、御考へよりして御姉の宮に申して取りましたのも、最後に思ふことをして失せましたのも、思ひますに、心づよく賢くある殿であります。

太政大臣爲光

此のおとどは、これ九條殿の御九郎君、大臣の位にて七年、法住寺のおとどと聞えさす。正暦三年六月十六日にうせ給ひにき。御年五十一。後の御諱恒德公と申しき。御男子七人女君五人おはしき。女二所は佐理の兵部卿の御妹の腹、今三所は、一條攝政の御むすめの腹におはします。男君たちの御はら、皆あかれ〳〵におはしましき。女君一所は、花山院の御時の女御、いみじう時におはせし程に、御子はらませ給ひて、八月にてうせ給ひにき。今一所も入道中納言の北の方にてうせ給ひにき。

語釋　○九條殿　師輔　○法住寺のおとど　法住寺建立の爲めに名あり　○一條攝政　伊尹　○あかれ〳〵　異腹なるをいふ　○時におはせし　寵愛を得る　○入道中納言　藤原義懷

通釋　此の大臣は九條殿師輔の九男で、大臣の位にて七年、法住寺の大臣と申します。正暦三年六月十六日に失せました。御年五十一であります。後の諡は恒德公と申しました。男は七人、女は五人居りました。女二人は佐理の兵部卿の御妹の腹で、今三人は一條攝政伊尹の御女の腹であります。男君たちの御腹は皆別々でありました。女君一人は花山院の御時の女御となり、非常に寵愛を受けました程に、御子をはらまれて八月で失せました。今一人は入道中納言義懷の北の方で失せました。

□

男君、太郎は左衞門督誠信ときこえし、三十八にて、惡心おこしてうせ給ひにしありさまは、いとあさましかりしことどかし。人に超えられ、辛い目見ることは、さのみこそあるわざなるを、さるべきにこそはありけめ。同じ宰相におはすれど、弟殿には、人がら世おぼえの劣り給へればにや、中納言あくきはに、我もならんとおぼして、わざと對面し給ひて「此の度の中納言のぞみ申し給ふな。こゝに申し侍るべきなり」と聞え給ひければ「いかでか、殿の御さきには罷りなり侍らむ。ましてかく仰せられむには、あるべきことならず」と申し給ひければ、御心ゆきて、然かおぼして、いみじう申し給ふに、及ばぬほどにやおはしけむ。入道殿此の弟殿に「そこには申されぬか」と、の給はせければ「左衞門督の申されればいかゞは」と、しぶ〳〵げに申し給ひけるに、かの左衞門督はえならじ、又そこにさられば、こと人こそはなるべかなれ」との給はせければ「かの左衞門督まかりなるまじくばよしなし。なしたぶべきなり」と申し給へば「またかくあらむには、こと人はいかでか」とてなり給ひにしを、いかで我れに向ひて、あるまじきよしをいひて、はかりけるぞとおぼすに、いとど惡心起して、除目のあしたより、手をつよくにぎりて、我れは齊信道長にはかられぬるぞ」といひいりて、物もつゆまゐらず、うつぶしふし給へる程に、病づきて七日といふにうせ給ひしに、握り給ひたるおよびは餘りつよくて、うへにこそとほりて出で給へりけれ。いみじき上戸にてぞはおはせし。故中關白殿の一年の臨時客にあまり醉ひて、御座にゐながら、起ちもあへ給はで、ものつき給へるにこそ、高名の弘高が書きたる樂府の御屏風にかゝりて、そこなはれたれ。此の中納言になり給へるは、いと世おぼえあり、よき人にておはし

き。また權中將道信の君、いみじき和歌の上手にて、心にくきものにいはれ給ひしほどにハうせ給ひにき。又只今の左衞門督公信（きんのぶ）の卿、また法住寺の僧都の君、阿闍梨の君おはす。

語釋 ○惡心おこして　弟濟信道長を怨みいきどほれるをいふ　○あさまし　あきるゝ　○さのみこそあるわぎなるを　さやうに殘念と思ふは當然であるが　○さるべきにこそはありけめ　前世の約束ならん　○弟殿　齊信　○あく　缺員　○對面　齊信に面會したこと　○殿の御さきに　齊信の言にて兄上のさきには中納言にならずとのこと　○いみじう申し給ふ　甚しく中納言をのぞめるなり　○及ばぬほどにやおはしけむ　誠信の人格は中納言として不足な爲か　○入道殿　道長　○此の弟殿　齊信　○そこには申されぬか　御身は中納言を望まぬのか　○そこにさられば　汝は辭退したら　○こと人　他の人　○よしなし　詮なきこと　○なしたぶべきなり　私を中納言にして下さい　○またかくあらむには、こと人はいかでか　道長の言なり、御身がのぞむならば他人をば任ぜない　○うへにこそとほりて　指は甲の上に通つた　○上戸　大酒家　○故中關白　道隆　○ものつき給へる　嘔吐したり　○弘高　巨勢弘高、畫を能くし繪所の長者たり　○樂府（がふ）の御屏風　樂府の趣をかける屏風　○此の中納言になり給へるは　齊信なり　○心にくき　うらやましき　○僧都の君　尋覺　○阿闍梨の君　良光

通解 男君の長男は左衞門督誠信と申しました。三十八で惡心を起して失せました有樣は、甚だあさましかりし事でありました。人に官位を超えられ、つらい目を見ることはありがちのわざなるを、これも前世の因緣でありませう。同じ宰相であるが弟殿には人物も世の人望も劣つたのであらう。中納言缺員の時に誠信は中納言にならんとて、わざと齊信に對面して言ふやう、此の度の中納言を望み給ふな、私は中納言になりませうと申しました。齊信言ふいかでか殿の御先になりませう、ましてかやうに御話あつては、決して中納言になりませんと申しましたれば、誠信は、滿足して、齊信は希望することないと思うて、しきりに中納言を所望されましたのに、誠信は中納言になる資格のない爲か、道長は齊信に向ひ御身は中納言を所望されぬかと申せば、齊信言ふやう、誠信が所望されるから所望されませんと澁々申しましたるに、道長言ふ誠信は成り得まい、又御身が所望せずば他人を中納言にしませうと申した。齊信言ふ、誠信がならぬならば、私を中納言にしてくださいと申しました。道長言ふ、御身が望まるゝならば他人をば如何でしませうぞと、齊信を中納言にしました。誠信思ふやう、齊信は我に向つて中納言にならぬと言うて、たばかりたるよと、甚だ惡心を起して、除目の朝より手を强く握つて、我は齊信道長に一杯食はされたと言うて、食物も少しもたべず、俯伏し〳〵給へる程に病氣になつて、七日目に失せましたに、握つた指は餘り强くて手の甲に通りました。誠信は大飲酒家でありました。道隆殿の一年の臨時客にあまりに醉うて、御座についてゐながら立つことはできずして、吐き出しました。有名の弘高の書いた樂府の御屏風に被（かぶ）つてきたなくされました。中納言になつた齊信は甚だ世間の評判が良き人でありました。又權中納言道信の君は、すぐれた和歌の上手で、人に羨まれて失せました。又只今の左衞門督公信の卿、又法住寺の僧都の君や、阿闍梨の君など居ります。

□

また一條攝政殿の御むすめの腹の女君たち三四五の御方おはします。三の御方は、鷹司（たかつかさ）殿のうへとて、尼になりておはします。四の御方は、今の入道殿の俗におはしましゝをりの御子生みてうせ給ひにき。五の君は今の皇后宮にさぶらはせ給ふ。此のおとどの御有樣かくなり。但し法住寺をぞ、いといかめしうおきてさせ給へる。攝白關白せさせ給はぬ人の御しわざにては、いと猛（たけ）なりかし。此のおとどいとやんごとなくおはしましゝかど、御末細くぞ。

語釋 ○今の入道　道長　○今の皇后　三條天皇の中宮妍子　○猛なり　强勢だ、盛んである

通釋 まこと一條攝政伊尹の御女の腹の女君達三、四、五の御方居ります。三の御方は鷹司殿の北の方とて、尼に

なつて居ります。四の御方は、道長の入道せざる時の御子を生みて失せました。五の君は今の皇后宮にて居られます。爲光の子孫のありさま斯の如くであります。法住寺を莊嚴美麗に經營されました。攝政關白にならぬ人の御しわざとしては、甚だ猛勢であります。此の大臣は甚だ貴くありましたなれど、御子孫は微弱であります。

太政大臣公季

此のおとど、只今の閑院のおとどにおはします。これ九條殿の十一郎君、御母、宮腹におはします。皇子の御むすめをぞ北の方にておはしまし〻。其の御腹に、女君一所男君二所おはします。女君は一條院の御時の弘徽殿の女御、今におはします。男一人は三昧僧都如源と申し、うせ給ひにき。今一所の男君は、只今の右衞門督實成の卿にぞおはする。此の殿の御子播摩守陳政の御むすめの腹に、女君二所男一人おはします。大姫君は、今の中宮の樣大夫殿の御北の方、今一所は、源大納言俊賢卿、これ民部卿と聞ゆる。其の御子の只今の頭中將顯基の君の御北の方にてぞおはする。男君をば、御おほぢの太政大臣殿、我が御子にし奉り給ひて、公成とつけ奉らせ給へるなり。藏人頭にて、いとおぼえことにておはする君になむ。此の太政大臣殿の御有樣かくなり。みかど后にたゝせ給はず。

語釋　○宮腹　醍醐天皇の御女康子內親王　○皇子の御むすめ　公季は醍醐の皇子有明親王の御女を北の方にせり　○女君一所　義子　○今の中宮の權大夫　道長の男能信　○御おほぢの太政大臣　公季

通釋　此の大臣は只今の閑院の大臣であります。これ九條師輔の十一男で御母は宮腹であります。皇子の御女を北の方としました。其の御腹に女君一人、男君二人居ります。女君は一條帝の御時の弘徽殿の女御で今居られます。男一人は三昧僧都如源と申し失せました。今一人の男君は只今の右衞門督實成の卿であります。長女は今の中宮の權大夫殿の北の方で、今一人は民部卿源大納言俊賢卿の御子の、只今の頭中將顯基の君の北の方であるやうです。男君をば祖父の太政大臣公季は我が子となして、公成と名づけました。藏人頭で御寵愛特別であります。此の太政大臣殿の御有樣かやうであります。此の御子樣よりは皇后も出で給はず、從つて御門も生れませんでした。

□

此のおほきおとどの御母うへは、延喜の御かどの御むすめ、女四の宮ときこえさせき。延喜いみじく時めかし思ひ奉らせ給へりき。御裳着の屏風に、公忠の辨、

ゆきやらで山路くらしつ時鳥いま一聲のきかまほしさに

とよむは、此の宮のなり。貫之などあまたよみて侍りしかども、人にとりてはすぐれの〻しられ給ひし歌よ。朱雀村上三代のみかどの、一つ御腹の妹におはします。さてうちずみしてかしづかれおはしまし〻を、九條殿の、女房をかたらひて、みそかに參らせ給へりしぞかし。世の人便なき事に申し村上のすめらぎも、安からぬ事に思召しおはしましけれど、色に出でて咎めおほせられざりしも、此の九條殿の御おぼえのかぎりなきによりてなり。さてまた、人々うちさゝめき、うへにもきこしめされぬほどに、雨おどろおどろしくふり、雷鳴りひらめきし日、此の宮內におはしますに、「殿上の人々、四の宮の

御方にまゐれ、おそろしくおぼしめすらむ」と仰せごとあれば、誰れも參り給ふに、小野の宮のおとどかし「まゐらじ、おまへのきたなきに」とつぶやき給ふは、後にこそ、みかどおぼしめしあはせけめ。さて殿にまかでさせ奉りて、思ひかしづき奉らせ給ふといへばさらなりや。さるほどに、此の太政大臣を孕み奉り給ひて、いみじう物の心細くおぼえさせ給ひければ、「まろは更にあるまじき心地なむする、よし見給へよ」と、男君に常に聞えさせ給ひければ、「誠にさもおはしますものならば、片時もおくれ申すべきならず、若し心にあらずながらへさふらはゞ、出家かならずし侍りなむ。又二つ、こと人見るといふ事はあるべきにも侍らず、あまがけりても御覽ぜよ」と申させ給ひける。法師にならせ給はむ事はあるまじとやおぼしめしけむ、小さき御唐櫃一よろひに、片つ方は御烏帽子、いま片つ方にはしたうづを、ひと唐櫃づゝ、御てづから、つぶと縫ひ入れさせ給ひけるを、殿はさも知らせ給はざりけり。さて遂にせうさせ給ひにしは。されば、此の太政大臣殿は、生れさせ給へる日を、やがて御忌日にておはしますなり。彼の縫ひおかせ給ひし御烏帽子御したうづ御覽ずる度ごとには、九條殿しほたれさせ給はぬをりなし。誠に其の後は、ひとりずみにてぞやませ給ひにし。

語釋　○此のおほきおとど　公季　○女四宮　康子内親王　○裳着　女子始めて裳を着くる儀式　○公忠　源氏　○ゆきやらで云々　一首の意は、ほととぎすの今一聲をききたさに、ゆくべき所へ行かずして、山路に日を暮したとのこと　○此の宮　康子内親王　○人にとりては　其の人々の中で　○うちずみ　禁中に居て　○かしづかれおはしましゝを　大切にされてをりたるものを　○女房　康子内親王の女官を身方にして　○みそかに　ひそかに　○參らせ給へり　通ひたること　○便なき　不都合　○うちささめき　私語　○うへにもきこしめさぬほどに　天皇にも師輔私通の事を御聞きならぬ中に　○殿上の人々云々　殿上の間の人々四の宮はおそろしがつてをらるゝから警護にまゐれと天皇の御詞である　○小野の宮のおとど　實頼　○お前のきたなきに　内親王の御前の庭の不潔なり　○殿にまかでさせ奉りて　四の宮を師輔の邸に退出せしめて北の方とすること　○まろは更にあるまじき心地なむする云々　内親王の御詞である、私は長生きはできぬやうに思ふ、うそとおぼさば將來を見させ給へ　○男君　師輔　○誠にさもおはしますものならば云々　師輔の言なり、まことに早くなくなるやうのこともあらば少しの間も私も生きてゐようと思はぬ、もし心にあらずして長生するならば必ず出家をせん、又他の女などにはあはぬ、天がけつて御覽下さい　○あるまじ　よろしからず　○つぶといつぱい　○一よろひ　一雙　○したうづ　今の足袋に似て指なし、束帶の時の用なり　○うせさせ　難產でうせた　○御忌日　母宮の忌日　○しほたれ　悲歎に沈む

通釋　此の大政大臣公季の御母上は、醍醐天皇の御女で女四宮と申しました。帝は非常に寵愛されました。御裳着の屏風に公忠の辨は「ゆきやらで山路くらしつ時 鳥いま一聲のきかまほしさに」とよまれたのは此の宮のことであります。貫之などあまた歌をよまれたが、人々よりすぐれてほめられた歌は、此の公忠の歌であります。朱雀村上二代の帝の一つ御腹の妹であります。さて禁中にあつて大切に養はれましたものを、九條殿は女房を手に入れて、ひそかに此の皇女に通うたものであります。世の人は不都合のことといひ、村上帝も面白からぬ事に思召しおはしましたが、顏にあらはされて咎め給ふことのなかつたのは、九條殿の御寵愛の限りなきによつてであります。さてまた人々はささやき話して、醍醐帝には知り給はぬ中に、雨おどろく程に降り、雷のなりひらめきし日、此の皇女内におはしますに、帝ののたまふやう、殿上の人々よ四の宮の御方に參りて警護せよ、恐しく思ふだらうと仰せごとあれば、誰れも參り給ふに、小野宮の大臣であつたらう、宮の御前は汚れてゐるから參りますまいと、口の中でぶつ〳〵言うた。後になつて、帝は小野宮の言葉を思ひ合はせたためでありませう。さて禁中を退かれて、師輔の北の方となりまして、大事に取り扱はれたことは言ふまでもない。その中に此の公季をはらみまして、甚だ物ご

と心細く思ひましたれば、皇女の康子は言ふ、私は更に此の世に生きてゐるやうに思はれない、よし實と思はずとも見給へと師輔に常に申しました。師輔の言ふやう、まことに失せ給ふものならば、片時も後れ申すべきでない。もしも心ならず生き殘るならば、必ず出家をしませう。又再び他人と契ることはしません、天がけりても御覽なさいと申しました。夫君はかやうに言へど法師になることはあるまいと、康子は思はれましらう、小さき御からびつ一雙に片つ方には、御烏帽子、今一つの方にはしたうづを、一唐櫃づゝ御手づから一ぱい縫うて入れ置かれましたが、師輔は少しも知りませんでした。さて遂に失せました。されば此の公季の生れた日は康子の忌日でありました。師輔は康子の縫ひおかれし御烏帽子御したうづを御覽ずる毎に、涙に袖をぬらしました。誠に其の　は妻をめとらずに獨ずみで終りました。

□

此の生みおき奉らせ給へりし太政大臣をば、御姉の中宮さらなり、世のつねならぬ御族思ひにおはしませば、やがて養ひ奉らせ給ふ。内にのみおはしまして、みかども、いみじうらうたきものにせさせ給へば、常には御前に侍はせ給ひて、何事も宮たちの御同じやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御ものめす御臺のたけばかりをぞ、一寸おとさせ給ひけるを、けじめにしるき事にせさせ給ひける。昔はみこたちだに、幼くおはします程は、内ずみせさせ給ふことなかりけるに、此の若君のかくて候はせ給へばあるまじき事と誹り申せど、かくておひたゝせ給へれば、なべての殿上人などになずらはせ給ふべきならねど、若うおはしませば、おのづから御戯れなどの程にも、なみ〳〵にふるまはせ給ひしなれば、

圓融院の御かど「同じほどのおととどもと思ふにや、かゝらではあらばや」などぞうめかせ給ひける。

語釋　○中宮　公季の姉にて安子といふ　○みかど　村上天皇　○らうたきもの　かはゆきもの　○宮たち　皇子たち　○御ものめす御臺　食卓　○けぢめにしるき事云々　一寸程低くして皇子たちと區別した　○なみ〳〵にふるまはせ給ひしなれば　他の皇子たちと同じく所作をする　○同じほどのおととども思ふにや云々　まだ親王たりし圓融院の御言葉なり、自分を弟などと思ふのであらうか、あんな振舞はよしてもらひたいと御話しになつて　○うめかせ　歎息する

通釋　此の生みおき給うた公季をば、御姉の中宮は勿論なみなみならぬ一族思ひで、まもなく養ひ取りました。公季は内裡にのみ居られて帝も甚だかはゆらしきものとしてをられましたから、常に帝の御前にさぶらはせ給うて、何事も宮たちと同じやうに大切に取扱はせ給ふに、食物を召しあがる御臺のたけばかりは一寸低くして、皇子たちとの差別を立てました。昔は皇子たちでも、幼くあります中は、内裡に住まれることなかつたのに、此の若君公季はかやうにして居られますから、人々はあるまじき事とそしりました。かやうにして生長しましたから、普通の殿上人などに比ぶべきではないが、公季は若くあるので、自然に御たはむれなどの時にも、普通にふるまはれたから、圓融院の幼き時で、歎息せられてのたまふやう、公季はわれ〳〵を同格の皇弟と思ふにや、人臣の子は人臣の子らしうありたいものであると申されました。

□

かゝる程に、御年つもらせ給ひて、又御孫の頭中將公成の君を殊の外にかなしがり給ひて、内にも、御車のしりにのせさせ給はぬ限は參らせ給はず。さるべき事のをりも、此の君おそく罷りいで給へば、弓場殿に御ささばかりまゐらせ給ひてぞ待ちたゝせ給へれば、見奉り給ふ人「などかくて立たせ給へる

と申させ給へば「いで待ち侍るなり」とぞ仰せられける。

語釋　○此の君　公成　○弓場殿　騎射を御覽ずる所にて清涼殿の南紫宸殿の西に當る　○御さき　警蹕　○いで待ち侍るなり　公成を待つてゐる

通釋　かゝる程に、公季は老年になつて、又御孫の頭の中將公成の君を殊の外に愛しまして、內裡に參上するにも、公成を御車のしりに乘せぬ限りはまゐりません。然るべき事のある時も、公成の遲く退り出る時は、公季は弓場殿に前驅のものばかりやつて、迎へさせて、自分は立ちて待つて居られた。見る人は何故にかやうに立たせ給へるかと問へば、いや孫を待つて居ると仰せられました。

□

無量壽院の金堂供養に、東宮の行啓ある御車に候はせ給ひて、ひとみち「公成おぼしめせ〳〵」と同じことを啓せさせ給ひける。あはれなるものから、をかしうなむありし」とこそ、宮おほせられけれ。繁樹が姪のむすめの、中務の乳母のもとに侍るが、まうできて語り侍りしなり。

語釋　○無量壽院　法成寺の阿彌陀堂なり　○御車に候はせ　公季は陪乘せるなり　○東宮　敦良親王　○ひとみち　途中すべて　○おぼしめせ　よろしく御賴みします　○あはれなる　不便ではあつたが　○中務の乳母　東宮の乳母なるべし　○まうできて　繁樹のもとにきて、以上は繁樹の物語である

通釋　無量壽院の金堂供養に、東宮の行啓の御車に、公季は陪乘して、途中、東宮に向ひ奉り、公成をかはゆがつて下さるやうにと、くりかへし同じことを申しあげました。あはれではあるが、をかしくあつたと東宮は仰せられました。繁樹が姪の女の中務の乳母のもとにつかはれて居るものが、參つて語りましたのであります。

□

頭中將顯基の君の御若君おはすとかや、御五十日をば、四條にわたし聞えて、太政大臣殿こそくゝめさせ給ひけれ。御おほぢの右衞門督ぞ抱き聞え給へるに、此の若君の泣き給へば「例はかくもむつがらぬに、いかなればかゝらむ」と、右衞門督、たちゐ慰め聞え給ひければ「おのづから、乳兒はさこそはあれ。いましもさぞありし」と、太政大臣殿のたまはせけるにこそ、さるべき人々參り給へりける、皆ほゝゑみ給ひにけれ。中にも、四條少將隆國の君は、常に思ひいでてぞ、今に笑ひ給ふなる。かやうに、あまりに古代にぞおはしますべき。昔の御童名は、宮雄君とこそは申しゝか。

語釋　○若君　資綱　○五十日　小兒生れて五十日の祝　○四條　顯基の邸　○わたし聞えて　若君をつれて行きたること　○太政大臣　公季　○くゝめ　口に餅を入れる　○右衞門督　實成　○むつがらぬに　怒る　○たちゐ慰め　立つたり坐つたりなぐさめ　○乳兒はさこそはあれ云々　公季の言なり、幼兒の泣くのは當然である。汝も始め赤兒のときは其の通り泣いた　○さるべき人云々　身分のよい人だち　○かやうにあまりに云々　世繼の評なり、公季はかやうに古風を大變好んだ人であるやうだ　○昔の御童名　公季の幼名

通釋　頭の中將顯基の君の御若君があるとか申します。五十日の祝を四條の顯基の家に連れまゐつて、曾祖父の公季殿は五十日の祝の餅を赤兒に哺めさせました。祖父の實成は抱きましたに此の若君は泣きました。祖父の實成の言ふやう、いつもは、かやうに泣きなどせぬに、如何なれば泣くのであらうと、實成は立つたりすわつたりして慰めました。公季の言ふやう、自然小兒の泣くのは當然である、御身もその通りであつたと、此の席に然るべき人々は參つて居りましたに、公季は實成を小兒のやうに言ふのを聞いて皆笑ひました。四位の少將隆國は常に思ひ出し

て今も笑うてをります。かやうに老年の實成を小兒のやうに言ふは、あまりに古風でありませう。公季の昔の童の時の名は、宮雄君と申しました。

太政大臣兼家

此のおとどは、これ九條殿の三郎君、東三條のおとどにおはします。御母は一條攝政におなじ。冷泉院圓融院の御をぢ、一條院三條院の御おほぢ、東三條女院贈皇后宮の御父。公卿にて二十年、大臣の位にて十二年、世をしらせ給ひ、さかえて五年ぞおはします。正暦元年七月二日うせさせ給ひにき。御年六十二。出家せさせ給ひてしかば、後の御諱なし。

語釋　○東三條　兼家の邸　○一條攝政　伊尹　○東三條女院　圓融天皇の皇后詮子

通釋　此の大臣は九條殿の三男で東三條の大臣であります。御母は伊尹に同じくあります。冷泉院、圓融院の御伯父で、一條院、三條院の御祖父で、東三條女院贈皇后宮の御父であります。公卿にて二十年、大臣の位で十二年、世の政治を執り榮えて五年居ります。正暦元年七月二日失せました。御年六十二であります。出家されましたから、後の諱はありません。

□

内にまゐらせ給ふには更なり、牛車にて此の陣まで入らせ給へば、それより内はなにばかりの程ならねど、紐解きて入らせ給ふとぞ。されど、それはさてもあり、相撲のをり、東宮のおはしませば、二所の御前に、何をもおしやりて、御汗取ばかりにて候はせけるこそ、世にたぐひなくやんごとなき事なれ。末には北の方もおはしまささりしかば、男住みにて、東三條殿の西對を、清涼殿づくりに御しつらひより始めて、住ませ給ふなどをぞ、あまりなることに人申すめりし。なほたぐひとにならせ給ひぬれば、御果報のおよばせ給はぬにや。さやうの御身持に、久しくは保たせ給はぬとも定め申すめりき。

語釋　○内にまゐらせ給ふ　參内　○北の陣　朔平門　○紐解きて　裝束のいれひもをはづしてくつろぐをいふ　○さてもあり　それで容赦もする　○相撲　毎年七月宮中にて行はるゝ式　○二所　天皇、東宮　○何をもおしやりて　御前で裝束も上着も肩がぬけるまで胸をおしひらいて　○汗取　大帷子なり、汗衫に同じ　○末　晩年　○男住み　男のみの生活　○たぐひとにならせ給ひぬればやはり臣民である　○御果報云々　果報の無いためだらう　○さやうの御身持　こんなに身持のわるい人であるから　○久しくは保たせ給はぬ云々　久しく保たぬと人々は評したさうである

通釋　參内する時は勿論、牛車で北の陣まではいりますと、それより内は僅なる程に、紐をときて打ち寛ぎて入りましたといふことです。されど紐をといて入るは無禮ではあるが、まづ恕すべきなれど、相撲の節會のとき、東宮も居りますから、天皇と東宮と二所の前に何ものをも押しやつて、御汗衫のみで居りましたことは、世に類なく貴い爲であります。末には北の方も居りませんでしたから、男住みで、東三條殿の西の對を清涼殿の如くに造つて住んでをられたなどは、あまり無禮なることに人々は申すやうです。なほ臣下でありますから、人君と同じさまにてあるべき御果報のなかりし爲か、さやうに僭越の御行ひにより、長命はせず、六十二にて失せましたと、世人は評判するやうです。

□

其の程は夢ときも、かんなぎも、賢き者どもの侍りしぞとよ。堀川の攝政のはやり給ひし時に、此の東三條殿は、御つかさども停められさせ給ひて、いとからくおはしまし〻時に、人の夢に、かの堀川の院より、矢をいと多く、東ざまに射るを、いかなるぞと見れば、東三條殿に皆落ちぬと見けり。よからず思ひきこえさせ給へる方より、矢おはせ給へば、あしき事ならむと思ひて、殿にも申しければ、恐れさせ給ひて、夢ときに問はせければ、「いみじうよき御夢なり。世の中の、此の殿にうつりて、あの殿の人の、さながらまゐるべきが見えたるなり」と申しけるが、あてざりしことかは。又其その頃、いと賢きかんなぎ侍りき。賀茂の若宮のつかせ給ふとて、ふしてのみ物を申し〻かば、うちふしの巫(みこ)とぞ世の人つけて申し侍りし。大入道殿めして、御問はせ給ひけるに、いとかしこく申しければ、さしあたりたる事、過ぎにし方ども、皆さいふごとなれば、然か思召しけるに、かなはせ給ふ事どもの出でくるまゝに、後々には御裝束たてまつり、御かうぶりせさせ給ひて、御膝に枕せさせてぞ、物は問はせ給ひける。それに一事として、後々の事申しあやまたざりけり。さやうに近くめしよするに、いふかたなきほどの者にもあらで、少しおもと程のきはにてぞありける。

語釋　○其の程　當時　○夢とき　夢の善惡を判斷する人　○かんなぎ　神樂を舞ひ神おろしなどするもの　○堀河の攝政　兼通　○はやり給ひし　榮えなりし　○からく　つらく　○よからず思ひきこえさせ給へる方より云々　平生不和な普通の方より矢を負はせ給へば　○あの殿の人の　兼通の　○さながらまゐるべきが　そのまゝに兼家にしたがひつく　○あてざりしことかは　よくあてた　○つかせ給ふとて　乘り移りたりとて　○さいふごとなれば　此のみこの言ふ通りであつたから　○かなはせ給ふ事ども　みこの言ふ通りの事　○裝束たてまつり　裝束をつけ　○かうぶりせさせ給ひて　冠をかぶらせて　○いふかひなき程のもの　いふに足らぬ身分のいやしきもの　○おもと程のきは　侍女といふ程の身分

通釋　其の時分は、夢判斷する人も、かむなぎも、かしこきものどもは居つたとのことです。兼通の勢盛んな時に、兼家は官位を停められて、甚だつらくありました時に、或人の夢に、かの堀河の院より、矢を澤山東の方に射るを、如何なることかと見れば、皆東三條殿に落ちたと見えました。惡しく思うてゐる方より、矢を負ひましたので、惡しきことならんと思うて、兼家に申しました。兼家は恐れて夢判斷者に問ひましたれば、其の人の言ふ、甚だ善き夢であります、世の中の勢力は兼家に移つて、兼通の方の人はそのまゝ參り附くべきが見えたのであると申しましたが、よく當りました。又其の頃甚だかしこきかむなぎが居りました。賀茂の若宮が憑いたとて、俯してのみ物を申し〻かば、うちふしの巫と世間の人は名づけました。兼家はこれを召して、物を問ひましたに、甚だかしこく申しましたれば、今さしあたつて心に判斷のつかぬこと、又過去のことも巫の言ふ通りであつたから、巫の言ふやうに未來のことも其の通りだらうと信じ思ふに、それも又巫の豫言にたがはぬことは出でくる故に、後々には御裝束を着て、御冠をかぶつて、御膝に巫を枕させて、物を問ひました。それに一事として未來の事を申しあやまりませんでした。さやうに近く召しよせるに、極めて下賤といふ程のものではなくて、侍女ほどのみこでありました。

□

此の殿、法興院におはしますことをぞ、快からぬ所と、人はうけ申さざりしかど、いみじう興ぜさせ給ひて、聞きも入れで渡らせ給ひて、程なくうせおはしましにき。御物忌(ものいみ)のをりわたらせ給はむとて、お

はしましてはいかゞあると、御うらをせさせ、おはしまして、そのたび法興院にて御病づきて、うせさせ給へるぞかし。みまやの馬に御隨身のせて、粟田口へつかはしたるが、あらはにはる〳〵と見ゆるなど、をかしき事に仰せられて、月のあかき夜は、下格子もせで、ながめさせ給ひけるに、目に見えぬものゝはら〳〵とまゐりわたしたりければ、「候ふ人々はおぢさわげど、殿はつゆ驚かせ給はで、御枕上なる太刀をひきぬかせ給ひて、「月見るとてあげたる格子をおろすは、何物のするぞ。いとびんなし、もとのやうにあけわたせ、さらずばあしかりなむ」と仰せられけば、やがて參りわたしなど、大方おちゐぬ事ども侍りけり。さて遂に殿原の領にもならで、かく御堂にはなさせ給へるなり。

語釋　○此の殿　兼家　○快からぬ所　いやな所　○うけ申さざりしかど　承知しなかつた　○物忌　忌みつゝしむべきことのあるをり　○渡らせ給はむ　法興寺に移らんとて　○御うらをせさせ　占をなさしめた　○みまや　馬をつなぎかへる處　○あらはにはるゝと見ゆるなど　はつきりと遠くまで見ゆる眺望のよい所　○下格子もせで　つりあげた格子もおろさで　○目に見えぬ　ばけものが來つて格子をみな下した　○やがてまゐりわたしなど　すぐに又格子をあげた　○おちゐぬことも侍りけり　心の落ちつかぬこと　○殿ばらの領　子息たちの所有

通釋　兼家の法興院に居ることを、面白からぬところと、世の人々は心にうけひき申さざりしに、殿は甚だ御氣に入つて、世の人の言ふことを聞き入れずに御出でになつて、まもなく失せました。御物忌の時に、御出でにならうとて、行くことの善惡を占はしめて御出でになつて、その時法興院で病氣になつて失せました。御馬屋の馬に近衞舍人を乘せて、粟田口につかはしたるものが、あり〳〵と遙に遠く見ゆるなどは面白いことと仰せられて、月の明かなる夜は格子もおろさず、ながめて居られましたに、目に見えぬものが來て格子をはら〳〵とおろしましたれば、伺候の人は恐れさわげど、殿は少しも驚きませんで、御枕べの太刀をひき拔いて、「月見るとて上げた格子を下すは何物のするぞ、甚だ不都合である、もとのやうに格子をあげよ、然らずば汝等の爲めあしかりなん」と言ひましたところ、間もなく格子を上げわたしました。大分合點のゆかぬ不安なる事などありました。さて遂に御子達の領有ともならずして、かやうに佛寺にせられたのであります。

□

此のおとどの御君達、女君四所、男君五人おはしまき。女二所男三所は攝津守藤原中正のぬしの娘の腹におはします。三條院の御母の贈皇后宮と、女院大臣三人ぞかし。此の御母いかにおぼしけるにか、末だわかうおはしけるを、二條の大路にいでて、ゆふけとひ給ひければ、白髮いみじく白き女の、唯ひとり行くが立ちとどまりて「何わざし給ふ人ぞ、若しゆふけとひ給ふか。何事なりとも、おぼさむことかなひて、此の大路よりも廣く長く榮えさせ給ふべきぞ」と申しかけてこそまかりにけれ。人にはあらで、さるべきものの示し奉りけるにこそ侍りけめ。

語釋　○贈皇大后宮　藤原超子　○女院　詮子　○大臣三人　道隆、道兼、道長　○此の御母　時姫　○ゆふけとふ　夕暮往來に立つ人の語りゆくをきゝて自ら吉凶を判斷するをいふ　○人にはあらで　人間でなく

通釋　此の大臣の御子は女君四人、男君五人居りました。女二人男三人は、攝津守藤原中正の娘の腹であります。三條院の御母の贈皇后宮超子と、女院詮子と、大臣道隆、道兼、道長の三人であります。此の御母如何に考へましたか、まだ若くあつた時に、二條の大路に出でゝ辻占を問ひましたれば、白髮の眞白な女が只ひとり行くものあ

り、それが立ちどまつて、「何わざをしなさる人ぞ、若し辻占を問ひ給ふか、何事も思ふことかなつて、此の大路よりも廣く長く榮えなさるぞ」と申しかけて、去りました。此の老女は人ではなくて、神などの示しましたものと思ひます。

□

女君一人は、女院の、后の宮にておはしまゝしをりの宣旨にておはしき。また對の御方ときこえし御腹のむすめ、おとどいみじうかなしう聞えさせ給ひて、十一におはせしをり、内侍のかみになし奉らせ給ひて、うちずみせさせ奉らせ給ひし。御かたちいとうつくしうて、御ぐしも十一二の程に、糸をよりかけたるやうにて、いとめでたくおはしませば、ことわりとて、三條院の、東宮にて御元腹せさせ給ふ夜の御そひぶしに參らせ給ひて、三條院もにくからぬものにおぼしめたりき。夏いと暑き日わたらせ給へるに、御前なる氷を取らせ給ひて、「これしばし持ち給ひたれ。まろを思ひ給はゞ、今はといはざらむ限は置き給ふな」とて、持たせ聞えさせ給ひて、御覽じければ、誠にかたの黒むまでこそ持ち給ひたりけれ。「さりともしばしぞあらむとおぼしゝに、あはれさ過ぎてうとましくこそ覺えしか」とこそ、院は仰せられけれ。

語釋　○女院　詮子　○后の宮にて云々　皇太后宮にてまし〳〵しときをいふ　○宣旨　皇后宮、皇太后宮、春宮、齋宮等に仕ふる女房の稱　○對の御方　兼家の側室　○かなしう　愛する　○うちずみ　禁中生活する　○そひぶし　副臥なり　○米を取らせ給ひて　東宮は氷を御もちになりたること　○今はといはざらむ限　もはやよろしいといふまで　○かたの黒むまで　手に黒き痕のつくまで　○さりとも云々　我が言を守りても長くはつゞくまいと思うた　○うとましくこそ覺えしか　おそろしくなつた

通釋　女君一人は、女院詮子が后の宮でありました時の、宣旨でありました。又太宰大貳國章の女、對の御方と申した人の御腹の女綏子は、大臣甚だ寵愛いたしまして、十一になつた時、尚侍になしまして、内裡に住ませました。御容貌甚だ美しくして、御髪も十一二の時に絲をよりかけたやうで、甚だ美しくありますから、道理あることで、三條院の東宮で御元服あらせられた夜の御息所にさしあげて、三條院も御氣に入りました。夏の甚だあつき日御出でになられ、御前なる氷を御取りになり、「これをしばし持ち給へ、私を思ひ給はゞ、今はよろしいと言はぬ中は置き給ふな」とて持たせて御覽になれば、まことに指や爪に黒班の出るまで持つてをりました。三條院の御考では、さやうは言ふも〻一寸の間であらうと思ひましたに、あまりに忍耐づよいので、あはれさ過ぎて、うとましく思はれたと仰せになりました。

□

怪しきことは源宰相頼定の君通ひ給ふと、世に聞えて、里に出で給ひにきかし。ただならずおはすとさへ、三條院きかせ給ひて、此の入道殿に、「さる事のあなるは、まことにやあらむ」と仰せられければ「まかりて、見てまゐり侍らむ」とておはしたりければ、例ならず怪しくおぼして、几帳ひきよせ給ひけるをおしやらせ給へれば、もと花やかなるかたちに、いみじうけさうし給へれば、常よりもうつくしう見え給ふ。「東宮に參りたりつるに、しか〳〵仰せられつれば、見奉りに參りつるなり。そらごとにもおはせむに、然かきこしめされ給はむが、いとふびんなれば」とて御胸をひきあけさせ給ひて、乳をひねり

給へりければ、御顔にさゝと、はしりかゝるものか。ともかくもの給はせで、やがて起たせ給ひぬ。東宮にまゐらせ給ひて、「まことに候ひけり」とて、し給ひつるありさまを啓せさせ給へれば、さすがにも と心苦しうおぼしめし、ならせ給へる御中なればにや、いとほしけにこそ思召したりけれ。内侍のかみは、殿かへらせ給ひて後に、人やりならぬ御心づから、いみじう泣き給ひけりとぞ、そのをり見奉りたる人語り侍りし。東宮にさぶらひ給ひしほども、宰相は通ひまゐり給ふこと、あまりになりてこそは、宮もきこしめして、「たちはきどもして蹴させやせましと思ひしかど、故おとどの事を、なきあとにもいかがと、いとほしかりしかば、さもせずなりにし」とぞ仰せられける。此の御あやまちより、源宰相、別當三條院の御時は殿上もし給はで、地下の上達部にておはせしに、此の御時にこそは殿上し、檢非違使の別當などになりてうせ給ひにしか。

語釋　○里　兼家の邸　○たゞならずおはす　姙娠をしてゐる　○此の入道　道長　○例ならず怪しくおぼして　道長の時ならず入來するを不思議に考へて　○そらごとにもおはせんに　そらごとにてあらうに　○然かきこしめされ給はんが　東宮が眞實と聞かれたことが　○いと不便なれば　甚だ不都合なれば　○さゝとはしりかゝるものか　意外にも乳は顔にかゝつた　○さすがにもと心苦しう云々　不都合な行爲とはいふものゝ、氣の毒な事だと思召すほどの御間柄で　あるから、甚だ毒の毒と思うた　○人やりならぬ御心づから　自分の心から其の行を恥ぢ　○あまりになりて　度々になりて　○たちはきどもして云々　帶刀の武官をして綏子を蹴ころさんと思うたが故兼家の心をおもひやられて　○さもせずなりにし　かやうにせずにしてゐた　○此の時　後一條天皇

通釋　不思議なことは、源宰相頼定の君は密通し給ふと世に聞えて、禁中を出でゝ生家に歸られました。姙娠し給ふとさへ三條院は御聞きになつて、道長に仰せらるゝやう「姙娠のことのあるは實であるか」と。道長は退りて見て參りませうとて、參りましたれば綏子は不意に參られたことを怪しく思うて、几帳をひきよせました。道長はそれを押しのけ給へれば、綏子は花やかなる御容貌であるに大に化粧してゐますから常よりも美しく見えました。道長言ふやう、東宮に參りましたれば姙娠の由仰せられたから、見とどけるに參りました。虚言であらうに、そのやうに東宮の聞し召し給ふは氣の毒であるとて、綏子の胸をひきあけて、乳をひねりますと、御顔にさゝとはしりかゝつたものがあります。道長は姙娠を知つたので何とも言はずに、やがて立ちました。道長は東宮に參りまして、姙娠はまことでありますとて乳の走りかかつたありさまを申しあげますと、東宮はさすがに氣の毒に思召し、ならはせ給へる御中であるから、あはれに思召されました。尙侍の綏子は道長かへつて後に我が心がらで、人の關せぬことであるが、非常に泣きましたといふことです。この時見た人の話です。東宮に侍つてをられし時も、宰相頼定の通ひ參り給ふことあまり度重つて、三條院も御聞きになられて、帶刀どもに命じて射させようと思はれたが、さすがに父の兼家の靈に對して氣の毒に思うて、さやうにしなかつたと仰せられた。此のあやまちよりして、頼定は三條院の時は、殿上も許されず、地下の上達部で居りましたに、後一條の時に殿上し、檢非違使の別當などになつて失せました。

□

今一つの御腹の大い君は、冷泉院の女御にて、三條院彈正宮、帥宮の御母にて、三條院位に卽かせ給ひしかば、贈皇后宮と申しき。この三人の宮たちをおほぢ殿、ことのほかにかなしうし申させ給ひき。世の中に少しの事もいでき、雷も鳴り、地震もふる時は、まづ東宮の御方に參らせ給ひて、をぢの殿ばら、それならぬ人々などを、内の御方へはまゐれ、此の御方には我れ候はむとぞ仰せられける。雲形と

いふ高名の御帶は、三條院にこそは奉らせ給へれ。かごのうらに、「東宮に奉る」と刀のさきして、自筆にかかせ給へるなり。此の頃は一品宮にとこそうけたまはれ。

語釋　○今一つの御腹　藤原中正の娘　○大い君　超子なり、長女の故にいふ　○彈正宮　爲尊親王　○帥宮　敦道親王　○おほぢ殿兼家　○東宮の御方　三條院　○それならぬ　其以上のもの　○自筆にかかせ給へるなり　自分でほりつけた　○此の頃　萬壽三年○一品宮　三條天皇の皇女陽明門院禎子なり

通釋　攝津守中正の女の御一つ腹の長女は、冷泉院の女御で、三條院、彈正宮、帥の宮の御母で、三條院即位せられた時に贈皇后宮と申しました。此の三人の宮たちを祖父兼家はことの外に寵愛しました。世の中に少しさわがしき事も出で來たり、又雷は鳴り、地震などふる時は、まづ東宮の御方に參りまして、伯父の殿ばらや、又其の外の人々などを內の御方一條院に參れ、われは三條院に參ると申しました。雲形といふ有名の帶は三條院に奉りました。かご（石帶につく金具）の裏にも、東宮に奉ると、刀のさきで兼家の自筆で書きました。此の頃（萬壽のころ）は一品宮に此の帶はあると承りました。

□

此の東宮の御弟の宮たちは、少し輕々にぞおはしまし、。帥宮の、祭のかへさ、和泉式部の君と相乘らせ給ひて御覽ぜしさまも、いと興ありきやな。御車の口のすだれを、中よりきらせ給ひて、わが御方をば高うあけさせ給ひ、式部の方をばおろして、きぬ長う出させて、紅の袴に、赤き色紙の物忌、いとひろき附けて、土とひとしうさげられたりしかばいかにぞ、ものみよりは、それをこそ人見るめりしか。彈正宮のわらはにおはしまし、時の御かたちのうつくしさは、はかりも知らず、かゞやくとこそは見えさせ給ひしか。御元服おとりの、殊の外にせさせ給ひしをや。此の宮たちは、御心のすこし輕くおはしますこそ、一家の殿ばらうけ申させ給はざりしかど、さるべき事のをりなどは、いみじうもてかしづき申させ給ひし。帥宮一條院の御時の御作文にまねらせ給ひしなどには、御前などさるべき人多くて、いとこそめでたうて參らせ給ふめりしか。御前にて、御襪のいたうせめさせ給ひけるに、心地も違ひて、いと堪へ難うおはしましければ、此の入道殿にかくと聞え申させ給ひて、鬼間におはしまして、御襪をひきぬき奉らせ給へりければこそ、御心ちなほらせ給へりけれ。

語釋　○御弟の宮　爲尊親王、敦道親王　○色紙　歌を書く用紙にて色のある紙なり　○物忌　物忌と書きたる小さき札なり、輕き物忌には札をつけて外出することもあり　○元服おとり　元服して見劣りした　○一家の殿原　兼家の子息　○うけ申させ　敬伏し給ふ意　○作文　詩をいふ　○御前　天皇の前　○いたうせめさせ給ひける　甚だせまくて　○入道殿　道長

通釋　此の東宮三條院の御弟の宮たちは、少し身を輕卒にもてなしました。帥の宮の賀茂の祭の翌日、和泉式部の君と車に相乘りをして御覽ぜしさまも、甚面白くあつたことよ。御車の前の簾を半分に切つて、わが方をば高くあげさせ、式部の方をばおろして、衣を長く出させて紅の袴に赤き色紙に物忌とかきたる札を廣くつけて、土に屆くほどさげてをりました。どうして物見よりは、それを人々は見るやうでした。彈正の宮の童であつた時の容貌の美しさは、はかり知らず、かがやくと見えました。さて御元服してから見劣りはことの外にしました。此の宮たちは、御心の少し輕くあります故に、兼家の御子たちは、心よからぬやうに思うて居りましたけれど、然るべき事のある時は、非常に大切に取扱はれました。帥宮、一條院の御時の詩作の會に多りました時などは、前驅などは然る

べき人が多くて、勢盛ににぎにぎしくありました。御前にて御したうづの甚だ窮屈であるため、氣分あしくなつて、甚だ忍耐できなくなりましたれば、道長にかやうと申して、鬼の間に御出でになつて、御したうづをぬきましたので御心ちもなほりました。

□

贈皇后宮の御一つ腹の、今一所の姫君は、圓融院の御時梅壺の女御と申して、一の御子生れ給へりき。其のみこ五つにて東宮に立たせ給ひ、七つにて位につかせ給ひにしかば、御母女御殿、寛和二年丙戌七月五日后に立たせ給ひて、中宮と申しき。此の御かどを一條院と申しき。その母后入道せさせ給ひて、太上天皇と等しき位にて、女院と聞えさせき。一天下をあがまゝにしておはしましき。此の父おとどの太郎君、女院の御一つばらの道隆のおとど、内大臣にて關白せさせ給ひき。次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの娘の腹におはせし君なり。道綱と聞えし。大納言までなりて右大將かけ給へりき。此の母は、きはめたる和歌の上手におはしければ、此の殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌など書きあつめて、かげろふの日記となづけて、世にひろめ給へり。殿のおはしましたりけるに、門をおそくあけければ、たびたび御消息いひいれさせ給ふに、女君

なげきつゝ獨ぬる夜の明くるまはいかにひさしき物とかはしる

いと興ありとおぼして、

げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸もおそくあくるは苦しかりけり

されば其の御腹の君ぞかし。この道綱の卿、後には東宮の傅になり給ひて、傅殿とぞ申すめりし。いとあつしくて、大將をも辭し給ひてき。其の殿、今の入道殿の北政所の御はらからにすみ奉り給ひて、生れ給へりし君、宰相中將兼經の君よ。道命阿闍梨、きはめたる和歌の上手におはしける。父の大納言殿は、寛仁四年十月十三日に出家、同十六日にうせ給ひにき。御年六十六とぞ聞き奉りし。大入道殿の三郎は粟田殿、また四郎は、ほか腹の治部少輔君とて、世のしれものにて、まじらひもせでやみ給ひぬとぞ聞き侍りし。五郎君、たゞいまの入道殿におはします。女院の御母北の方の御腹の君達三所の御ありさま申し侍らむ。昭宣公の御君達、三平とは聞えさすめりしに、此の三所をば、三道とや世の人申しけむ。えこそうけたまはらずなりしかとほゝゑむ。

語釋　○贈皇后宮　超子　○梅壺　宮中五舍の一なる凝花舍、梅樹庭にあるを以て名あり、詮子と申す　○一の御子　一條天皇　○あがまゝ　已の思ふまゝ　○此父おとど　兼家　○かけ給へり　兼ねた　○此の殿　兼家　○なげきつゝ云々　一首の意は、あなたの御出でになるをまつて、なげきながら一人でねる夜の明くるまでは、如何に久しきものと知り給ふか、其の苦しさは、とても今門をあくることのおそきをわづらひ給ふ比にあらずとのこと　○げにや〳〵云々　一首の意は、如何にも其の苦しみは同情に堪へません、併し冬のさむき夜でなくとも槇の戸をおそくあくるを待つてゐるのは苦しいものであるよ　○東宮　三條院　○あつしくて　病重くして　○其の殿　道綱　○今の入道　道長　○北政所　攝政關白家の妻室　○すみ奉りて　通ふ　○道命阿闍梨　道綱の子　○大入道　兼家　○粟田殿　道兼　○治部少輔君　道義　○しれもの　馬鹿もの　○たゞ今の入道殿　道長　○御母北の方　時姫にて

兼家の北の方、東三條院の御母　○昭宣公　基經　○三所　道隆、道兼、道長　○えこそうけたまはらずなりしか　其のことまでは聞くことが出來なかつた

通釋　贈皇后宮の御一つ腹の今一人の姫君詮子は、圓融院の御時に梅壺の女御と申して、一の御子一條院は生れました。その御子五にて東宮に御立ちになり、七にて位に即かれましたから御、母詮子女御殿は、寛和二年丙戌七月五日、后に立たれて、中宮と申しました。此の帝を一條院と申しました。その母宮詮子は入道されて、太上天皇とひとしき位で、女院と申しました。天下の政事を思ふまゝに執られました。この父大臣兼家の長男で女院詮子の御同腹の道隆の大臣は内大臣にて關白されました。次郎君は陸奥守倫寧の女の腹に生れた君で、道綱と申して、大納言までなつて、右大將を兼ねました。この母君は非常に和歌の上手な人で、この兼家の通うてゐた時の事や歌などを書きあつめて、「かげろふの日記」と名づけて、世にひろめました。兼家が參りたる時に門をおそく開けましたれば、たびゝ案内を申し入れましたに、道綱の母は「なげきつゝひとりぬる夜のあくるまはいかにひさしきものとかはしる」と讀まれました。兼家は甚だ面白いと思うて、「げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸もおそくあくるは苦しかりけり」と返歌しました。さればこの道綱の卿は其の御腹の君であります。後に東宮の守り役になつて傅殿と申したやうです。病重くなつて、大將をも辭しました。道綱が、今の入道殿道長の北政所の御妹のむこになつて生れた君は、宰相中將兼經の君であります。又道命阿闍梨も非常に和歌が上手でありました。父の大納言道綱は寛仁四年十月十三日に出家して、同十六日に失せました。御年六十六と申します。大入道兼家の三男は粟田殿道兼で、また四郎は他の女の腹で治部少輔とて、世の癡物で、人と交際もせずにしまうたと申します。五男は只今の入道殿道長であります。女院の御母攝津守中正の女時姫の御腹の君達三人道隆、道兼、道長の御ありさまを申しませう。昭宣公基經の御子たちを三平と申しましたやうですが、此の三人をば三道とや世の人は申しましたらうが、私は承らずにしまひましたと言うて、世繼は微笑した。

内大臣直隆

此のおとどは、これ東三條のおとどの一男なり。御母は、女院の同じ腹なり。關白になり榮え給ひて、六年ばかりやおはしましけむ、大疫癘の年こそうせさせ給ひけれ。されども、其の病にはあらで、御みきのみだれさせ給ひしになり。をのこは、上戸ひとつの興にすれど、すぎぬるはいと不便なるをり侍りや。祭りのかへさ御覽ずとて、小一條大將、閑院大將と一つ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ。鳥のつゐたるかたを、瓶につくらせ給ひて、興あるものにおぼして、ともすれば、大御酒入れてめす。今日もそれにてまゐらする。もてはやさせ給ふ程に、あまりやう〳〵過ぎさせ給ひて、後には、御車の尻口の簾みなあげて、三所ながら御もとどり放ちて、おはしましけるは、いとこそ見苦しかりけれ。大方此の大將殿たちの參り給へる、尋常にて出で給ふをば、いと本意なく口惜しき事におぼしめしたりけり。物もおぼえず、御裝束もひき亂りて、御車さしよせつゝ人にかゝりて乘り給ふをぞ、いと興ある事にせさせ給ひける。但しこの殿御醉のほどよりは、疾くさむることをぞせさせ給ひし。

語釋　○大疫癘　長德元年なり、流行病一年間つゞけり　○御みきのみだれさせ給ひにしなり　酒を過して薨じたり　○上戸ひとつの云々　男子は酒を飲むを一の愉快とすれど　○小一條大將　藤原濟時　○閑院大將　藤原朝光　○紫野　山城國家宕郡大德寺のあ

たり　○まゐらする　飲む　○もてはやさせ　瓶のさまと酒とを賞するなり　○尻口　後方と前方　○もとどりはなち　冠をぬきて、もとどりをあらはす　○物もおぼえず　酒の爲に前後も知らぬ　○この殿　道隆　○疾くさむる云々　酒は早くさめた

通釋　此の大臣はこれ東三條殿兼家の長男であります。御母は女院と同じ腹であります。關白になり榮えまして六年ほど居られましたらう、疫病の流行した年に失せました。されど其の疫病ではなくて、酒を飲むことの度を過ぎた爲であります。男子は酒を飲むことを一興とすれど、酒を過すことは、甚だ不都合な時もあります。賀茂の祭に參向せし舞人などの還立の儀を見物すとて、小一條大將濟時、閑院の大將朝光と同車して、紫野に出られました。烏の蹲踞した形を酒瓶に造られて、面白いものに思うて、ともすれば、それに酒を入れて飲みますが、今日もそれで飲みました。烏形の瓶をもてはやす程に、あまりだん〳〵酒をすごして、後には御車の前後のすだれをみなあげて、三人ながら冠をとつて髻をあらはし出して、居られたことは、甚だ見苦しくありました。大方此の大將たちの參りますには、普通にて出ることは、甚だ本意なき口惜しき事に思うたのでありました。酒の爲め前後も知らず、御裝束もひき亂して、御車を寢殿の御階の所まで、ひたづけにして、人の肩に凭りかゝつて乘ることを、甚だ面白い事としました。但し道隆は醉うた割合には、早く醉のさめるかたでありました。

□

御賀茂詣の日は、社頭にて三度の御かはらけ、定りてまゐらするわざなるを、其の御時には、禰宜神主も心得て、大かはらけをぞ參らせしに、三度は更なることにて、七八度などめして、上の御社に參り給ふ道にては、やがてのけざまに、しりの方を御枕にて、不覺におほとのごもりぬ。一の大納言にては、此の御堂殿ぞおはしましかば、御覽ずるに、夜に入りぬれば、御前の松の光りにとほりて見ゆるに、御すきかげのおはしまさねば、怪しと思召しけるに、參り着かせ給ひて、御車かきおろしたれど、え知らせ給はず。いかにと思へど、御前どももえおどろかし申さで、只さぶらふなめるに、入道おりさせ給へるに、さてあるべき事ならねば轅の外ながら、高やかに、やゝと御扇をならしなどせさせ給へど、更に驚き給はねば、近くゐよりて、表の御袴の裾をあららかにひかせ給ふをりぞ驚かせ給ひて、さて御用意はならはせ給へれば、御櫛かうがいぐし給へりける取りいでゝ、つくろひなどしておりさせ給ひけるに、些かさりげなく淸らかにてぞおはしゝ。されば、さばかり醉ひなむ人は、その夜は起きあがるべきかは。それぞれ此の殿の御上戸はよくおはしましける。其の御心のなほ終りまでも忘れ給はざりけるにや、御病つきてうせ給ひける時、西にかきむけ奉りて、念佛申させ給へと、人々のすゝめ奉りければ「濟時朝光などもや極樂にはあらむずらむ」と仰せられけるこそあはれなれ。常に御心におぼしめしならひたる事なれば、あの地獄の鼎のはたに頭うちあてゝ、三寶の御名思ひ出でけむ人のやうなる事なりや。

語釋　○御賀茂詣　關白の賀茂詣なり　○上の御社　上賀茂社　○のけざま　仰向に　○不覺におほとのごもりぬ　前後も知らずねてしまうた　○一の大納言　大納言中の首位　○此の御堂殿　道長　○御前　前驅　○松の光　松明の光　○御すきかげ　簾よりすき通つて見ゆる道隆の姿　○え知らせ給はず　道隆は酒に醉うてわからぬ　○御前ども云々　前驅のものも道隆をさまさないで　○只さぶらふなめり　只傍觀してゐるやうだ　○やゝと　聲をかけたるなり　○表の御袴　束帶のとき上に着する袴　○さて御用意は云々　かゝるときの用意としてなれてゐる　○さりげなく　酒に醉うた風はなく　○西にかきむけ云々　極樂淨土の方に向かせた

○濟時朝光云々　濟時朝光等も極樂に居るだらうか、居るならば一緒に酒を飲まう　○地獄の鼎　地獄のかま　○三寶の御名　佛法僧なり、されど此の所は阿彌陀如來をさす。此の處明瞭ならず、一說に時によりて物を思ひ出す喩とす。一說に百因緣集を引いて婆羅僧の話とす。要するに、酒友をこふる爲に念佛して極樂往生を願ふはあさましいが、此れも亦往生の結緣なるべしとのことならむ

通釋　御賀茂詣の日は、社頭で三杯の酒をあげることは定まつてゐるのに、道隆の時には禰宜神主も大酒家と知つてゐて大杯にて酒をあげましたに、三度は言ふまでもなく、七八度など飲んで、上の御社に參り給ふ道で、まもなくあふのけに、しりの方を御枕にて、前後も知らず眠りました。大納言中の第一位では此の道長が行列の中に居りましたれば、夜になりたれば、前驅のともした松明の火の光に透き通つて、車中盡く見ゆるに、簾ごしに道隆公の透影の見えぬを不思議なことと道長は思ひました。すでに上の社に參りつきまして、御車から道隆をかきおろしましたが、道隆は知りません、いかにと思へど、前驅どもは起しませんで、只侍つてゐました。道長は車より下りましたに、さて道隆を其のまゝ眠らして置くべきでないから轅の外にて、高やかにややと聲をかけて御扇をならしなどしましたに、更に起きませんから、近くゐよつて、表袴の裾を荒らかに引きました時、驚きさめて、かかる時の御用意はなれてゐますから、御櫛やかうがいを持つてゐましたものを取り出して、つくろひなどして下りましたに、少しも酒に醉うた風でなく清らかで居りました。さてそんなに醉ふ人はその夜は起きあがることのできるものでない。それで道隆の上戸はよくありました。その酒を好む心はなほ終りまで忘れませんでしたらう。御病ついて失せ給ふ時、西方に向つて念佛申させ給へと、人々は勸めましたれば、濟時や朝光も極樂に居るだらうか、若し居るならば、賴もしからうと言はれたことは、心にしみて感じました。酒の友をこふる爲に念佛して極樂往生を願ふはあさましいが、此れも往生の結緣でありませう。

□

御かたちぞいと清らかにおはしましゝ。帥殿に天下執行の宣旨くだし奉りに、此の民部卿殿の頭辨にて參り給へりけるに、御病いたうせめて、御裝束もえ奉らざりければ、御直衣にて、御簾の外にゐざり出でさせ給ひにしも、長押をおりわづらはせ給ひて、女の裝束御手に取りてかたのやうにかづけさせ給ひしなむ、いとあはれなりし。人のいとさばかりなりたらむは、ことやうなるべきを、なほいとかはらかに、あてにおはせしかば、「病つきてしもこそ、かたちはいるべかりけれどなむ見えし」とこそ民部卿殿は常にのたまふなれ。

語釋　○帥殿　伊周公　○天下執行の宣旨　道隆に代りて大政を執行すべきみことのり　○此の民部卿　俊賢　○頭辨　藏人頭にて太政官の辨官をかねたもの　○せめて　つのる　○え奉らざりければ　着用できず　○長押　柱と柱との間上下にあり、溝なきしきゐ、かもゐの如し　○かたの如くに　定例の如く使者にかづけ賜うた　○ことやうなるべきを　容貌など變つてしまふべきに　○かはらか　さつぱりと清い　○病つきてしも云々　病氣になつて特に容貌の美くしいのが必要だといふことを見た

通釋　道隆の御容貌は甚だ清くありました。帥殿伊周に、關白に代つて天下の政治を執るべき宣旨を下しました時、この民部卿俊賢は藏人頭で辨官を兼ねて參りましたに、御病氣重態で、御裝束を着用せず、御直衣で御簾の外にゐざり出られたが、長押を下りかねて、女の裝束を御手に取つて法則の如く俊賢に被けられたことは、甚だあはれであつた。ほかの人が、なんなに重き病になつたならば、異樣に見苦しき容貌となるべきに、猶甚だ清らかに貴くありました。一朝病にかかつたならば容貌は必要なものであると見えたと、民部卿は常に話されます。

□

其の關白殿は、腹々に男子女子あまたおはしましき。今の北の方は、大和守高階成忠のぬしの御娘な

り。後の世は高二位とこそいひはべりしか。さて積善寺の供養の日、この入道殿の上に候はれしは、いとめづらかなりしわざかな。其の腹に、男君三所、女君四所おはしましき。大姫君は、一條院の十一にて御元服せさせ給ひしに、十五にてやまゐらせ給ひけむ。やがて其の年の六月一日に后にたゝさせ給ふ。中宮と申しき。東三條院の御惱のさかりもすぐさせ給はで奉らせ給ひしをぞ、世人いかにぞや申し侍りし。さて關白殿などうせさせ給ひて後に、男御子一人女みこ二人生み奉らせ給へりき。女一の宮は入道の一品宮とて、三條におはします。女二の宮は、九つにてうせさせ給ひにき。男みこ、式部卿の宮敦康親王とこそ申しゝか。たび〳〵御思たがひて、世の中をおぼし歎きてうせ給ひにき。御年廿九にてあさましうてやませ給ひにしかな。冷泉院の宮達などのやうに、かろ〳〵におはしまさましかば、いとほしさもよろしくや、世の人思ひ申さまし。御ざえいとかしこく、御心ばへもいとめでたくぞおはしましゝ。さて又、此の宮の御母后の弟、中の御方は、三條院の東宮と申しゝをりの淑景舍とて、はなやがせ給ひしも、父殿うせ給ひにしのち、御年廿二三ばかりにてうせさせ給ひにき。

語釋　○其の關白殿　道隆　○積善寺　法興院の中にあり、道隆の建立　○この入道殿　道長　○上に候はれし　道長より上席に成忠の着席せること　○大姫君　定子　○東三條殿　兼家　○御惱のさかりもすぐさせ給はで　祖父兼家の大病にかゝはらず　○奉らせ給ひし　定子を宮中にあげた　○男御子　敦康親王　○女みこ二人　脩子内親王、媄子内親王　○たび〳〵御思たがひて、外戚に其の人なく東宮に立ちかね給ひしこと　○あさましうやせ給ひにしかな　意外にも東宮に立たずに一生を終り給ひしこと　○よろしくや　かなりにの意なり、冷泉院の宮たちと違ふから世人の同情はふかい意なり　○ざえ　學才　○御母后の弟　定子の妹なり　○淑景舍　禁中五舍の一。庭に桐を植ゑたれば桐壺ともいふ

通釋　其の道隆は腹々に男子女子あまた居りました。今の北の方は大和守高階成忠の御娘であります。後の世は高二位と申しました。さて積善寺の供養の日、この入道殿道長のかみに居りましたことは、甚だ珍らしきことであります。その腹に男君三人、女君四人居りました。長女の君は一條院の十一にて御元服あらせられたとき、御年十五で參られて、やがてその六月一日に后に立ち給ひて中宮と申しました。兼家の御病氣のさかりも過さずして奉りましたことを世の人は批評しました。さて道隆失せまして後に中宮は男御子一人、女御子二人生みました。女宮修子は入道の一品の宮とて三條に居られます。女二宮媄子は九歳で失せました。男みこ式部卿の宮敦康親王と申しました。たび〳〵思ひ給ふことははづれて、世の中を憂へなげきて失せました。御年二十九で氣の毒なさまで終りました。冷泉院の宮達のやうに輕々しき方でありましたならば、皇太子にならずに失せたことを口惜しく思ふことも、そんなではあるまいのに、此の宮は才智人にすぐれ給うて、甚だ立派でありましたから、世人は大に口惜しく思ひました。さて又此の敦康親王の御母后定子の妹君は、三條院の東宮と申しし時の淑景舍とて、花やかに榮え給ひしも、父の道隆失せ給ひし後、御年二十二三ほどで失せました。

□

三の御方は冷泉院の四の御子、帥宮と申しゝをこそは、父殿婿取りたてまつらせ給へりしも、後にはやがて御中たえにしかば、末の世は一條わたりに、いとあやしくておはするとぞ聞え給へりし。まことにや、御ばへなどのいとおちゐずおはしましければ、かたへは、宮も踈みきこえ給へりけるとかや、僧客人などの參りたるをりは、御簾をいと高やかにおしやりて、御ふところをひろげて立ち給へりけれ

ば、宮は御面うちあかめてなむおはしましける。さぶらふ人も顔の色たがふ心ちして、うつぶしてなむ、たたむもはしたに、すぢなかりける。宮、後には「見かへりたりしまゝに、動きもせられず、ものこそおぼえざりし」とこそ仰せられけれ。又、學生どもめしあつめて、作文しあそばせ給ひけるに、金を二三十兩ばかり、屏風の上よりなげ出して、人々うち給ひければ、ふさはしからずにくしとは思はれけれど、その坐にて饗應しまうして、とりそろひけり。「金たまはりたるはよけれども、さも見苦しかりしものかな」とこそ、今に申さるなれ。人々文作りて講じなどするにも、よしあしいと高やかに定め賜ふをりもありけり。二位の新發の御流れにて、此の御ぞうは女もみな才のおはしましたるなり。母上は高内侍ぞかし。されど殿上えせられざりしかば、御前にはえまゐらで、行幸節會などには南殿にぞまゐられし。それはまことしき文者にて、御前の作文には文奉られしはとよ。少々のをのこにはまさりてこそ聞え侍りしか。さやうのをり召しありけるにも、臺盤所の方よりは參り給はで、弘徵殿の上の御局の方より通りて、二間になむ候ひ給ひけるとこそうけたまはりしか。古體に侍るにや。「女のあまりに才かしこきは、ものあし」と人の申すなるに、此の内侍、後にはいとゝみじう墮落せられしも、そのけとこそおぼえ侍りしか。さて、其の宮のうへのさしつぎの四の御方は、御匣殿と申しし、御かたちいとうつくしうて、式部卿の宮の母代にておはしましゝも、はやううせ給ひにき。一つ腹の女君たちかくなり。對の御方と聞えさせし人の御腹にも女君おはしけるは、今の皇太后宮にこそはさふらひ給ふなれ。

語釋　○帥宮　敦道親王　○末の世　しまひには　○いとあやしくて　甚だわびずまひで　○おちゐずおはしまし　おちつかずにゐる　○かたへは　かつは　○たがふ心地して　かはつたやうな心地して　○はしたに　具合がわるいし　○すぢなかりける　詮方ない　○見かへりたりし　わきをむく　○ものこそおぼえざりし　はづかしくて夢中であつた　○學生　大學の學生　○作文　詩をつくる　○かみ　上　○人々うち　人々に當つた　○ふさはしからず　女に似合しからず　○饗應しまうして　宮樣は女君を饗應したるなり　○とりあらそひけり　人々は其の金を拾うた　○二位の新發　高階成忠なり、新發は新に佛門に入りたるもの　○御流れ　血統　○御ぞう　御族　○殿上えさられざりしかば　清涼殿にのぼるを許さなれない　○御まへ　主上の御まへ　○行幸　南殿に行幸なり　○節會　節日に酒饌を群臣に賜ふこと　○まことしき文者　實力のある詩人　○少々のをのこ　少しばかり文才ある男子　○臺盤所　殿上ゆるされた女官の詰所　○二間　弘徵殿の上の御局の南、晝の御座の北、夜の御殿の東にある室なり。○玉體を守るため僧の詰所　○古體に侍るにや　其のやうにするのは古風なのか　○墮落　零落なり　○そのけ　其のため　○其の宮のうへの　敦道親王の北の方　○さしつぎ　すぐの次　○式部卿の宮　敦康親王　○母代　御養母　○對の御方　側室　○今の皇太后宮　三條天皇の中宮研子　○まだも聞え給ふぞかし　まだ澤山に女の御子はあつた

通釋　三の御方は、冷泉院の四のみこ帥の宮と申した御方を婿に取り奉りましたけれど、まもなく御中絶えて、後には一條あたりに甚だ零落しておはすと申しますが實であらうか。御心もちなどの落ちつき給はぬ方であつた。宮も疎み申したとのことです。僧や客人などの參りたる時は、御簾をいと高く押しあげて、御懷をひろげて立ちましたれば、宮は御面を赤うしてをられました。待つてゐる人も顔色の赤くなるやうで、うつぶして立つのもはしたなく方法はなかつたのであります。又學生ども集めて詩を作らせ給ひけるに、金を二三十兩程屏風の上より投げ出して、人々を打ちましたれば、不相應にて疾しとは思ひましたが、其の座にてよきやうに取扱ひ申して、金を取り爭ひました。金を賜はりたるはよいが、如何にも見苦しかりしものよと、今に申されてゐます。人々は詩を作つて讀みあぐる時にも、よしあしを甚だ聲高く批評する時もありました。二位の新發の御子孫で、此の一族は女も皆才智

があつたのであります。母上は高内侍であります。されど殿上は許されませんでしたから、行幸、節會などには南殿に參られました。それはやさしき漢詩人で、御前の作文には、詩を奉られました。普通の男子には勝れてゐたといふことです。さやうの時に召されても、高内侍は昇殿を許されぬ人ですから、臺盤所の方よりは參りませんで、弘徽殿の上の御局の方より通つて、二間に居られましたと承りました。素朴なる古風でありませうか。女のあまり才智かしこきは、悪いものであると人の申すに、この内侍、後には甚だ零落せられましたことも其の故と思ひます。さてその宮敦道親王の上のすぐつぎの妹四の御方は御匣殿と申しました。御容貌は甚だ美しくありまして、式部卿敦康親王の御養母でありましたが、はかなく失せました。一つ腹の女君たちは以上のべた如くであります。對の御方と申した人の御腹にも女君がをりまして、今の皇太后宮に奉仕して居ります。

□

またもきこえ給ひし男君達は、太郎君は故伊豫守守仁の主の娘の腹ぞかし。大千代君よな、それは祖父おとどの御子にし奉り給ひて道頼の六郎君とこそは申しゝか。大納言までなりたまへりき。父の關白殿うせたまひし年の六月十一日に、うちつゞきうせ給ひにき。御年廿五とぞ聞えさせ給ひし。御かたちいと清げにあたらしきさまして、物よりぬけいでたるやうにぞおはせし。御心ばへこそ、こと御はらからにも似給はず、いとよく、又ざれをかしくもおはせしか。此の方は異腹におはす。皇后宮と同じ腹の男君法師にて十餘りの程に、僧都になし奉り給へりし。それも三十六にてうせ給ひにき。今一所は、小千代君とて、彼のほかばらの大千代には、こよなくひきこし、廿一にておはせしときに、内大臣になし奉り給ひて、我がうせ給ひし年、御病重くなるさはに、内へまゐらせ給ひて、己れかくまかりなやみ候ふほど、此の内大臣伊周のおとどに、百官並びに天下執行の宣旨給ふべきよし申し下さしめ給ひて、我れは出家せさせ給ひてしかば、此の内大臣殿を關白殿とて、世の人集まりまゐりし程に、粟田殿にわたりにしかば、手にすゑたる鷹をそらいたらむやうにて、歎かせ給ふ。一家にいみじき事におぼしなげきし程に、そのうつりつるかたも、夢の如くにてうせ給ひにしかば、今の入道殿、その年の五月十一日よりして、世をしろしめしゝかば、かの殿いとど無得におはしましゝ程に、又その年花山院の御事いできて、御官位とられて、たゞ太宰の權帥になりて、長徳二年四月廿四日にこそは下り給ひにしか。御年廿三。いかばかりあはれに悲しかりし事なりな。されどげに必ず、かやうの事、我がおこたりにて、流され給ふべくもあらず、萬の事身にあまりぬる人の、もろこしにも、此の國にもあるわざにぞ侍るなる。昔は北野の御事ぞかしなどいひて、鼻うちかむ程もあはれに見ゆ。此の殿も、御ざえ日の本にはあまらせ給へりしかば、かゝることもおはしますにこそは侍りしか。

語釋　○おほぢおとど　兼家　○あたらし　惜しい　○物よりぬけいで云々　衆物よりすぐれてゐる　○こと御はらから　他の御兄弟　○ざれをかしく　しやれて面白い　○此の方は異腹におはす　道頼は定子と異腹なりとのこと　○法師　隆圓僧都　○小千代君　伊周　○天下執行　天下の政事をとりおこなふ　○我れは　道隆　○粟田殿　道兼に關白がわたつた　○そらいたらむやうにて　わきの方にそらしたやうにて　○一家　伊周の一家　○うつりつる方　道兼　○今の入道殿　道長　○かの殿　伊周　○無得　不體裁　○花山院の御事　爲光に二人の娘あり、姉は伊周に通じ花山院は妹を寵し給うた、伊周は花山院の、姉に通ずと疑ひ、家來をして

花山院の在所を射さした不敬事件なり　○我がおこたり　我が過失　○北野　菅公　○鼻うちかむ　世繼は涙を流すなり　○此の殿伊周　○御ざえ日の本に云々　伊周の學才は日本にならぶものがない

通釋　其の他に聞え給ひし男君たちは、長男は故伊豫守守仁の女の腹であります。童名を大千代君と申します。それは祖父兼家の御子にしまして、道頼の六郎君と申しました。大納言までなりました。父の關白道隆の失せました年の六月十一日に、打ちつゞき失せました。御年二十五と申しました。御容貌甚だ清く、あまり惜しきさまで、物の中から拔け出でたやうでありました。御心持は異腹の伊周、隆家などに似ず、おだやかで洒落な人でありました。此の道頼は異腹であります。皇后宮と同腹の男君は法師で、十あまりの時に僧都になし奉りました。それも卅六で失せました。今一人は小千代君とて、彼の外腹の大千代君には此上なく官位を引越し、二十一になつた時に、内大臣になし奉つて、道隆薨去の年御病重くなる際に、參内して道隆言ふやう、私はかやうに病重くなりまゝたから、この内大臣伊周の大臣に百官及び天下の政治を執行する宣旨を給ふべきよし申しあげ下さしめ給うて、我は出家しました。故にこの内大臣伊周を關白殿とて、世の人あつまり參りし時に、關白は粟田殿道兼にわたりましたから、手にすゑた鷹を反らしたやうにて歎きました。伊周公一家は甚だ殘念なることに思ひなげきし程に、道兼も夢の如くにて失せました。然るに今の入道殿道長その年の五月十一日よりして、世の政治を執りましたから、伊周は甚だ態わろくなりました程に、又その年、隆家が花山院を射奉りしことが出できて、伊周も官位をとられて、たゞ太宰の權帥になつて、長德二年四月二十四日に下りました。御年二十三であります。どんなにあはれに悲しきことでありませう。されど、まことに、必ずかやうの事は、我が過失で流され給ふべきでない。萬の事才藝など身にあまる人は唐土でも日本でも、思はぬ不幸にあふことであります。昔の菅原公の事が、それであるというて、世繼は鼻をうちかむ程もあはれに見えます。伊周も才藝日本には餘るほどの人であつたから、かやうの不幸な事もあることでありませう。

□

さて、式部卿宮の生れさせ給へる御よろこびにこそは、召しかへされさせ給へれ。さて大臣になぞらふる宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまも、いと落ち居てもおぼえ侍らざりき。いと見苦しきことのみいかに聞え侍りし。さて、内に參らせ給ひけるに、北の陣より入らせ給ひて、西ざまにおはしますに、入道殿もさぶらはせ給ふほどなれば、梅壺の東の塀のはざまに、下人どものいと多くゐたるを、此の帥殿の御供の人々、いみじく拂へば、行くべき方のなくて、梅壺の塀の中にはら〳〵と入りたるに、これはいかにと殿御覽ず。あやしと人々見れど、さすがに、えともかくもせぬに、なにがしといひし御隨身のそらしらずして、あららかにいたう拂ひいだせば、又とざまに、いとらうがはしく出づるに、帥殿の供の人々、この度はえ拂ひあへねば、ふとり給へる人にて、すかやかにもえあゆみのき給はで、登花殿の細殿の蔀におしたてられ給ひて、やゝと仰せられけれど、せばき處にて、雜人いと多くはらはれて、おしかけられ奉りぬれば、とみにえのかで、いとこそ不便に侍りけれ。それはげに御罪にもあらねども、ただ花やかなる御ありきふるまひをせさせ給はずば、さやうに輕々なることはおはしますべき事かはとぞかし。

語釋　○式部卿宮　定子の御腹の敦康親王御生れになつたので伊周は罪を赦された　○なぞらふ　准ずる　○落ちゐてもおぼえ侍らありませう。

ざりき　甚だ了解に苦しむ所であるの意　○北の陣　朔平門　○入道殿　道長　○梅壺　禁中五舎の一なる凝花舎、庭に梅あるを以て名あり　○はざま　間　○下人　道長の供人の身分ひくきもの　○はら〳〵と　ばら〳〵と　○殿　道長　○えともかくもせぬに何ともすることはできずに　○御隨身　道長の隨身なり　○そらしらずして　知らぬふりをして　○とざま　外の方　○らうがはしく　亂れがましく　○ふとり給へる人にて　伊周はふとりてゐた人　○すかやかにもえあゆみのき給はで　敏捷に歩をうつしてさけることはできずに　○細殿　通り路につくれる細き間　○やゝと　聲をたてられたこと　○不便　不都合　○輕々しき　かろ〴〵しき○おはしますべき事かはとぞかし　あらうことか、否ないことであるよ。

通釋　さて式部卿敦康親王の御生れになつた御慶に召しかへされました。大臣に準ずるといふ宣旨を受けまして、かる〴〵しく出て歩きました有様は甚だ落ちついて居りませんでした。甚だ見苦しき事のみ、何ほどうわさせられたことよ。參内されるに、北の陣より入つて、西の方に參るに、道長も參内の折からとて、梅壺の東の塀の戸の間に、下人共が數多居りました。それをこの伊周公の御供の人々追ひ拂へば、下人共は行くべき方なくて、梅壺の塀の内にはら〳〵と走り入りました。これは如何なるわけかと道長は御らんになりました。けしからぬことと人々は見れど、併しながら、如何ともすることは出來ぬに、某といふ隨身は知らぬふりをして、荒らかに、ひどく拂ひ出せば、又外の方に、甚だ亂れ出るのを、伊周公の御供の人々、此の度は拂ふことは出來ないので、伊周は肥つた人で、はきはきと歩みのくことも出來ずして登華殿の細殿の蔀に押したてられて、やゝと仰せられたが、狹き所で雜人多く拂ひのけられて、押しかけられましたので、急に退き得ず甚だ氣の毒でありました。それはげに御罪でもないけれど、たゞ花やかなる御あるきをいたしませんならば、さやうにかる〴〵しきことはあるべきことか、決してあるべきことでない。

□

また入道殿の御嶽にまゐらせ給へりし道にて、帥殿の方より便なきことあるべしと聞えて、常よりも世を恐れさせ給ふに、平かに歸らせ給へるに、かの殿もかゝること聞えたりけりと、人の申せば、いとかたはらいたくおぼされながら、さりとてあるべきならぬば參り給へり。道のほどの物語などせさせ給ふに、帥殿いたく臆し給へる御氣色のしるきを、をかしくも、又さすがにいとほしくもおぼされて、「久しく雙六つかうまつらで、いとさう〴〵しきに、けふあそばせ」とて雙六の盤めして押拭はせ給ふに、御氣色こよなうなほりて見え給へば、殿をはじめ奉りて、參り給へる人々あはれになむ見奉りける。さばかりの事を聞かせ給はむには、少しすさまじくもてなさせ給ふべけれど、入道殿はあくまでなさけおはします御本性にて、必ず人のさ思ふらむ事をば、押返しなつかしくもてなさせ給ふなり。此の御博奕は、うちたゝせ給ひぬれば、二所ながら裸に腰からませ給ひて、夜半曉まであそばす。心をさなくおはする人にて、便なき事もこそいでくれと、人はうけ申さざりけり。いみじき御かけ物どもこそ侍りけれ。帥殿は古き物どもえもいはぬ、入道殿は新しきが興ある、をかしきさまにしなしつゝぞ、かたみにとりかはさせ給ひけれど、かやうの事さへ、帥殿は常にまけ奉らせ給ひてぞまかでさせ給ひける。かゝれど、……今は一の宮おはしますを、たのもしき物におぼし世の、もさはいへど、したには追從し、おぢ申したりし程に、今のみかど東宮さしつゞき生れさせ給へりしかば、世をおぼしくづほれて、月頃御病もつかせ給ひて、寛弘七年正月廿九日うせさせ給ひにしぞかし。御年三十七とぞうけたまはりし。

語釋　○御嶽　大和吉野山の高峰なる金峰山（きんぽうさん）　○便なきこと　悪いことをする　○世を恐れさせ給ふに　道長は　恐れつゝしんで居つたこと　○かの殿　伊周　○かゝること聞えたりけりと　或人は伊周に告ぐるに伊周公は悪いことをすると、道長に告げたものがあると　○かたはらいたくおぼされながら　笑止千萬とは思ひながら　○さりとて云々　そのまゝにしておけぬから道長に參つた　○道のほど云々　道長は途中の面白きこと　○さう〳〵しきに　さびしきに　○押拭はせ　道長がのごふのである　○御氣色こよなうなほりて　元氣づいたこと　○殿　道長　○さばかりの事　伊周が道長を害せんとすること　○すさまじくもてなさせ　不快なさまでもてなす　○押返し　惡感を押へる　○博奕　雙六の勝負　○うちたゝせ　うちはじむ　○裸に云々　はだかになつて腰にのみ物をからんで　○心をさなく　伊周の子供らしく思慮の足らぬこと　○うけ申さず　敬伏せず　○古き物ども云々　伊周は古きものをかけた　○新しき云々　道長は新しき面白みのあるものをこしらへて　○かたみに云々　互にやりとりした　○かやうの事さへ云々　此のやうなわづかなことでも、伊周はまけて退出し、道長のきげんをとつた　○世の人もさはいへど云々　世の人も惡口をいふが心では追從（つるしやう）して伊周をおそれた、即ち一の宮敦康親王の居らるゝ爲である　○今のみかど　後一條天皇　○東宮　後朱雀天皇　○さしつゞき　引きつゞいて　○おぼしくづほれて　落膽したるなり、即ち上東門院に二皇子の生れ給ひし爲なり

通釋　又入道殿御嶽に參りました道で、伊周公の方より道長に不都合な事をいたすだらうと聞えて、常よりも世をおそれさせ給うて、無事に歸り給ふに、かの伊周公も、或人より其の話を聞いて、甚だかたはら痛く思ひながら、そのまゝにしても居られぬから、道長を訪問しました。道長は御嶽の途中の話しなどされるに、伊周は甚だ臆した御氣色の著しきを、道長はをかしくも又、氣の毒にも思うて、道長言ふやう「久しく雙六をいたしませんで甚だ退屈であるから今日御やりなさい」とて雙六の枰（ばん）をめしてふきましたに、伊周の御氣色此上なく直つて見えましたから、道長を始め參り給へる人々はあはれに見えました。道長は、伊周の途中で不都合の事をするなどといふことを聞いてゐるから、少し疎（うと）〳〵しく待遇し給ふはずだのに、あくまでなさけ深くある御本性で、必ず人のそのやうに思ふだらうといふ事をば反對になづかしく思ふのであります。この雙六を打ち始めますと、二人ながらはだかになつて腰をまいて、夜半曉までやりました。伊周は幼稚なる心の有る人なれば、不都合なことも出てくると、人々は雙六をやることを善いことと思ひませんでした。さて立派な御かけ物をいたました。帥殿伊周は古き立派な言ふに言はれぬものをかけ、道長は新しき興ある面白いものをかけ、互にやりとりをしました。かやうの事さへ伊周は道長に遠慮して常に負けまして退き歸りました。併しながら唯今は伊周の御妹皇后の御腹に一の宮の居らるゝのを頼もしき物に思ひ、世の人もそのやうにいへど、したには道長のきげんを取り恐れ申した程に、後一條後朱雀さしつづいて上東門院の御腹に生れましたから、落膽されて、月頃御病もついて、寛弘七年正月廿九日失せましたのであります。御年三十七と聞きました。

□

限の御病とても、いたうくるしがり給ふこともなかりけり。御しはぶき病（やみ）にやなどぞおぼしける程に、重り給ひにければ修法（ずほふ）せむとて僧めせど、參るものなきに、いかがはせむとて、道雅（みちまさ）の君を御使にて、入道殿に申し給ひにけり、夜いたう更けて人もしづまりにければ、やがて御格子（みかうし）のもとによりて、うちしはぶき給ふ。たれぞと問はせ給ふに、御なのり申して、「しかじかの事にて、修法はじめむとつかうまつれど、阿闍梨にまうでくる人も候はぬを、請（しやう）じて給はらむ」と申しへ給ば、「いと不便なる御事かな。日ごろうけたまはらざりけれ、いかやうなる御心ちぞ、いとたい〳〵しき御事にもあるかな」と、いみじう驚かせ給ひて、「たれを召したるにまゐらぬぞ」など、くはしく問はせ給ひて、なにがし阿闍梨（あじやり）をこそは奉らせ給ひしか。されど、世の末は人の心も弱くなりにけるにや、悪しくおはしますなど申しゝか

ど、元方の大納言のやうにやは聞えさせ給ふる。また入道殿、なほすぐれさせ給へる威のいみじきに侍るめり。老の波にいひすごしもぞし侍ると、けしきだちて、この程はうちさゝめく。

語釋　○限の御病　死病　○しはぶき病　せきのでる病卽ち風邪か　○修法　僧の祈禱　○うちしはぶき給ふ　道雅は人のあるを道長に知らしめんとてせきばらひせしなり　○阿闍梨　加治祈禱する僧　○請じて給はらむ　僧を招くを御盡力を願ふ　○日ごろうけたまはらざりけれ　一向、病氣だといふことを知らずにゐた　○されど世の末は云々　伊周は道長を怨んでゐたから、薨後たゝりをなすなどと、世間の人はうわさしたが、末の世になつては、人の心も弱くなつたものと見えて、元方大納言の怨靈が冷泉院をなやました時のやうなことはなかつた　○また入道殿云々　また一方から見れば道長の威勢のすぐれた爲めでもあらう　○老の波に云々　老人のくせに言ひ過すと、世繼は憚るやうの詞子で、ひそ〳〵話した。

通釋　致命の病症とても、甚だ苦しがり給ふこともありませんでした。感冒の病であらうと思うてゐた中に重くなりましたから、修法しようとて僧を召しましたなれど、參るものもないので、如何はせんとて、道雅の君を使者にして、道長に依賴されました。夜甚だふけて、人もねしづまりましたれば、やがて道雅は格子のもとによつてせきばらひをしました。道長は誰れぞと問ひました。道雅は名のり申して、「伊周公病氣で修法はじめんとしたが阿闍梨に詣で來る人はない、僧を招いて下さい」と申しました。道長言ふやう、甚だ氣の毒なる事よ、病の事を聞いてゐませんでした。如何なる御心ちでありますか、甚だ怠々しき御事であると大におどろきまして、誰れを召したるに參らぬのですか、などと委しく問うて、なにがしの阿闍梨をつかはしました。さて世の末になつて人の心も柔弱になつたのか、伊周も道長を恨んで死んだなどと世人は評すれど、元方大納言のやうに惡靈となつたとは聞えません でした。また一方より見れば道長の威のすぐれ給うた故でありませう。老年の爲に言ひすごしたるかもしれぬと、容體ぶつて此の時は小聲で世繼はささやきました。

源大納言重光卿の御娘の腹に、女君二所男君三所おはせしが、此の君たち、皆おとなび給ひて、女君は后がねとかしづき奉り給ひしほどに、さま〳〵おぼしゝ事どもたがひて、かく御病さへおもり給ひにければ、此の姫君だちをするならべて、泣く〳〵の給ひける。「年ごろ佛神にいみじく仕うまつりつれば、何事も、さりともとこそ賴み侍りつれど、かくいふかひなき死にをさへせむことの悲しさ。かく知らましかば、君たちをこそ、我よりもさきにうせ給ひねと祈り思ふべかりけれ。己れ死なば、いかなる振舞ありさまをし給はむずらむと思ふが悲しく、人わらはれになるべき事」といひつゞけて泣かせ給ふ。「あやしき有樣をもしたまはゞ、なき世なりとも恨み聞えむずる」とぞ、母北方にも泣くなく遺言し給ひけるかし。其の君たち、大姫君は高松殿の春宮大夫殿の北の方にて、あまたの君達うみつづけておはすめり。それはあしかるべき事ならず。今一所は大宮にまゐりて、帥殿の御方とて、いとやんごとなくて候ひ給ふるめるこそは、おぼしかけぬ御有樣なめれ。あはれなめりかし。

語釋　○おとなび給ひて　成人して　○后がね　皇后にせんと思うてゐた　○するならべ　枕頭に並べ　○さりともとこと賴み侍りつれど　如何なることあつてもわが願はかなふことと賴もしく思うてゐた　○君たちをこそ云々　あなた方を父より早く死んでうきめを見ぬやうと祈る方がよかつた　○あやしき有樣　みぐるしきこと　○なき世なりとも云々　冥途から恨むといふ意　○母北方　姫の母にて伊周の妻　○高松殿の春宮大夫殿　道長の男、賴宗なり　○大宮　上東門院　○おぼしかけぬ御有樣なめれ　伊周の女にして道長の女に奉公せんとは意外に思ふことだらう　○あはれなめりかし　氣の毒と思はれる

通釋　源大納言重光卿の女の腹に女君二人、男三人居りましたが、この君たち皆成人して、女君は后したいと思うて大切に養育されし程に、さま〴〵思うた事などは違うて、かやうに病氣にさへなりましたから、此の姫君達をすゑ並べて、泣く〳〵御話しになられた。年來神佛に甚しく仕へましたので、何事も其の加護に由つて、然るべく立ち行かんと思うたのに、かやうに言ひやうのない死をさへすることの悲しいことよ。かやうの事がわかるならば君達を我より前に死ぬやうにも祈るべきであつた。已れ死んだならば如何なる振舞有樣をなし給はんと思ふのが悲しく、父なき後は人笑はれになるべきことと言ひつづけて泣きました。不都合なるわざを爲し給はゞ、死んだ後までも恨み申すと、母北の方にも泣くなく遺言なされました。其の君達の中の長女は高松殿の春宮大夫殿の北の方で、數多の君達を生みつづけてをるやうです。それは惡しかるべきことではない。今一人は上東門院に參つて、帥殿の御方というて、甚だ貴くて居られるが、嘗ては后と冊がんとのことであつたから、思ひがけぬ御有樣でありませう。哀れでありませうよ。

□

男君は松君とて、生れ給ひしより祖父おとどいみじきものにおぼして、迎へ奉り給ふたびごとに、贈物をせさせ給ひ、御乳母にも饗應し給ひし君ぞかし。此の頃三位しておはすめるは。此の君を、父おとどあなかしこ、我れなからむ世に、あるまじきわざをせず、又身棄てがたしとて、ものおぼえぬ名簿うちして、わがおもてふせて、いでや、さありしかど、かゝるぞかしと、人にいひのたてせさすな。世の中にありわびなむさはは、出家するばかりなり」と、泣く〳〵いひ仰せけるに、此の君、當代の東宮にておはしましゝをりの亮になり給ひて、いとめやすき事と見奉りしほどに、春宮亮道雅の君とて、いとおぼえおはしさかし。それもいかがしけむ、位に卽かせ給ひしきざみに、藏人の頭にもえなり給はで坊官の勞に三位ばかりし給ひて、中將をだにえかけ給はずなりにしこそ、いとかなしかりしことぞかし。あさましく思ひかけぬ事どもかな。この君、故帥の中納言惟仲の娘にぞすみ給ひて、男一人うませ給へりしは法師にて明尊僧正の御房にこそおはすめれ。女君いかが思ひ給ひけむ、みそかに逃げて、今の皇后宮にこそ參りて、大和宣旨とて候ひ給ふなれ。されば、年頃の妻子とやは賴むべかりける。中々それしもこそあなづりて、をこがましくもてなしけれ。あはれ、翁らが童部のさやうに侍らましかば、白髮をもそり鼻をもかきおとし侍りなまし。よき人と申すものは、いみじかりし名のをしければ、ともかくもし給はぬにこあめれ。さるは彼の君さやうにしれ給へる人かは、たましひはわき給ふ君をば。

語釋　○松君　道雅の幼名　○祖父おとど　道隆　○乳母　松君のめのと　○あなかしこ　よくつつしめ　○身棄てがたしとて　身を棄てゝ隱遁しがたしとて　○ものおぼえぬ名簿うちして　是非をわきまへず權門を歷訪して　○おもてふせて　かほのあがらぬやうに恥をかき　○いでや、さありしかど、かゝるぞかし　いや昔はあの家は盛んなものであつたが今は見るかげもないなど　○人にいひのたてさすな　人に言ひはやされるな　○世の中に云々　世の中に在るのがつらいとおもつたならば　○當代　後一條天皇　○亮東宮坊の次官　○いとめやすきこと　見ぐるしからぬこと　○位に卽かせ給ひしきざみに　後一條天皇の卽位の際に　○坊官の勞　東宮坊の亮たりしときの功勞　○えかけ給はず　兼ねることはできずに　○明尊僧正　延曆寺の座主　○女君　惟仲の女にして道雅の內室　○みそか　ひそか　○大和宣旨　後に大和守義忠の妻となりし故に大和宣旨の名あり　○年頃の妻子とやは賴むべかりける長年つれそうた妻でも賴みにならぬ　○中々それしもこそ　かへつて、そのやうな女こそ　○をこがましくもてなしけれ　夫を愚弄するものである　○童部　世繼は自分の妻をいふ　○白髮をも云々　不貞の妻の白妻をそりはなをきるとのこと　○さるは　其の

故は　○彼の君　道雅　○しれ給へる人かは　愚かな人でない　○たましひはわき給ふ君をば　心明にして是非をわきまへる君なるものを

通釋　男君は松君とて、生れてすぐに祖父大臣道隆は非常に寵愛して、迎へまする度ごとに贈物をいたし、御乳母にも饗應などいたしました。此の頃三位になつて居られます。此の君に父大臣伊周は言ふやう、あはれ謹んで、我死んだ後に不都合な事をせず、又出家遁世は出來ないとて、思ひもよらぬ名札などを人に捧げて、我が面をけがし、いやもう、時にあひし當時はさてもあつたが、世の轉變にあつて、かく時に從ふのであるなど、人に遭つて遁辭を言ふな。世の中に在ることをつらく思ふ時は出家するのみであると、泣くなく話された。此の君は後一條院の東宮にあられた時の亮になりまして、見苦しからぬ事と兒奉りし程に、春宮の亮道雅の君とて、甚だ世の善き聞えありました。それも如何いたしたのか、後一條院の位に卽かれた時に、藏人頭にもなり得ないで、春宮坊の官人の功勞に由つて、三位のみになつて、中將をだに兼ぬることは出來ぬやうになつたことは、甚だ悲しいことであります。あさましく思ひがけぬ事であります。此の君は故帥の中納言惟仲の娘にすみ給うて、男一人生みたるは、法師にて明尊僧正の御房であるやうです。女君は如何思ひましたか、ひそかに逃げて、今の皇后宮に參つて、大和宣旨とて仕へてをりました。されば年來の妻子というても賴まれぬものである。かへつて、それも侮つて馬鹿らしき行爲をするのであります。あはれ、翁らが妻が、そのやうであつたならば、白髮をも剃り落し、鼻をもかき落してやらう、貴い人は立派な名が惜しいからなんともしないのであらう、その故は道雅の君はさやうに愚痴の人であらうか、何事も辨へ給ふ君であるのに。

□

帥殿は、此の内の生れさせ給へりし七夜に、和歌の序題かゝせ給へりしぞかし。中々心なき事やな。本體はまゐらせ給ふまじきを、それにさしいで給ふより、多くの人の目をつけ奉りて、「いかにおぼすらむ、なにせむに參り給へるぞ」とのみ見守られ給ふ。いとはしたなき事にはあらずや。それに此の入道殿は、ことにすさまじからずもてなし聞えさせ給へるかひありて、にくさはめでたくこそ書かせ給へりけれ。當座の御おもては優にて、それにこそ人々ゆるし申し給へけれ。

語釋　○帥殿　伊周　○此の内　後一條天皇　○序題　序文なり　○本體はまゐらせ給ふまじきを　本來ならば世に容れられぬをはぢて、かゝる場合に參らぬのは至當だ　○いかにおぼすらむ云々　世人の評なり　如何なる考だらう、何の爲に參内せられたのかはしたなき　不體裁なこと　○此の入道　道長　○すさまじからず　伊周のきげんをそこねないやうに　○にくさはめでたく　にくゝ思はれるほどよくかいた　○當座の御おもて　其の時は　面目をほどこした　○それにこそ人々云々　その爲めに人々も伊周の振るまひをとがめなかつた

通釋　伊周は後一條院の生れ給ひし七夜に、和歌の序文を書かせられました。伊周にとつては、敵ともいふべき道長の女の生み給へる御子の爲に、序文を書いたことは、かへつて考のなきことでありますよ。全體ならば、參り給ふまじきを、それにさしいでられるから、多くの人に注目されて、如何に思ふらん、何の爲に參りたるなどと目をつけられました。甚だ間のわろきことでないか。それに道長は、まことにうと〳〵しからず待遇したかひあつて、氣味わろく思ふことには、立派に序文を御書きになりました。後日のそしりは、ともかくも、其の場は面目をほどこして、それにて人々は伊周の參會せしことを承知したのであります。

□

此の帥殿の御一つ腹の、十七にて中納言になりなどして、世の中のさがなものといはれ給ひし殿の御童

名は、阿古君ぞかし。此の兄の殿の御のゝしりにかゝりて、出雲權守になりて、但馬にこそおはせしか。さて帥殿のかへり給ひしをり、此の殿も上り給ひて、もとの中納言になりて、又兵部卿などこそは聞えさせしか。それも、いみじう、たましひおはすとぞ、世の人に思はれ給へりし。あまたの人々の下蔭になりて、かた〳〵すさまじくおぼされながら、あるかせ給ふに、御賀茂詣につかうまつり給へるに、むげに下りておはするが、いとほしくて、殿の御車にのせ奉らせ給ひて、御物語こまやかなるついでに、「一年の事は、おのれが申し行ひたるとぞ世間にいひ侍りける。そこにもしかぞおぼしけむ。されども、さもなかりし事なり。宣旨ならぬこと、一言にても加へて侍らましかば、此の御社にかくて參りなましや。天道も見給ふらむ、いとおそろしき事」とまめやかにのたまはせしなむ、中々におもておかむかたなく、すべなくおぼえしとこそ、後にのたまひけれ。それも、此の殿におはすれば、さやうにもおほせらるゝにぞ、帥殿には、さまでもやは聞えさせ給ひける。此の中納言殿は、かやうに、えさりがたきことのをり〳〵ばかりあるき給ひて、いと古のやうにもまじらひ給ふことはなかりけるに、入道殿の土御門殿にて御遊びあるに、「かやうの事に權中納言のなきこそ、猶さう〳〵しけれ」との給はせて、わざと御消息聞えさせ給ふほど、盃あまたたびになりて、人々亂れ給ひて、紐おしやりて候はるゝに、此の中納言まゐり給へれば、うるはしくなりて、ゐなほりなどせられければ、殿「とかく御紐とかせ給へ、ことやぶれ侍りぬべし」と仰せられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿うしろより解き奉らむとて、寄り給ふに、中納言殿御けしきあしくなりて「隆家は不運なることこそあれ、そこたちに、かやうせらるべき身にもあらず」とあらゝかにのたまふに、人々御けしき變り給へる中にも、今の民部卿殿はうはぐみて、人々の御顏をとかく見給ひつゝ、ことといできなむず、いみじきわざかなとおぼしたり。入道殿打笑はせ給ひて、「今日はかやうの戯れごと侍らでありなむ。道長とき奉らむ」とて、寄らせ給ひて、はら〳〵と解き奉らせ給ふに「これらこそあるべきことよ」とて、御けしきなほりて、さしおかれたる盃とり給ひて數多たびめし、常よりも亂れ遊ばせ給ひけるさまなど、あらまほしくおはしましけり。殿もいみじうおもてはやし聞えさせ給ひけり。さて式部卿の御事をのみ、さりともさりともと待ち給ふに、一條院の御惱み重らせ給ふきはに、御前にまゐり給ひて、御氣色給はりたまひければ「あのことこそつひにえせずなりぬれ と仰せられけるに、「あはれの人非人やと申さまほしくこそありしか」とこそのたまひけりれ。さてまかで給ひて我が御家のひがくしの間に尻うちかけて、手をはた〳〵とうちゐたまへりける。世の人は、宮の御事ありて、此の殿の殿御うしろみもし給はゞ天下の政はしたゝまりなむとぞ思ひ申したりしかども、此の入道殿の御榮えのわけらるまじかりけるにこそは。三條院の大嘗會の御禊に、きらめかせたまへりしさまなどこそ、常よりもことなりしか。人の、このきはは さりともくづほれ給ひなむと思ひたりし所を、たがへむとおぼしたりしなめり。さやうなる所のおはしましゝこそ。節會行幸には、皆練重はたてまつらぬ事なるを、單衣青くて着けさせ給へれば、紅葉重にて、表の御袴、龍膽の

二里織物にて、いとめでたく、けうらにこそさらめかせ給へりしか。

語釋 ○さがなもの　にくまれもの　隆家をいふ　○のゝりにかゝりて　さわぎに關係して　○たましひ　才幹　○人々の下萬　各人の下位に居ること　○かたゞ〳〵すさまじくおぼされながら　なにかにつけて不愉快のことがあつた　○あるかせ給ふ　世に交はること　○御賀茂詣　關白道長の參詣なり　○つかうまつり　隆家は供せしなり　○むげに下りておはするがいとほしくて　多くの公卿の下に隆家の居るのを道長は氣の毒に思うて　○一年の事　伊周、隆家流罪のこと　○そこにも　隆家をさす、足下の義　○さもなかりしことなり　さやうではなかつた　○中々におもておかむかたなく云々　隆家は後に語りしなり、卽ち却つてはづかしく居たまらぬ心地したとのこと　○此の殿におはすれば云々　此の平素重んじてゐる隆家ゆゑに、道長も辨解したので伊周にならば、それほどには言はなかつた　○えさりがたき事の云々　已むを得ぬことの外は外出もせずして、古のやうに交際はしなかつた　○土御門殿道長の邸なり　○權中納言　隆家　○さうざうしけれ　さびしい　○わざと御消息云々　隆家に音信をして招いた　○紐おしやりて云々　直衣などの入紐をときてくつろげるなり　○此の中納言　隆家　○うるはしくなりて　まじめに行儀正しくなりて、卽ち隆家の謹嚴なるさまをはばかれるなり　○殿　道長　○ことやぶれ侍りぬべし　あなたは謹嚴にしてゐられると折角の興がさめるとのこと　○かしこまりて逗留し給ふを　つゝしんで御うけをして、其のまゝに紐をとかずにゐた　○公信卿　師輔の孫爲光の男なり　○御けしきあしくなりて　立腹した　○不運　ふしあはせ　○そこたちに云々　足下らになぶりものにされる身分のものではないんとす○いみじきわざ　大變なこと　○これこそあるべきことよ　道長が我ひもをとくは當然であるとて　○あまらほしくおはしまし　したり氣味よく感じた　○式部卿　敦康親王にて隆家の妹定子の御腹なり　○さりとも〳〵云々　今かくの如くおちぶれても　○御氣色給はりたまひければ　陛下の思召を伺つた　○あの事こそつひにえせずなりぬれ　敦康親王を東宮にすることは、できぬことになつた陛下の御言葉だ　○あはれの人非人やと申さまほしくこそありしか　道長を人非人と御前で辱しめてやりたかつたと後にいはれた　○ひがくしの間　南庭より殿舍の階段を昇りたる所の間　○手をはた〳〵とうちゐたまへりける　くやしき爲に思はずたゝけるものならむ　○宮の御事ありて　敦康親王東宮に立つて　○此の殿　隆家　○したたまりなむ　よく調ふことならん　○わけらるまじ　他に分與する　○御禊　前に記せり　○きらめかせたまへりし　隆家のうつくしく着かざりて御供したときのさま　○このきはは　此おちぶれし際　○さりともくづほれ給ひなむと思ひたりし所をたがへむとおぼしたりしなめり　失意の場合であるから剛膽なる隆家も、打ちしほれてしまふなど世人が思うたのを人の意表に出でんとて、かく着かざりしならんとのこと　○さやうなる所のおぜしましゝこそ　かくの如く人と異れる性格があつた　○皆練重衣服の裏表ともに紅の練絹なるをいふ　○たてまつらぬこと着用せぬこと　○單衣青くして着けさせ給へれば云々　下に青い單衣を着て皆練重を着てゐられたから所謂紅葉重である　○表の御袴　束帶の時に用ゐる袴　○龍膽の二重織物にて　龍膽は襲の色目なり。表は蘇芳、裏青、又表黃、裏青ともいふ。二重織物は綾の地文に更に他の文をおりいだせるをいふ　○いとめでたく　甚だ立派に　○けうらにこそ　美しくはなやか

通釋 この伊周の御一つ腹の、十七で中納言になりなどして、世の中の意地わるものといはれました隆家の御童名は阿古君であります。この伊周の騷動にかかつて、出雲の權守になつて、但馬に居りました。さて伊周の太宰府より歸りし時、この隆家も都にかへつて、もとの中納言になりました。又兵部卿などとも申しました。隆家は大に思慮があるとのことであります。世の人にもかやうに思はれました。あまたの人々より官位は下になつて、不愉快に思はれながら、出でゝ歩かれました。關白道長の賀茂詣に御供しましたに、甚だ官位低くあるのがかはいさうで道長の御車に乘せまして、こまかに話をされるついでに、道長のいふやう、伊周左近の事は私が申しあげて行うたと世間には言うてゐます。あなたにもさやうに思ひませう。されどさやうではありません。宣旨でないことを一言でもつけ加へてあつたならば、今日此の社にかやうに參詣しませうか。天道も見て居らう、甚だおそろしき事とまじめに御話しになりました。かへつて氣の毒で顏をそむけて、せん方なく思うたと、後に隆家は人に話されました。それも隆家であるから、道長もさやうに仰せられるのである。伊周には、そのやうな取りつくろひきげんを取る言葉を申しますまい。此の隆家はかやうに餘儀なき時のみ歩きまして、古のやうに人と交際することもなかつたに、入道殿は土御門の邸で宴會を催されることあつたとき、かやうの時に隆家の居らぬはさびしいと仰せられて、わざと

書狀をやつて招きましたに、盃を幾たびを重ねて、人々は醉ひ亂れまして、裝束の紐を解いて居りました。其の時隆家まゐりますと、一座まじめになつて、ゐなほりました。道長は隆家に言ふやう、とかく裝束の紐を解いてくつろぎ給へ、折角の興はさめるだらうと仰せられた。隆家はかしこまつて躊躇してをられた時、公信卿は後より紐を解き奉らんとて、寄り給ふに、隆家は氣色あしくなつて、隆家は不運である、御身たちにかやうにせらるべき身ではないと、荒々しく言ふに、人々は顏色變り給へる中にも、今の民部卿俊賢は驚きあきれて、人々の顏をとやかく見給ひつゝ、大事起らんとしてゐる、えらい事であると思ひました。入道殿は笑ひまして、今日はかやうのたはむれ言はいはぬがよい、道長が紐を解きませうとて、寄つてはら〳〵と解きましたに、これこそ我が望む所であるとて、氣色なほつて、下に置いた盃を取りまして、數盃を重ね、常よりも亂れあそびましたさまは、さやうにありたいものと思ひました。道長も大に取り持つて、もてはやしました。さて式部卿敦康親王のことのみ皇太子に立て給はんと待ちましたに、一條院の御病重らせたまふ時に、御前に參つて、御機嫌を伺ひましたれば、帝の仰せに、皇太子に立てえなかつたと仰せられました。隆家は道長をのゝしつて、あゝ人でなしと言ひたくあつたと、後に話されました。さて退りかへつて、我が家の日がくしの間に尻をうちかけて、嘆息して手をはた〳〵と打ちました。世の人は敦康親王が卽位せられて、隆家は御後見をしましたならば、天下の政治は調ふだらうと思し申したけれど、此の道長の御榮えは人に分けられぬことでありましたらう。さて三條院の大嘗會の御禊にかがやくばかり裝はれましたさまは、常よりも、ちがつてゐました。世の人がかやうの時は隆家も意氣消沈するだらうと思ひました所を、裏ぎらうと思うたためであります。隆家はさやうの御本性のあつた人であります。節會や行幸には皆練重は着用せぬことなるを、單衣を青くして着用しますと紅葉重の如くなつて、表の御袴、龍膽の二重織物で、甚だ結構に清く、かがやくばかりにせられました。

□

御目そこなはれ給ひしこそ、いと〳〵あたらしかりしか。よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給ひて、御まじらひ絶え給へるころ、大貳の闕いできて、人々のぞみのゝしりしに、唐人の目つくろふがあなるに見せんとおぼして、試にならばやと申し給ひければ、三條院の御時にて、又いとほしくもやおぼしめけむ、二言となくならせ給ひしぞかし。其の御北方は、伊豫守兼資のぬしの御娘なり。その御腹の女君二所おはせし。一所は、三條院の御子の式部卿の宮の北方、今一所は、傳殿の御子の小宰相のうへとぞ聞ゆめる。二所の御聟を取り奉り給ひて、いみじういたはり聞え給ふめり。

語釋　○御目のそこなはれ　眼病にかゝる　○あたらし　惜しい　○よろづにつくらふ　色々療治する　○やませ給ひて　病が重るなり　○まじらひ　交際　○大貳の闕　太宰の大貳がかけた　○唐人の云々　支那人の眼醫者　○いとほしく云々　三條院は氣の毒におぼしめしたるなり　○二言となく　一言でできた　○其の北方　隆家の內室　○式部卿の宮　敦儀親王　○傳殿の御子、道綱の子兼經

通釋　隆家の眼病にかかつたことは、甚だ惜しいことでありました。色々療治しましたが、直りませんで、交際も絶えました頃、太宰の大貳の缺員出できて、人々は望みましたとき、支那人で眼の醫師があるに、見せやうと思うて、こゝみに大貳にならうと申しましたれば、三條院の御時で、又氣の毒に思し召されたるか、一言でできました。隆家の北の方は、伊豫守兼資のぬしの御女であります。その御腹の女君二人居りました。一人は三條院の御子の式部卿の宮の北の方で、今一人は傳殿の御子の小宰相の北の方といふことです。二人の聟を取りまして、甚だ大切にいたしてゐるやうであります。

□

政よくし給ふとて、筑紫人さながら從ひ申したりけり。例の大貳十年がほどにて、上り給へりとこそ申しゝか。彼の國に御はしましゝほど、刀伊の國のもの、にはかに此の國を討ち取らむやと思ひけむ、越え來りけるに、筑紫には、かねての用意もなくて、大貳殿、弓矢の本末をも知り給はねばいかがとおぼしけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後肥前肥後九國の人をおこさせ給ふをばさるものにて、府の内に仕うまつる人をさへおしとりて、戰はしめ給ひければ、かやつが方のものども、いと多く死にけるは。さはいへど、家高くおはします故に、いみじかりし事たひらけ給へりし殿ぞかし。おはやけ、大臣大納言にもなさせ給ひぬべかりしかど、御まじらひ絶えにたれば、たゞにはおはするにこそあめれ。此の中に、むねと射かへしたるものどもしるして、おほやけに奏せられたりしかば、皆賞せさせ給ひにき。種材は壹岐守になされ、其の子は大宰監にこそはなさせ給へりしか。此の種材がぞうは純友うちたりしものゝすぢなり。

語釋　○刀伊　女眞なり　○又女直靺鞨ともいふ　○大和心かしこく　膽力も才力もあること　○府の内に云々　太宰府の役人まであつめて　○かやつが　彼の奴　○さはいへど　沈淪してゐても　○おほや　朝廷　○御まじらひたえにたれは　世間との交際がたえたること　○ただにはおはするにこそあめれ　昇官もなく其のまゝにしてをられた　○むねと射かへしたるものども　おもなる勳功者　○ぞう　一族なり。即ち純友を討ちたる春實の子孫である

通釋　政事むきがよいとて、九州の人々は皆從ひました。例の大貳となつてをらるゝこと十年程で、都にかへり給うたと申しました。太宰府に居つた時、刀伊の國のもの此の國を伐り取らうと思うてあつたらう、海を越えて來りましたに、筑紫では前よりの用意もなくて、隆家も弓矢の本末をもわきまへぬ武術に不案内の人であつたが、大和心かしこく御座する人で、筑後肥前肥後九國の人を起し給ふは勿論で、太宰府の内に仕ふる人をさへかりあつめて、戰はしめましたれば、敵の者などは多く戰死しました。武事に暗しとはいへども、家系の高き故に、非常なる事を平げ給ひし殿であります。朝廷にては、大臣大納言にも爲すべき人であつたけれど、世の交際は絶えましたので、只もとのまゝにてあるやうです。此の度の戰に主として防戰したるものの名を記して、朝廷に奏しましたので、皆賞せられました。種材は壹岐守になされ、其の子は太宰監になされました。此の族は純友を討ちましたものゝすぢであります。即ち祖父春實は天慶の亂に、純友征討に加つた人であります。

□

此の純友は、將門同じ心にかたらひて、恐しき事企てたるものゝ。將門は、みかどを討ちとり奉らんといひ、純友は關白にならむと、同じく心をあはせて、此の世界に我れと政をし、君となりてすぎむといふことを契り合はせて、一人は東國にいくさを整へ、一人は西國の海に、いづくともなく、大筏を數知らず集めて、筏の上に土を伏せて、植木をおふし、四方山の田を作り、住みつきて、大かた、おぼろげのいくさにどうずべくもなくなりゆくを、かしこくかまへて、討ちて奉りたるは、いみじき事なり。それはげに、人のかしこきのみにはあらじ。王威のおはしまさん限りは、いかでかさることはあるべきとおぼえて。さて壹岐對島の人をいと多く刀伊の國にとりもていきたりければ、新羅のみかど、いくさを

おこし給ひて、皆うちかへし給ひてけり。さて使を付けて、たしかに此の島に送り給へりければ、彼の國の使には、大貳金三百兩とらせて、かへさせ給ひける。此の程の事ども、かくいみじくしたゝめ給へるに、入道殿この帥殿を棄てぬものに思ひ聞えさせ給へるなり。さればにや、世にもいとふりすてがたきおぼえにてこそおはすれ。みかどには、いつかは馬車の三つ四つたゆる時のある、又道もさりあへず、たつをりもあるぞかし。

語釋　○同じ心にかたらひて　結托する　○我と政をし　勝手に政事をとる　○植木をおふし　植木をうゑ　○四方山　多くの　○住みつきて　すみなれて　○おぼろげの軍　普通の軍勢　○どうずる　動搖する　○かしこく構へて　巧に謀をめぐらして　○とりもていきたりければ　とりこにして行つた　○うちかへし　取かへし　○帥殿を棄てぬものに云々　道長は隆家を重んじたるをいふ　○世にはいとふりすてがたきおぼえにてこそはおはすれ　世間の人からも重く思はれてをられる　○みかどには　門前には　○いつかは云々　何時も馬車の三つ四つたゆる時はない　○道もさりあへずたつをりもあるぞかし　往來を通れないほど車がならんで居る時もあつて毎日訪問する客は多い

通釋　此の純友は、將門と心を合せ相談して謀反を企てた人であります。將門は天皇を討ち取り奉らうといひ、純友は關白にならんと、同じく心を合せて、此の世界に我が思ふまゝに、政事を執り、君となつて暮さうといふ事を約束して、將門は東國に軍を整へ、純友は西國の海にいづくともなく、大筏を澤山あつめて、筏の上に土をのせて植木をうゑ、四方山卽ち澤山の田を作り、住みついて、大方尋常の軍には怖るゝさまもなくなりゆくを、巧に謀をめぐらして、討つて奉りたるは、立派な事でありますよ。それはまことに人の賢きのみではなく、王威のあるかぎりは、いかでか王位を望むものに成功することがあらう。さて壹岐對島の人々を多く刀伊の國に捕へて行きましたれば、新羅の王は軍を起して、皆取り返しました。そして使をつけて、たしかにその島に送りましたから、新羅の使には、隆家は黃金三百兩をあたへて歸しました。この程の事も、かやうに立派に取り行ひましたので、道長は此の隆家を必要な人に思ひました。されば世にもふり捨てがたく賴もしく思はれ、御門にはいつも馬車の三つ四つはたえずありました。又道も避けて通ることの出來ぬほど一杯に馬車のたつこともありました。

□

此の殿の御子、男君、只今の藏人少將良賴の君、又右中辨經輔の君、又式部丞などにておはすめり。まことに世にあひて、花やぎ給へりしをり、此の帥殿は花山院とあらがひごと申させ給へりしはとよ。いと不思議なりし事ぞかし。「わぬしなりとも、我がかどはえ渡らじ」と仰せられければ、隆家「などてか、まかりわたり侍らざらむ」と申し給ひて、その日と定められぬ。輪つよき御車に逸物の御牛かけて、御烏帽子直衣いとあざやかにさうぞかせ給へり。えび染の御物の御奴袴少しゐいでさせ給ひて、祭のかへさに紫野はしらせ給ふ君達のやうに、踏板に、いと長やかにふみしだかせ給ひて、くくりは地にひかれて、簾いと高やかにまきあげて、雜色五六十人ばかり、聲のあるかぎり、ひまなく御ささまねらせ給ふ。院は更なり、えもいはぬ勇悍幹了の法師ばら、大中童子など合せて七八十人ばかりに、大いなる石、五六尺ばかりなる杖ども持たせて、北南の御門築地づらに、一條の前、洞院のうらうへに、ひまなくたてなめて、御門の內にも、さぶらひ、僧の若やかに力强きかぎり、さる役して候ふ。さることを

のみ思ひたる上下の、けふにあへるけしきどもは、げにいかがはありけむ。いづかたにも石杖ばかりにて、まことしき弓矢までは設けさせ給はず。中納言殿、御車一時ばかりたて給ひて、勘解由小路より北に、御門近くまでは、やりよせ給へりしかど、なほえ渡り給はで、還らせ給ふに院方にそこらつどひたるものども、一つ心に目をかため守り〳〵て、やりかへし給ふほどは、一度に笑ひあはせたりし聲こそ、いとおびたゞしかりしか、さるものやは侍りしとよ。「王威はいみじきものなりけり。え渡らずなりぬるよ。無益の事をいひてけるかな。いみじきぞくがう取りつる」とてこそ笑ひ給ひけれ。院は勝ちえさせ給ひけるを、いみじとおぼしたるさまも、ことしもあれ、まことしき事のやうなり。

語釋　○あらがひごと　爭ひいとむことば　○わぬしなりとも云々　院の御言葉なり、其の方でも我が門前は通ることはできまい　○などてかまかりわたり侍らざらむ　なぜに通られぬことはありませうか、通つて御覽に入れます　○輪のつよき　車の輪のつよき　○逸物　すぐれたもの　○えび染の織物　葡萄染の絲にておりたるあや　○奴袴（しぬき）　前にあり　○ゐいでさせ　普通より前に出てすわる　○踏板　車の前に横る板　○いと長やかにふみしだかせ　奴袴のすそを長くふしだらに出して　○くくりは地にひかれて　奴袴のくくりひもは地をひきずつてゐる　○えもいはぬ勇悍幹了の法師　すぐれて勇猛で器量のある法師　○大中童子　寺に居る大中小の童子なり　○築地づらに　築地のきはに　○さることをのみ思ひたる上下の云々　こんなことばかり好まれる上下の人々　○一時ばかりたて給ひて　一時間程車を立てゝ御覽になつてゐた　○やりよせ給へりしかど　車を進めよせたなれど　○なほ渡り給はで通りませんで　○そこら　澤山　○一つ心に目をかため守り〳〵て　みんな目をはつて、のがさずと見つめてゐた　○ぞくがう　辱垢にて、はぢをかきたるをいふ　○ことしもあれまことしき事のやうなり　事もあらうに、かゝるたはふれごとにかちて大事にかちたるやうの有樣なりと評したのである

通釋　この隆家の御子の男君は、只今の藏人の少將良頼の君、又右中辨經輔の君、又式部丞などでありませう。まことに世にあひて花やかに榮えてゐた時、この隆家は花山院と爭ひごといたしたといふことです。甚だ不思議なことであります。花山院のたまふやう、わぬしでも我が門は通ることは出來まいと仰せられました。隆家はなどて通ることができなからう、出來ますと申しまして、その日を定められました。隆家は輪の强き車に優秀なる牛をかけて、御烏帽子、直衣いとあざやかにしたくをされました。葡萄（えびぞめ）染の織物の御差貫をはいて少し足を踏み出しまして、祭の歸りに紫野を走らせる君達のやうに、踏板に甚だ長く荒らかに踏み立て給うて、くくりの紐は土にたれて、簾を甚だ高く捲きあげて、雜色五六人ほど、聲のあるたけ絶ゆる間なく御さき拂ひをして參りました。花山院は勿論、剛勇慓悍なる法師たち、及び法師の連れたる大童子中童子など合せて七八十ばかりに大なる石、五六尺ほどなる杖を持たせて、北南の御門、築地面に、一條の前、洞院の表裏に、すきまなく立て並べて、御門の內にも、侍や僧の若くて力强きものをあつめて然るべき用意をしてゐました。さやうの事のみ待ちまうけてゐた上下の人が、今日の爭ひにあつて得意のありさまは、げにどうであつたらう。何方にも石、杖のみで、まことの弓矢までは用意してゐません。隆家は御車を一時ほど立て給うて、勘解由小路よりは北に、御門近くまでは遣りよせましたが、やはり通りかねて歸り給ふに、院方に澤山集つてゐるものども、心を一つにし、眼を注ぎて、もし門前を通らば辛き目を見せんと、またゝきもせず見守りゐたのに、隆家は車をかへしましたので、諸方一度に大聲あげて笑うた聲は、まことにおびたゞしきことで、かゝる面白き物は外にありませんでした。隆家は王威は大層なものであります。通ることは出來ません、無益の事を言うて、甚しき辱を取つたとて笑ひました。院は勝ちましたことを、えらいと思ひ給うたさまであつたが、事柄もあらうにかゝるたはふれごとに勝ち給ひしとて人はさほどに思はないが、御みづからは眞に大事件の爭ひに勝たれたやうな御有樣でありました。

□

此の帥殿の御はらからといふ君たち、かずあまたおはせし。頼親の内藏頭、周頼の木工頭などいひし人、かたはしよりなくなり給ひて、今は只兵部大輔周家の君ばかり、ほのめき給ふなり。小一條院の御宮達の御乳母の夫にて、院の恪勤してさふらひ給ふ。いとかしこし。また井手少將とありし君は出家とか。故關白殿、御心おきていとうるはしくあてにおはしましゝかど、御末のあやしく、御命もみじかくおはすめり。今の入道一品宮と、此の帥の中納言殿とのみこそは、のこらせ給ふめれ。

語釋 ○ほのめき　少し顯はれてゐる　○恪勤　雜役をつとむるもの　○故關白　道隆　○御心おきていとうるはしく　心の持方正しく　○あて　上品　○御末のあやしく　子孫は榮ゆべきに榮えざりしなり　○今の入道一品宮　皇后定子の御腹の脩子

通釋 この隆家の兄弟といふ君たち、數多をられますが、頼親の内藏頭、周頼の木工頭などいひし人、かたはしより亡くなりまして、今はたゞ兵部の大輔周家の君ばかり僅に世に出てをります。小一條院の御宮達の御乳母の夫で院に勤仕してをります。甚だ畏れ多いことであります。また井手の少將といふ君は出家したとか申します。故關白道隆は御心の持方甚だうるはしく、貴くありましたが、御子孫は官位淺く御命も短くあるやうであります。今の入道一品宮脩子とこの隆家とのみこそ殘つたやうであります。

右大臣道兼

此のおとどは、これ大入道殿の御三郎、粟田殿とこそは聞えさすめりしか。長德元年乙未五月二日、關白の宣旨かうぶらせ給ひて、同じ月の八日にうせさせ給ひにき。御年三十五とぞ聞えし。大臣にて五年關白と申して七日こそおはしましゝか。此の殿ばらの御族に、やがて世をしろしめさぬたぐひ多くおはすれど、まだあらじかし、夢のやうにてやみ給へるは。出雲守相如のぬしの御家に、あからさまに渡り給へりしをり、關白の宣旨の下りしかば、あるじのよろこび給ひたるさま、おしはかり給へ。せばくて、ことの作法もあるまじとて、たゝせ給ひし日ぞ御よろこびをも申させ給ひし。殿の御前は、えもいはぬものゝ限すぐられたるに、北の方の二條に歸り給ふ御供の人は、よきもあしきも、數知らぬまで布衣などにてあるもまじりて、殿いだしたて奉りて、渡り給ひしほどの、殿のうちの榮え、人のけしきは、たゞおぼしやれ、あまりにもと見る人もありけり。御こゝちは少し例ならずおぼされけれども、おのづからの事にこそはと、いま〳〵しく、今日の御よろこび申しとどめしとおぼして、念じて内に參らせ給へるに、いと苦しくならせ給ひにければ、殿上よりは、え出でさせ給はで、御湯殿の馬道の戸口に、御前を召して、かゝりて、北の陣より出でさせ給ふに、こは如何にと人々見奉る。殿には常よりも經營して、待ち奉り賜ふに、人々にかゝりて御冠もしどけなくなり、御紐おしのけて、いといみじう苦しげにておりさせ給へるを見奉り給へる御こゝち、出で給ひつるをりにたとしへなし。されどたゞ、さりともと、さゝめきにこそさゝめけ、胸はふたがりながら、こゝちよがほを作りあへり。されば、世にはいとおびたゞしくも聞えず

語釋　○大入道　兼家　○まだあらじかし　七日にして給はりし夢のやうな日はないとのこと　○相如（すけゆき）　藤原時平の曾孫なり　○あからさま　かりそめに　○ことの作法もあるまじとて　萬事の作法もできない　○たゝせ給ひし日ぞ御よろこびをも云々　相如の家を立つて二條の邸に歸られた日に拜賀せしなり　○御前（ごぜん）　前驅　○布衣云々　布衣を着用した人もまじつて相如の家から道兼を送りだして二條の邸に着いた時のにぎやかさ、人々のよろこびのさまは只想像してくれよとの意　○あまりにもと見る人もありき　世間ではあまりひどいとそしりたるものもあつた　○少し例ならず　少し病氣だ　○おのづからの事にこそはと云々　自然の疲れであらうと思ひ、此のめでたい日に緣起はわるいから、とにかく今日の御禮を申しあげんと思うて忍耐して參内した　○御湯殿　天皇御入浴の處なり　○馬道　廊下　○かゝりて　肩にかゝる　○北の陣　朔平門　○經營　準備を整ふる　○人々にかゝり　人の肩にかゝる○しどけなく　亂れてしまりなし　○胸はふたがりながら云々　憂のあまり胸は塞りながら愉快げの顏を互になした　○世には云々　されど世人は道兼大病のことを知らなかつた

通釋　此の大臣は大入道兼家の三男で、粟田殿と申すやうです。長德元年乙未（きのとひつじ）五月二日、關白の宣旨を受けまして同じ月の八日失せました。御年卅五と申します。大臣の位で五年、關白と申して七日居りました。この殿たちの御一族中に攝政關白とならざる類は多くあれど、夢のやうにて終りし道兼のやうな人はあるまいと思ひます。出雲の守相如のぬしの御家に、かりそめに參りました時、關白の宣旨は下りましたので、相如の喜びましたさま、推量するにあまりあります。相如の家は狹くて儀式作法も行ひがたかるべしとて、相如の家より二條殿へ立ちかへり給ふ日、拜賀をいたしましだ。道兼は前驅に言ふに言はれぬ立派な人を數多選びました。北の方の二條に歸り給ふ御供人は、身分よきものも卑きものも、數の知れぬほど多人數で、その中には狩衣を着たるものさへまじつて、まづ道兼を參内せしめ、其の後より北の方は二條へ歸られましたが、その時の本邸の繁盛なること、また人々のうれしき有樣したるは、たゞ想像し給へ、詞にもつくし難い。但し世間にはあまりに大業なる騷ぎなりと、これを見て譏つた人もありました。道兼は少し病氣でありましたが、自然ありがちの事であり、病氣といふは忌々しいから、今日の御悅び申すことをやめまいと思うて、忍耐して參内しましたに、甚だ苦しくなつたので、殿上より出づることはできないで、御湯殿の馬道の戸口に前驅を召して、よりかゝつて北の陣より出ました。如何なるわけかと人々は見ました。二條殿では常よりも準備して待つて居りましたに、人々の肩にかゝり、御冠もだらしなく、御紐を解き、甚だ苦しいやうで下りたのを見た心ち、參内する時にくらべてたとへやうはありません。されど、やがて治癒するだらうとあちこちで低聲で話して、胸は心配に塞りながら心ちよいうれしい顏をよそひをりました。かやうに人々が心配な氣色を表に現さないので世間には道兼の重病なるを知りませんでした。

□

今の小野宮の右大臣殿の、御よろこびに參り給へりけるをり、母屋（もや）の御簾（みす）おろして、呼び入れ奉らせ給へり。臥しながら御對面ありて、「みだり心地のいとあしく侍りて、とにはえ罷り出でねばかくて申し侍るなり。年頃はかなきことにつけても、心のうちに喜び申すことなむ侍れど、させることなき程は、事ごとにもえ申し侍らでなむ過ぎまかりつるを、今はかく罷りなりて侍れば、公わたくしにつけて報じ申すべきになむ。また大小の事も申し合せむと思ひ給ふれば、無禮（むらい）をもえ憚らず、かくらうがはしき方に案（あ）内申しつるなり」など、こまかにのたまへど、詞もつゞかず。只おしあてに、さばかりなめりと聞きなさるゝに、御いきざしなど、いと苦しげなるを、いと不便なるわざかなと思ひしに、風の御簾を吹きあげたりしはざまより見入れしかば、さばかりの重き病をうけ給ひてければいかでかは。御色もたがひて、きらゝかにおはする人ともおぼえず。ことの外に不覺になり給ひにけりと見え給ひながら、長かる

べきことどものたまひしなむ、あはれなりとこそ、後には語り給ひけれ。

語釋　○小野宮の右大臣　藤原實資　○母屋のみす云々　病中のみぐるしさを見せぬためなり　○みだりごゝち　病氣せる心地　○とには　外にはでられぬ　○はかなきこと　わづかなること　○心のうちに喜び申す云々　御芳志は心でふかく喜んでゐるが　○させることなき程は云々　格別の立身をせぬ中は一々御禮を申し上げずにゐた　○かく罷りなりて侍れば　關白になつたから　○公私につけて云々　公私に就て御恩を報ずる　○かくらうがはしき方　かく取亂した處　○おしあてに　推量して　○さばかりなめりとそのやうのことだらうと　○いきざし　呼吸　○はざま　間　○いかでかは　如何にして堪へらるべき　○きらゝか　血色の美しい　○不覺になる　元氣ふたしかになる　○長かるべきことどものたまひしなむ　長命する人のやうに將來のことを話したことはあはれであるとのこと

通釋　今の小野宮右大臣實資が、御悅びに參りました時、母屋の御簾を下して呼び入れました。臥しながら御對面して道兼言ふやう、病氣の心地甚だ不思議で、外には出づることも出來ぬから、病床にて申します。年來些細のことにつけても、御厚情のほどを心中にうれしく思ひながら、何かきはだつた事なき間は、一々其の度毎に御禮も申さず月日を過しました。今は關白になりましたから、公私の事について御恩を報じます。又大小の政事も相談しようと思ひますれば、無禮をも憚らず、かく亂りがはしき方に案内申したのであるなど、細に話されたが、詞もつづかず、ただ推量して、さやうだらうと聞かれた。御息つきなど甚だ苦しげなるを、氣の毒な事だと思うたに、風の御簾を吹きあげた間より見やれば、重き病を身に受けましたから、いかでか世の常の顏色ならん、蒼ざめて、平素色つやのよかりし道兼とも思はれませんでした。意外にも見るかげもなく衰へ見え給ひながら、後々の事を語つて、我が身久しく世に在るやうに言はれたのはあはれであつたと、後に實資は語りました。

□

此の粟田殿の御男君達三人ぞおはせし。太郎君は福足君と申しゝ、をさなき人は、さのみこそはと思へど、いとあさましく、さまなくあしくぞおはせし。東三條殿の御賀に、此の君舞をせさせ奉らむとて、ならはせ給ふほども、あやにくがりすまひ給へど、よろづにをこづり、祈をさへして敎へ聞えさするに、その日になりて、いみじうしたて奉り給へるに、舞臺の上にのぼり給ひて、物の調子吹きいづる程に、わざはひかな、「あれは舞はじ」とて、びんづら引亂り、御裝束をはら〳〵と引き破り給ふに、粟田殿御色まあをにならせ給ひて、あれにもあらぬ御氣色なり。ありとある人、さ思へる事よと見給へど、すべきやうもなきに、御をぢの中關白殿のおりて、舞臺にのぼらせ給へば、いひおこづらせ給ふべきか、又にくさにえたへず追ひおろさせ給ふべきかと、かたゞ〳〵見侍りしほどに、此の君を御腰のほどにひきつけさせ給ひて、御手づからいみじく舞はせ給ひしこそ、樂もまさり面白く、かの君の御恥もかくれ、其の日の興もことの外にまさりたりけれ。祖父殿もうれしとおぼしたりけり。お父おとどは更なり、よその人だにこそ、すずろに感じ奉りけれ。かやうに人のためなさけ〳〵しき所おはしましけるに、などご末かれさせ給ひけむ。此の君、人しもこそあれ、蛇れうじ給ひて、その祟により、かしらに物はれてうせ給ひにき。

語釋　○さのみこそはと思へど　何處の子もいたづらするものとは思へど　○いとあさましく云々　おどろく程の惡るもので、にくらしい子であつた　○東三條殿の御賀　兼家六十の賀　○生憎がり云々　意地になつて習はぬやうにされた　○おこづり　だます

○びんづらひき亂り　髪をかきむしり　○まあを　眞青になり　○さ思へることよと　あの子は、きつとそんなことをするだらうと　○中關白　道隆　○言ひおこづらせ給ふべきか云々　道隆はうまくだまして舞はするか、又はにくさに舞臺から追ひおろすかと人々見てゐた　○樂　音樂　○彼君　福足　○祖父　兼家　○など御末かれさせ給ひにけん　道隆は情ふかき人なりしに何故に子孫は榮えぬかとのこと　○此の君　福足　○人しもこそあれ　名家の子孫でありながら　○れうじ給ひて　蛇をくるしめ殺したこと

通釋　栗田殿の御男君三人ありました。長男は福足君と申します。一體幼き程は左樣に意地も悪く惡戯をするものとは思へど、福足君は度をこえて正しからず、惡たれものでありました。兼家の六十の御祝に、福足君に舞をまはせんとて習はせました時も、いやがつて拒みましたので、いろ〳〵すかし、祈をさへして教へまするに、其の祝の日になつて立派に裝はせて、舞臺の上に上らせましたところ、笛など吹き出づる程に、災なることよ、福足は吾れは舞はじとて、びんづらをかき亂し、御裝束をはら〳〵引き破りましたので、道兼は御色青くなつて、我が身にもあらぬさまで居らました。集れるすべての人は福足はそれ位の事はあるだらうと思つてゐたが、すべきやうもなきに、御伯父の道隆は下りて舞臺に上りましたから、人々が心の中に言ひすかして舞はするか、又は疾くさに堪へず追ひ下すのかと見て居りましたに、道隆は福足を御腰のあたりに引きつけまして、御手づから立派に舞ひましたために、音樂もまさりて面白く、福足の恥もかくれ、その日の面白さも特別にまさりました。兼家もうれしと思ひました。道兼大臣は言ふまでもなく、他人もすずろに感じました。かやうに人のため道隆はなさけ深くあつたのに、何故に御子孫は衰へましたらう。さて福足は人もあらうに悪たれものであつたから、蛇を捕へて殺したたりで顯にはれものが出來て失せました。

□

此の御弟の二郎君、今の左衞門督兼卿は、大藏卿の女の腹なり。此の左衞門督の君達、男女あまたおはするなり。大姫君は三條院の三の御子敦平の中務の宮を、此のささらぎかとよ、聟取り奉り給へるほどに、いとよき御中にておはすめり。又栗田殿の三郎前頭中將兼綱の君、其の君の、祭の日調じ給へりし車こそ、いとをかしかりしか。檜網代といふもの張りて、的の形にいろどられたりし車のよこさまのふちを弓の形にしたて、ふちをば矢の形にせられたりしさまの興ありしなり。和泉式部の君、歌よまれて侍りき。

十つらの馬ならねども君のればくるまもまとに見ゆるものかな

さて、よき風流と見えしかど、人の口やすからぬ物にて、「賀茂の明神の御矢目おひ給へり」といひなしてしかば、いと便なくてやみにき。此の君の頭とられ給ひにし、いといみじう侍りし事ぞかし。頭になりて、驚きよろこび給ふべきならねど、あるべき事にてあるに、栗田殿、花山院すかしおろし奉り、左衞門督、小一條院すかしおろし奉り給へり。みかど、東宮の御あたり近づかでありぬべき御族といふ事いできにしぞかし。こと稀有に侍りきな。誰れも、きこしめし知りたる事なれど、男君達かくなり。

語釋　○大藏卿　師輔の男、遠量なり　○調じ　新調する　○檜網代　薄き檜の板をあじろ形にあみたるもの　○的の形　的の形に彩色したる車輪　○十列の云々　一首の意は賀茂の祭に十人の舞人　馬に乘りて競走するを十列の馬といふ。君の十列の馬の如くには疾く走らねど君が乘りゆくを見れば、あたかも的の如く見ゆるとなり　○御矢目　御矢疵　○便なく　不便なり　○頭とられ給ひし　藏人頭を免職されし　○有るべきことにてあるに　もとより當然であるに　○すかし下し奉り　花山院をあぎむいて位を退かしめた　○左衞門督　兼隆なり　○小一條院すかし云々　小一條院をすかして東宮を退かしめた　○近づかでありぬべき御族云々　天

皇の御そばにおくは危險な一族だと人々は評したこと

通釋　この御弟の二男の左衞門の督兼隆卿は大藏卿の女の腹であります。この左衞門の督の君達は、男女あまた居ります。長女は三條院の三の御子敦平の中務の宮を、この二月聟に取り給へる程に、夫婦の中よくあるやうです。又姫君四人居ります。又道兼の三男前の中將兼綱の君の、賀茂の祭の日に作りました車は、甚だ面白くありました。檜網代といふものを張つて、弓の的の形に色どられた車の、横の方の窓を弓の形にしたて、緣をば矢の形にせられたさまは面白くありました。和泉式部の君は歌によんでありました。

とをつらのうまならねども君のれば車もまとに見ゆるものかな

といふのです。さてよき風流と見えましたが、世の人の口は、何事も其のまゝにさし置かず、口わろきもので、賀茂の明神の矢疵を負ひ給へりと言ひましたれば、甚だ不都合でやみました。さて此の兼綱の藏人の頭を取られましたことは、甚だひどいことでありました。頭になつたからとてよろこび給ふべきでないが、兼綱の此の頭になつたのは當然であるので本人も滿足して居たのに、道兼公が、花山院をすかして御退位となり、兼隆は小一條院をすかして御退位となりました。されば帝や東宮の御あたりには近づいてはならぬ一族といふことが出で來ました。甚だめづらしき事であります。誰も聞いて知つてゐることでありますが、男君たちは以上の通りであります。

□

女君は故一條院の御乳母の藤三位の腹にいでおはしましたりしを、やがて、其の御時の倉部屋の女御ときこえし。後に、此の大藏卿通任の君の北の方にてうせ給ひにしぞかし。御むかひばらに、佛神に申してはらまれ給へりし君、今の中宮に、二條殿の御方とてこそは候ひ給ふめれ。父殿女子をほしがりて願を立て給ひしかど、御顏だにえ見奉り給はずなりにき。かやうにあはれなる事どもの世に侍るぞかし。その殿の御北の方、粟田殿の御後は、堀河殿の御子の左大臣の北の方にてこそは、年ごろおはすと聞き奉りしか。その北の方は、九條殿の御子の大藏卿の君の娘ぞかし。されば、此の粟田殿の御ありさま、ことの外にあへなくおはしましき。さるは、御心いとなさけなく恐しくて、人にはいみじうをぢられ給へりし殿の、あやしく末なくてやみ給ひにき。此の殿、父おとどの御いみには、土殿などにもゐさせ給はで、あつきにことづけて、御簾どもあげ渡して、御念誦などもし給はず、さるべき人々よびあつめて、後撰古今ひろげて、興言しあそびて、つゆ歎かせ給はざりけり。その故は、花山院をば我れそすかしおろし奉りたれ、されば、關白をもゆづらせ給ふべきなりといふ御恨みなりけり。よづかぬ御事なりや。さまゝよからぬ御事ども聞えしを、傳殿、この入道殿二所は如法に孝じ奉り給ひきとぞうけたまはりし。

語釋　○藤三位　師輔の女繁子　○その時　一條院　○倉部屋の女御　倉部屋は暗部屋なれど所在未詳、尊子と申す御方なり　○向ひ腹　適妻なり　○今の中宮に　後一條の皇后威子に仕へて　○其の殿　道兼　○左大臣　兼通の男顯光なり　○御心いと情なく道兼が薄情なり　○父大臣　兼家　○御忌　忌中　○土殿　兼家の喪に服する爲に新に設けたる別殿なり　○後撰古今　後撰集、古今集　○興言　興じ言ふ　世附かぬ御事なりや　世の習に違ふ　○良からぬこと　道兼は父に對してよからぬことなり　○如法に　眞心より入道殿二所云々　道綱と道長とは兼家に

通釋　女君は故一條院の御乳母の、藤三位の腹に生れましたのを、即ちその御時の倉部屋の女御と申しました。後にこの大藏卿通任の君の北の方となつて失せました。適妻に佛神に申してはられました君は、今の中宮威子に二條殿の御方というて居りました。道兼は女子をほしがりて願を立てましたが、御顏さへ見ることはできませんでした。かやうにあはれなる事は世の中にあるものであります。道兼の北の方は道兼薨じた後は、堀川殿の御子の左大臣顯光の北の方となつて年來居るときゝました。その北の方は師輔の御子遠量の君の女であります。されば道兼の御有樣は、ことの外にはかなくありました。然るわけは、御心は甚だなさけなく恐しくて、人には甚だ恐れられた殿が、不思議に子孫なくてやみました。道兼は父の兼家の忌中には、土殿などにも居ませんで、暑さにことづけて御簾など皆あげて、御念誦などもしませず、然るべき人々をよび集めて、後撰集や古今集をひろげて、面白き戲言など言うて、少しも歎きませんでした。その故は花山院をば我はあざむき御退位せしめたのである、されば關白をも讓り給ふべきであるといふ御うらみでありました。世の習に從はぬ御事であります。さまざまよからぬ事など聞えましたが、道綱と道長二人は、かたの如く孝養し奉りましたと承りました。

大政大臣道長

此のおとどは法興院の大臣の御五男、御母は從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣の女なり。其の朝臣は從二位中納言山蔭卿の七男なり。此の道長の大臣は、今の入道殿下これにおはします。一條院、三條院の御伯父當代車宮の御祖父にておはします。此の殿宰相には成り給はで、直に永延二年正月二十九日、權中納言にならせ給ふ。御年二十三。其の年上東門院生れ給ふ。正暦二年九月七日大納言にならせ給ふ。正暦三年壬辰四月二十七日從二位し給ふ。中宮大夫とぞ申しゝ。御年二十七。關白殿生れ給ふ年なり。長德元年乙未四月二十七日、左近衞の大將兼けさせ給ふ。其の年の祭の前より、世の中極めて騷がしきに、又の年はいとどいみじくなりたりしぞかし。まづは大臣公卿多く失せ給へりしに、まして四位五位のほどは數やは知りし。先づ其の年失せ給へる殿ばらの御かず、閑院の大納言殿は三月二十八日、中關白殿は四月十日、此れは世の疫にはおはしまさず、唯同じをりのさし合せたりし事なり。小一條左大將濟時卿は四月二十三日、六條左大臣殿、粟田右大臣殿、桃園中納言保光卿、此の三人は五月八日一度に失せ給ふ。山井大納言殿は六月十一日ぞかし。又あらじかし。上りての世にも、かく大臣公卿七八人、二三月の中にかさはらひ給ふことけうなりしわざなり。それも唯此の入道殿の御幸の上をさはめ給へるにこそ侍るめれ。かの殿ばら次第のまゝに久しく保ち給はましかば、いとかくしもやはおはしまさまし。

語釋　○法興院　兼家　○行　位高くして官卑くきをいふ。攝津守は從五位相當なるべきに從四位にて此の官に任ずる故に行をつくるのである　○右京大夫　朱雀大路より西を管する長官　○當代　後一條天皇　○東宮　敦良親王　○宰相　參議　○關白　賴通　○祭の前　賀茂の祭の前　○騷がしきに　疫病が流行した　○又の年　翌年　○數やは知りし　數の知りがたき程だ　○閑院の大納言　賴光　○中關白　道隆　○疫　疾病なり　○同じをりの云々　疫病の流行と道隆の死とは偶然同じ時であつた　○六條左大臣　重信　○粟田右大臣　道兼　○山井大納言　道隆の子道頼　○又あらじかし　斯の如きことはまたとあるまい　○あがりての世　上代　○いとかくしもやはおはしまさまし　道長はかくまで目でたき御榮位にはあらざるべしとのこゝ。

通釋　この大臣は兼家の五男で、御母は、從四位の上行攝津の守右京の大夫藤原の中正朝臣の女であります。その朝臣は、從二位中納言山蔭卿の七男であります。この道長大臣は、今の入道殿下であります。一條院、三條院の御舅で、後一條、後朱雀の御祖父であります。道長は宰相にはならずに直に永延二年正月廿九日權中納言になりました。御二十三であります。その年上東門院が生れました。正暦二年九月七日大納言になりました。正暦三年壬辰四月廿七日に從二位になりました。中宮大夫と申しました。御年二十七であります。賴通の生れ給ふ年であります。長德元年きのとひつじ四月廿七日左近衞大將を兼ねました。その年の賀茂の祭の前より、大疫病のため、世の中きはめて物騷で、翌年は一層甚しくなりました。大臣公卿多く失せましたに、まして四位五位は數の知れぬ程失せました。まづその年失せました殿ばらの御數、朝光は三月廿八日、道隆は出家しまして十日に失せました。これは疫病ではありませんが、只同じ時のさしあはせたことであります。小一條大將濟時の卿は四月廿三日重信の左大臣殿、道兼右大臣殿、桃園中納言保光卿、この三人は五月八日一度に失せました。道賴大納言殿は六月十一日に失せました。御年二十五であります。このやうな事は、またとあるまいと思ひます。上代にも、かやうに大臣公卿七八人、一二三月の中に吹き拂ふ如く亡せたるは、珍らしいことであります。それも只此の道長の幸福の最上なる爲でありませう。かの殿ばら次第のまゝ順序に由つて久しく保つて世に居りましたならば、道長の御果報もかくまでよくはなからうと思ひます。

□

まづは帥殿の御心もちゐのさか〳〵しくおはしまさば、父おとどの御病のほど、天下執行の宣旨くだり給へりしまゝに、おのづからさてもやおはしまさまし。それに又、おとどうせさせ給ひにしかば、いかでかは、みどり子のやうなる心おはする殿の、世の政し給はむとて、粟田殿にわたりにしぞかし。「瓜(ふり)を請はゞ、うつはものを設けよ」と申すことまことにあることなり。さるべき御次第にて、それまたあるべきを、「あさましく夢などのやうに、取敢へずならせ給ひにし、これはあるべきことかはな。この今の入道殿、そのをりの大納言、中宮大夫と申して、御年いとわかく、行末を待ちつけさせ給ふべき御よはひの程に、三十にて四月廿七日に大將にならせ給ふ。五月十一日に、官中雜事(くわんちうざつじ)まづ內覽の關白の宣旨承り給ひて、榮えそめさせ給ひにしぞかし。同じ年の六月十九日に右大臣にならせ給ひて、長德二年七月廿日、又左大臣にならせ給ひにき。そのまゝに外ざまへもわかれずなりにしぞかし。今々もさこそは侍るめれ。

語釋　○さか〳〵し　賢明　○おのづからさてもやおはしまし　そのまゝで自然と關白になられたことであらう　○おとど　道隆　○みどり子のやうなる心云々　子供のやうな心の伊周は政治を執ることはできぬとのことで　○ふりをこはゞ云々　瓜を乞はゞ其れを入れる器物の用意せよとの俗諺あり　○さるべき御次第　道兼は道長よりさきに關白になれること　○亦あるべきを　道理上然るべきこと　○あさましく夢などのやうに云々　道兼は七日にて死せしをいふ　○これはまたあるべきことかはな　道兼の死は當然の出來事にはあらず　○行末を待ちつけさせ云々　將來の希望にかゞやいてゐる年齡　○外ざまへもわかれずなりにしぞかし云々　今も其の通りで實權は他にわかれず獨でにぎつてゐる

通釋　まづは伊周公の御心もちが賢くありましたらば、道隆の病氣の時、天下の政治を執るべき宣旨の下つたまゝに、自然にそのまゝであつたことと思ひます。然るに又道隆失せましたれば、いかでか子供のやうな心のある伊周に、世の政治を執られやうかとて、道兼に關白はわたりました。人より瓜を貰はんとならば、まづ入れる器物を用

意せよといふことがあるやうに、關白になるには、其の技倆の必要なることは、まことにあることであります。道兼に關白がわたりしこと然るべき次第で當然ではあるが、道兼は夢のやうに失せ給うたことはあるべきことではない。この今の入道殿道長はその時大納言中宮の大夫と申して、御年いと若く、さきざきの樂しみを待ち得べき程の年齢なるに、三十で四月二十七日に大將になりました。五月十一日に宮中雜事まづ内覽の關白の宣旨を承りまして、榮え始めましたのであります。同じ年の六月十九日に右大臣になりまして、長德二年七月二十日、又左大臣になりました。そのまゝに權勢は他の家に移らずして、今に至るまでさやうであります。

□

此の殿は、北の方二所おはします。この宮々の御母上と申すは、土御門左大臣源雅信のおとどの御娘におはします。その雅信のおとどは、亭子のみかどの御子一品式部卿宮敦實親王の御子、左大臣時平のおとどの御娘の腹に生まれ給ひし御子なり。其の雅信のおとどの御娘を、今の入道殿下の北政所と申すなり。その御腹に女君四所、男君二所ぞおはします。其の御有樣は、只今のことなれば皆人見奉り給ふらめど、詞つゞけ申さむとなり。第一の女君は、一條院の御時に、長保元年十一月一日、御年十二にて女御にまゐらせ給ひて、又の年長保二年庚子二月廿五日、十三にて后に立たせ給ひて、中宮と申しゝ程に、うちつゞき男御子二人生み奉り給へりしこそは、今のみかど、東宮におはしますめれ。二所の御母后、太皇太后宮と申して、天下第一の御母にておはします。

語釋　○此の殿　道長　○二所　雅信の女倫子、高明の女明子　○この宮々　彰子、妍子、威子　○亭子　宇多天皇　○詞つゞけ申さむとなり　つゞけて書かんとのこと　○今のみかど　後一條　○東宮　後朱雀　○天下第一の母　此の上もなく貴い母の意

通釋　この殿は北の方二人居ります。彰子、倫子、威子の御母上は、土御門左大臣源雅信の御女であります。雅信の大臣は、宇多帝の御子一品式部卿の宮敦實の親王の御子左大臣時平大臣の御女の腹に生れました御子であります。其の雅信の大臣の御女を今の入道殿下道長の北の方と申すのであります。その御腹に女君四人、男君二人居ります。そのありさまは、只今の事であるから、皆人は見て居るだらうが、話しつづけようと思ふのであります。第一の女君は一條院の御時に、長保元年十一月一日御年十二で女御に參りまして、又翌年長保二年庚子二月二十五日十三で后に立たれて、中宮と申しました程に、うちつづき男御子二人生み奉りました。即ち今の後一條院と東宮の後朱雀院であります。二所の御母后は太皇太后と申して、天下第一の母であります。

□

その御さしつぎの女君、内侍のかみと申しゝ、三條院の東宮におはしましゝに參らせ給ひて、宮位につかせ給ひにしかば、長和元年二月十四日に后にたゝせ給ひて、中宮と申しき。御年十九。さて、又の年長和二年癸丑七月廿六日に、女御子生まれさせ給へるこそは、三四ばかりにて、一品にならせ給ひて今におはしませ。此の頃は、この御母宮を皇太皇宮と申して、枇杷殿におはします。一品の宮は三宮になずらへて、千戸の御封をえさせ給へるは、此の宮に后二所おはしますが如くなり。また次の女君、これも内侍のかみにて、今のみかど十一歳にて、寛仁二年戊午正月三日に御元服せさせ給ひて、その三月七日參り給ひて、同じ年四月廿八日女御の宣旨くだされき。此の日内裏つくりいだして渡らせ給ふ日な

り。同じ年十月十六日、后に立て奉るべき宣旨ありき。使は源民部卿俊賢の君ぞし給ひし。中宮大夫にておはせしかば、し給ひしにこそ侍るめれ。只今の中宮と申して、内におはします。

語釋　○さしつぎの女君　すぐ次の女君　○女御子　禎子内親王なり、妍子の腹に生れ給ふ　○此の御母宮　妍子　○枇杷殿　左大臣仲平の宅なり、近衛の南、室町の東或は鷹司の南、東洞院西一町にあり　○三宮に准へ　太皇太后、皇太后、皇后に准へて年官年爵を賜ふなり　○千戸の御封（みふ）　千戸より出す租庸調を給するなり　○此の宮　枇杷殿　○今のみかど　後一條天皇　○内造り出して云々　内裡出來あがつて御移轉の日である　○内　内裡

通釋　そのすぐ妹の君妍子は、内侍のかみと申しました。三條院が東宮でをられました時に參りまして、宮が位につかれたので、長和元年二月十四日に、后に立たれ、中宮と申しました。御年十九であります。さて翌年長和二年みづのとうし七月廿六日に、女御子生れ給うて、三四ばかりで一品になりまして今に居ります。此の頃はこの御母宮を皇太后と申して、枇杷殿に居ります。一品の宮は三宮に準じて、千戸の御封を得ましたことは、此の宮に后二人居るがやうであります。次の女君これも内侍のかみで、今の帝は十一歳にて寛仁二年つちのえうま正月三日に御元服あらせられたのであるが、その三月七日參内して同じ年四月廿八日女御の宣旨下されました。此の日内裏つくりいたしで、御移りになる日であります。同じ年十月十六日、后に立て奉るべき宣旨ありました。使者は源民部卿俊賢の君がしました。中宮大夫でをりましたから、使者となつたのでありませう。只今の中宮と申して宮中に居られます。

□

また次の女君は、それも内侍のかみ、十五におはしますに、今の東宮~~三十~~十三にならせ給ふ年、治安元年二月一日參らせ給ひて、東宮の女御にて候はせ給ふ、登花殿にぞおはしましゝ。殿入道せしめ給ひて後のことなれば、今の關白殿の御娘となづけ奉りてこそは參らせ給ひしか。今年は十九にぞならせ給ふ。姙（にん）じ給ひて、七八月にぞあたらせ給へる。「入道殿の御ありさまを見奉るに、必ず男子（をのこ）にてぞおはしまさむ。此の翁ら、更によも申しあやまり侍らじ」と、扇を高くつかひつゝいひしこそ、をかしかりしか。女君達の御ありさまかくの如し。

語釋　○次の女君　嬉子　○今の東宮　後朱雀院　○登花殿　皇后、中后、女御等の在所　○今の關白　頼通　○姙じ　はらむ　○入道殿の云々　世繼の批評なり、道長の幸福よりみれば、此の度も又皇子出生ならんとなり　○扇を高くつかふ　扇をつかふ音のたかきこと

通釋　又つぎの女君は、それも内侍のかみで十五であります。今の東宮後朱雀院十三にならせ給うた年、治安元年二月一日參りまして、春宮の女御であります。登華殿に居ります。道長入道した後であるから、今の關白頼通の御女と名づけて參らせました。今年は十九になりました。姙娠されて七八月になります。道長の幸運のありさまより見て、必ず男でありませう。私は（世繼）更に決して間違ひませんと、扇を高くつかひながら言うたことは、をかしくありました。女君たちの御ありさまは以上の通りであります。

□

男君二所と申すは、今の關白左大臣頼通のおとどと聞えさせて、天下をわがまゝにまつりごちておはします。御年廿六にてや内大臣攝政にならせ給ひけむ。みかとおよずけさせ給ひにしかば、寛仁三年十

二月二十二日攝政の表たてまつらせ給ひて、同じき日關白の宣旨下りて、たゞ關白にておはします。二十餘にて納言などになり給ふをぞ、いみじき事にいひしかど、今の世の御ありさま、かくおはしますぞかし。是れ宇治殿と申す。御わらは名は鶴君なり。今一所は、只今の右大臣にて、左大將かけて、教通のおとどと聞えさす。世の二の人にておはしますめり。これは二條殿、御わらは名せや君ぞかし。

語釋 ○まつりごち　政治を執る　○御よずけさせ　成長する　○今の世のありさま云々　頼通の今のありさま廿六にて關白となれりとのこと　○只今の内大臣　教通公　○かけて　兼ねて　○世の二の人　關白を一とすれば世の中の二の人であるといふ意

通釋 男君二所と申すは、今の關白左大臣頼通の大臣と申して、天下の政事を心のまゝに執つてゐます。御年廿六で内大臣攝政になつてをりました。後一條帝御成長ならられましたから、寛仁三年十二月二十二日、攝政を辭する表を奉りまして、同日關白の宣旨下つて、たゞ關白の名で居ります。二十餘で納言などになり給ふを非常の事に言うたのに、今の世の御有樣、かやうであります。是を宇治殿と申します。御童名は鶴君であります。今一人は只今の内大臣で、左大將を兼ねて、教通の大人と申します。世の攝政關白につぐ人でありませう。これは二條殿で御童名はせや君であります。

□

かゝればこの北の政所の御榮えきはめさせ給へり。或はみかど、東宮の御母后とならせ給ひ、あるは、我が御親、世の一の人にておはするには、御子も生れさせ給はねども、后にゐさせ給ふめり。女の御さいはひは、后こそきはめておはします御事なめれ。されどそれは、いと所せげにおはします。いみじきとみの事あれど、おぼろげならねば、え動かせ給はず。陳屋ゐぬれば、女房たはやすく、心にもまかせず。かやうに所せげなり。たゞびとと申せど、みかど東宮の御祖母にて、三宮になずらふ御位にて、千戸の御封えさせ給ふ。年官年爵を給はらせ給ひ、唐の御車にて、いとたはやすく御ありきなども中々御身やすらかにて、ゆかしうおぼしめしけることは、世の中の物見、なにの法會やなどあるをりは、御車にても、御さじきにても、必ず御覽すめり。内、東宮、宮々など、わかれ〳〵よそほしくおはしませど、いづかたにも渡りまゐらせ給ひては、さしならびおはします。只今三人の后、東宮の女御、關白左大臣、内大臣の御母、みかど、東宮はた申さず、おほかた世のおやにて、二所ながら、さるべき權者にこそおはしますらめ。御なからひ四十年ばかりにやならせ給ひぬらむ、あはれにやんごとなきものに、かしづき奉らせ給ふといへばこそ愚かなれ。世の中には、いにしへ只今の國母大臣、みな藤氏にてこそおはしますに、此の北政所ぞ源氏にて、御さいはひ極めさせ給ひにたる。をととしの御賀のありさまなどこそ、皆人見聞き給ひしことなれど、なほ返す〳〵もいみじく侍りしものかな。

語釋 ○此の北の政所　倫子　○我が御親　道長　○一の人　攝政關白　○女の御さいはひは云々　女の幸は后になることである　○所せげ　窮屈で自由でない　○とみのこと　急な大事件　○おぼろげならねば　重大でなければ　○え動かせ給はず　勝手に宮中より出で動くことはできぬ　○陣屋云々　御門を守る武官のゐる所なり、御門を嚴重に守つてゐるから　○女房云々　女官などには自由にならず　○たゞびと云々　倫子は皇族でないといふこと　○千戸の御封　千戸の粗庸調　○唐の御車　唐庇の車にて牛車の一

種　○さしならび云々　押し並んでゐる　○おほかた世のおや　國民全體の親だ　○二所　道長、倫子　○權者　佛菩薩のかりに世の中に顯はれたもの　○國母　天皇の御母　○をととの御賀　倫子六十の賀

通釋　かゝれば、この北の方の御榮華は極められました。あるは御門東宮の御母后となり給ひ、あるはわが御親、世の攝政關白で居れば、御子も生れませんでも、后に立たせ給ふやうであります。女の御さいはひは后に立つことは至極のことであります。されどそれは、甚だ窮屈であります。非常なる事あつて、心のせがるゝ時も、大方なみ〳〵のことでは、身を動かし給ふこと難く、また警護の衞士など、陣屋に居ることであるから、女房なども、御心のまゝに打とけ難く、すべてかやうに御窮屈なものであります。臣下ではあるが、後一條、後朱雀の御祖母で、准三宮の御位で、千戸の御封を取つてゐます。年官年爵を給はり、唐の御車で、いとたやすく御ありきなどするも、かへつて御身やすらかで、心に見たり聞いたりしたいことは、世の中の物見、何の法會などのある折は、御車にても御棧敷にても必ず御覽にならるゝのであります。帝、東宮、宮々と別々に、いかめしく裝うて居りますが、何方へでも參られまして、さしならんでをられます。只今彰子、妍子、威子三人の后、東宮の女御嬉子、關白左大臣頼通、內大臣敎通の御母で、帝、東宮はまた申しません、凡そ世の親であります。入道の道長も勿論で、大方此の二人ながら、然るべき權者でありませう。夫婦の中は四十年ほどになりましたらう。非常に貴いものにして、大切にせらるゝことは言ふまでもない。世の中には、古今の國母、大臣は皆藤原氏であるのに、此の北の方倫子は源氏で、御幸福をきはめました。一昨年の六十の祝賀の御有樣など、皆人見聞きました事ではあるが、なほかへす〴〵も立派でありました。

□

又高松殿の上と申すも源氏におはします。延喜の御子高明親王を延喜二十年十二月二十八日姓を賜はりて左大臣左大將になし奉らせ給へりしに、思はざる外の事によりて、大臣とられて、太宰權帥にならせ給ひて、流され給ひし。いと〳〵心うかりし事ぞかし。其の御娘におはします。それを、かゝの殿、筑紫におはしましける年、此の姫君まだいと幼くておはしけるを、御をぢの十五の宮と申したるも、同じ延喜の御子におはします。女子もおはせざりければ、此の君を取り奉りて、養ひかしづき奉りて、持ちゐ給へるに、西宮殿も十五の宮もかくれさせ給ひにし後に、故女院の后におはしましゝをり、此の姫君を迎へ取り奉らせ給ひて、東三條殿の東の對に帳をたて壁代をひきて、我が御しつらひに聊かおとさせ給はずしする為聞えさせ給ひ、女房、侍、家司、下人まで、別にあかちあてさせ給ひて、姫宮などのおはしませし如くに、限なく思ひかしづき聞えさせ給ひしかば、御せうとの殿原、我れも〳〵とよしばみ申し給ひけれど　后かしこく制し申させ給ひて、今の入道殿ぞ許しきこえさせ給ひければ、通ひ奉らせ給ひし程に、女君二所、男君四所おはしますぞかし。

語釋　○高松殿の上　明子　○思はざる外の事　意外のこと即ち謀反したといふ評判　○かの殿　高明　○十五の宮　盛明親王　○西宮殿　高明　○敎女院　圓融天皇の皇后詮子　○東三條殿　詮子の御所　○壁代　簾と簾との間に垂れた簾の裏の添へてかけた帳　○しする為　裝飾をしてする置く　○侍　院親王公卿等の家來で五位六位の人　○家司　親王、公卿の家政を司るもの　○あかちあて　別つて當てる　○御せうと　詮子の兄弟なり、道綱、道隆、道兼、道長なり　○よしばみ申し　戀ひ慕ふ　○今の入道殿　道長を明子にゆるせしこと

通釋　又高松殿のうへ明子と申すも、源氏であります。延喜の御子高明親王を、延喜二十年十二月廿八日姓を賜う

て、左大臣左大將になしましたに、思ひがけない外の事によつて、大臣を取られて、太宰權帥になして、流されました。甚だ心ういことでありました。高松殿はその女であります。高明は筑紫に居りました年、この姫君まだ甚だ幼くありましたものを、御叔父の十五の宮と申した人も延喜の御子でありますが、女子もありませんでしたから、この明子をとり養ひ大切に育てて居りました。高明も十五の宮も薨じました後に、故女院が后でありました時、この姫君を迎へ取りまして、東三條殿の東の對に帳を立て、壁代を引いて、皇后の御室の裝飾に聊も劣らぬやうにして据ゑ申し、女房、侍、家司、下人まで、別に分けあてまして、姫宮などの御住まひの如くに、限りなく大切にいたしましたれば、御兄弟の殿ばら、我も我もと懸想しましたけれど、后かしこく制止して、今の道長をゆるし申したれば、通ひましたので、女君二人、男君四人をられます。

□

女君と申すは、今の小一條院の女御。今一所は故中務卿の宮具平親王と申すは村上のみかどの七のみこにおはしましき。その御男君三位中將師房の君と申すを今の關白殿のうへの御はらからなる故に、關白御子にし奉らせ給ふを、入道殿むことり奉らせ給へり。あさはかに心えぬ事とこそ、世の人申しゝか。殿の内の人もおぼしたりしかど、入道殿思ひおきてさせ給ふやうありけむかしな。男君は大納言にて、春宮大夫頼宗ときこゆ。御わらは名石君。今一所は、同じ大納言中宮權大夫能信と聞ゆ。今一所は、中納言長家、御わらは名こわか君。今一人、右馬頭にて、顯信とておはしき。御わらは名こけ君なり。寛弘九年壬子正月十九日入道し給ひて、この十餘年、佛のごとくして行はせ給ふ。いと思ひかけず、あはれなる御事なり。みづからの御菩提を申すべからず。殿の御ためにも、又法師なる御子のおはしまさぬが、口惜しうことかけさせ給へるやうなるに、されば やがて一度に僧正になし奉らむとなむ仰せられけるとぞ承るを、いかが侍らむ。うるはしき御法服、宮々よりも奉らせ給ひ、殿よりは、麻の御衣たてまつるなるをば、あるまじき事に申させ給ふなるをぞ、いみじくわびさせ給ひける。出でさせ給ひける日は、緋の御袙のあまた候ひけるを、「これかれあまた重ねて着たるなむうるさき。綿を一つに入れなして、一つばかりきたらば、しかせよ」と仰せられければ、「これかれそゝき侍らむもうるさきに、綿をあつくして參らせむ」と申しければ、「それは久しくもなりなむ、ただとくと思ふぞ」と仰せられければ、おぼしめすやうこそはと思ひて、あまたが綿を一つに取り入れて參らせたるをぞたてまつりて、其の夜はいでさせ給ひける。されば、御めのとは、「かくて仰せられけるものを、何しに參らせけむ、例ならず怪しと思はざりけむ心のいたりのなさよ」と泣き惑ひけむこそ、いとことわりにあはれなれ。事しもそれに障らせ給はむやうに、かくと聞き付け給ひては、やがて絶え入りて、なき人のやうにておはしけるを、「かく聞かせ給はゞ、いとほしとおぼして、御心や亂れ給はむと、今更によしなし。これぞめでたきこと。佛にならせ給ひて、わが御爲にも、後の世のよくおはせむこそ、つひのこと」と人々いひければ、「佛にならせ給はむもうれしからず、わが身の後の助けられ奉らむもおぼえず、只今の悲しさより外の事なし。殿もうへも御子どもあまたおはしませばいとよし。たゞ我れ獨が事ぞや」とぞふしまろび

給ひける。げにさる事なりや。道心なからむ人は、後の世の事までもしるべきかはな。

語釋 ○今の小一條院の女御　寛子　○今の關白殿のうへ　頼通の室隆姫女王　○入道殿むことり奉らせ給へり　道長は末子の尊子をめあはしたるをいふ　○あさはかに　思慮淺い　○殿の内の人も云々　道長の内の人も思うたなれど道長は深い考あつてのことならむとのこと　○みづからの御菩提云々　菩提はさとりをひらくことなり、即ち自分は佛になりたいといふことを父の道長に申すべきでないといふこと　○ことかけさせ給へる　物たらぬ　○一度に僧正に云々　道長は顯信を一度で僧正にしてやらうといふことをきいてゐる　○あるまじき事に申させ給ふなるをぞいみじくわびさせ給ひける　顯信は美服を贈られた人々に對し出家に美服はいらぬとて返したので贈つた人々は困つたといふこと　○出でさせ給ひける日　出家する爲に家を出るとき　○これかれそゝきはべらむもうるさきに云々　乳母の言なり、一枚〳〵綿を拔いて又一枚に厚く入れるのは面倒だから新しく一枚の綿入を厚く作つてあげやうといふた　○それは久しくもなりなむ云々　顯信の言なり、それでは長くかゝるだらう、早くほしいものだ）○おぼしめすやうこそはと云々）乳母は何か御考になつてゐることがあるだらうと思うたのである、まだ出家のことは知らなかつた　○たてまつりて着用して　○其の夜はいでさせ給ひける　其の夜に出家の爲め出て行つた　○かくて仰せられけるものを云々　出家の爲に綿を入れた衣服を請求されたものを、何故にさしあげてあつたらう、いつものやうではない不思議だと思ひつかなかつた我が心の愚かさよ　○事しもそれに障らせ給はむやうに　顯信出家のことも乳母の悲しみをきいて鈍るやうに　○かくときつけ給ひては　出家のことを乳母は聞いて　○かくと聞かせ給はゞ　顯信は乳母の悲しみをきいたならば　○つひのこと　此の上もない至つてよいこと　○殿もうへも　道長も高松殿も　○たゞ我れ獨が事ぞや　只われ獨は悲しい　○道心云々　佛の道に志のない人は未來のことまではわかるはずはないことよ

通釋 女君と申すは、今の小一條院の女御であります。今一人は尊子と申します。故中務卿宮具平親王と申すは、村上の帝の第七の皇子でありました。その御男君三位の中將師房の君を道長は聟に取りました。師房は頼通の北の方の兄弟であるから、頼通は御子に養はれてゐたものであります。思慮淺く不思議な事と世の人は申しました。道長の内の人も思ひましたが、道長は深く考へた仔細のあつたことならんと思ひます。男君は大納言で春宮の大夫顯宗と申します。御童名はいは君と申します。今一人は同じ大納言中宮權大夫能信と申します。今一人は中納言長家、御童名は、こわか君であります。今一人は右馬頭にて顯信と申しました。御童名は、こけ君であります。長和元年壬子正月十九日入道しまして、この十四年間は佛のやうにして、修行されてゐます。いと案外にあはれな事であります。自分の無上佛果を得ん爲の出家なることは勿論でありますが、道長の爲にも又法師の御子の無いのが殘念で、物不足のやうに思ひました。さて道長はやがて一度に僧正になさうと仰せられたと承りましたが如何であらう。美しき法衣宮々よりも奉り給ひ道長よりは麻の御衣を奉るをば、無用なることと辭退された事は、道長にとりては非常に困惑されました。家を出でゝ入道された日は、緋の御袒（あこめ）があまたありましたに、顯信いふ、これや、かれや數多重ねて着ることはうるさい、綿を一つに入れなして、一つだけ着たいものである、そのやうにしてくれよと仰せられた。乳母はこれかれ取繕ふはうるさいから、綿を厚くしてあげようと申しました。顯信いふ、さうすれば久しくかかる、只はやくほしいと思ふと申した。乳母は何か考あることと思うて、あまたを一つに取り入れてあげましたものを着て、その夜は家を出られました。されば乳母は他日になつていふ、かく出家の志あつて仰せられたものを、何しにつくりなほしてあげましたらう、いつものやうでない不思議と思はなかつた心のいたらぬ事よと、泣き惑ひましたことは、甚だ尤もなことで、あはれであります。こと更にしも出家を助くるために袒を繕ひ參らせたやうに思うて、出家の事を聞きつけまして、やがて絶え入つて、死人のやうで居りました。人々曰ふ、顯信はかくと聞かば乳母をあはれと思うて御心が亂れるかもしれぬ、今更にいたし方ないことで、これぞめでたい事で、佛になりましたなら、御身の爲にも後の世の善くあることは、最終の願であらうと、言ひました。乳母のいふ、われは佛になり給ふも、うれしくない、わが身の後生を助けられようとも思ひません、只悲しさより外の事はない、道長公

も明子の方も、御子あまた居りますから、甚だよろしい、たゞ我一人の事であるとて、伏しまろびました。いかにも然るべき事であります。道心のない人は、後の世の事までも知るはずはありません。

□

高松殿の御夢にこそ、左の方の御ぐしを、なからより剃りおとさせ給ふと御覽じけるを、かくて後にぞ、これが見えけるなりと思ひ定めて違へさせ祈りなどをもすべかりける事を」と仰せられける。革堂にて御ぐしおろさせ給ひて、やがてその夜山へ登らせ給ひけるに、「加茂川わたりしほどの、いみじうつめたくおぼえしなむ、少しあはれなりし。今はかやうにてあるべき身ぞかしと思ひながら」とこそ仰せられけれ。今の右衞門督ぞ、とくより、この君をば出家の相こそおはすれとの給ひて、中宮權大夫殿のうへに御消息きこえさせ給ひけれど、さる相ある人をば、いかでかとて後に此の大夫殿をばとり奉り給へるなり。正月に内よりいで給ひて、この右衞門督「右馬頭の物見よりさしいでたりつるこそ、むげに出家の相近くなりて見えつれ、いくつぞ」との給ひければ、頭中將「十九にこそなり給ふらめ」と申し給ひければ「さては、ことしぞし給はむ」とありけるに、かくときゝてこそ「さればよ」とのたまひけれ。相人ならねど、よき人は物を見給ふなり。大道殿は「やくなし。いたう歎きてきかれじ。心みだれせむも、この人の爲にいとほし。法師子のなかりつるに、いかゞはせむ。いとけなくてもなさむと思ひしかど、すまひしかばこそあれ」とて、ただ例の作法の法師の御定にもてなしきこえ給ひき。受戒にはやがて殿のぼらせ給ふ。人々のわれもと御仰にまゐり給ひて、いとよそほしげなりき。威儀僧には、えもいはぬものどもえらせ給ひき。御ささに有識僧鋼どものやんごとなきさぶらふ。山の所司、殿の御隨身ども、人拂ひのゝしりて、戒壇にのぼらせ給ひけるほどこそ、入道殿はえ見奉らせ給はざりけれ。御みづからは本意なくかたはらいたしとおぼしたりけり。座主の手輿にのりて、白蓋さゝせてのぼられけるほどこそ、あはれ天台座主戒和尚の一やと見え給ひけれ。世繼が隣に侍るものゝ、そのきはにあひて見奉りけるが、語りはべりしなり。春宮大夫殿、中宮權大夫殿などの大納言にならせ給ひしをりは、さりとも、御耳とどまりて聞かせ給ふらむとおぼえしかど、その大饗のをりの事ども、大納言の座しきそへられしほどなど語り申ししかど、聊か御けしきかはらず、念誦うちして「かやうの事、たゞしばしの事なり」とぞ打のたまはせしなむめでたく優におぼえしとぞ、通任の君のたまひける。この殿の君達男女合せ奉りて十二人、數のまゝにおはします。男も女も御つかさ位こそ心に任せ給へらめ。御心ばへ人がらどもさへ、聊かかたほにて、もどかれさせ給ふべきもおはしまさず、とり〴〵に有識にめでたくおはしまさふも、たゞことゞならず、入道殿の御幸ひのいふ限なくおはしますなめり。さき〴〵の殿ばらの君達おはせしかども、皆かうしも思ふさまにやはおはせし。おのづから、男も女もよきあしきまじりてこそ、おはしまさふめりしか。此の北政所の二人ながら源氏におはしませば、末の世の源氏の榮え給ふべきと定め申すなり。かゝれば、此の二所の御ありさまかくの如し。

語釋　○高松殿　顯信の母　○左の方の御ぐし　頂の中央より左の方の髪　○これが見えけるなりけり　顯信出家の前兆は夢に見えたのだ　○ちがへさせ　惡夢を見たとき吉夢に變化さすること　○祈り　祈禱　○革堂　行願寺なり　○山　比叡山　○今はかやうにてあるべき身ぞかしと思ひながら　今は出家の身だから苦しみをなすは當然と思ひながら　○今の右衞門督　藤原實成　○中宮權大夫殿のうへに御消息云々　顯信は出家前に、今は弟の能信の妻になつてゐる實成の女に言ひよつたことがあつたが　○とり奉りむこにとつた　○内　禁中　○右馬頭　顯信　○物見　牛車の屋形の左右の上部にある窓なり　○頭中將　能信　○入道殿　道長　○やくなし　なげいても無益だゝ　○いたう歎きてきかれじ　甚だなげきて顯信に聞かるゝことをわれはなすまい　○心みだれ　顯信の心のみだれること　○法師子　僧になる子　○幼くても云々　幼きものでも僧になさんとて勸めたことがあるとの意　○すまひしかばこそあれ　何れもいなみしかばそのまゝにしてゐた　○例の作法の法師の御定にもてなしきこえ給ひき　普通人の僧になる作法と同じくして特別のもてなしをしない　○受戒　佛制の戒律を受くること　○よそほしげ　莊嚴　○威儀僧　僧の先達となりて威儀を添ふる僧　○えもいはぬものどもえらせ云々　立派なものを選ばれた　○御さき　先導の役　○有識僧綱　有識は已講、内供奉、阿闍梨の三官をいふ　○僧綱は僧正、僧都、律師なり　○山の所司　山は比叡山なり、所司は寺院の事務を掌るもの　○人はらひのゝしり聲高く前を拂ふ　○戒壇　戒を授くる壇場　○入道殿はえ見奉らせ云々　顯信の戒壇に立てれた時は道長も悲しいので見ることはできなかつた　○御みづからは本意なく云々　顯信は道長の悲しめるさまを見て自分では不本意に思ひ、氣の毒に思うた　○座主　延曆寺の寺務を總理する僧　○手輿　二人にてかつぐ輿　○白蓋　輿の上に白き天蓋をさしかけるをいふ　○のぼられ　戀信受戒の爲に叡山に登り來ませるをいふ　○あはれ天臺座主戒和尚の一　戒和尚とは戒を授くる僧なり、和尚は高僧の敬稱なり。天臺宗ではクワシヤウとよみ、法相、律ではワジヤウと讀み禪宗ではヲシヤウとよむ　○隣に侍るものゝ　隣家のもの　○春宮大夫殿　頼宗○御耳とどまりて　うらやましがる　○その大饗　大納言になつた披露の宴會　○大納言の座しきそへられし云々　頼宗能信の二人大納言になり、一名增したので席をそへた　○念誦などして　念佛などして　○かやうの事たゞしばしの事なり　かやうの榮華は夢の如きものだ　○此の殿　道長　○數のまゝ云々　皆無事でをる　○かたほ　十分にととのはぬこと　○もどかれ　批難され　○まさふも　ますも　○ことごと　異なること　○二所　倫子と明子

通釋　高松殿明子の御夢に、左の方の御髪を後を半より剃りおとしたとみましたが、顯信出家の後になつて、此の事が見えたのだと思ひさだめて、明子は夢ときなどに惡夢を善夢に引き違ひて善夢となさしむるやう、祈りなどをもすべきであつたと仰せられました。革堂で顯信は御髪をおろしまして、やがてその夜山へ登りましたとき、顯信は言ふやう、賀茂川を渡つた時甚だつめたく思ひましたことに悲哀を感じました。今は出家であるから寒暑をも厭ふべきでないと思ひながらと話されました。今の右衞門の督實成は、はやくより顯信を出家の相あると申されて、中宮の權大夫能信の北の方が未だ能信の夫人にならぬ前に、消息して心を通はせましが、實成は出家の相ある人を、ば如何で婿に取るべきとて、後に此の能信を聟に取つたのであります。正月に内裡より出で給うて、實成は顯信が車の側の物見の窓より頭をさしいだされしを見て、此上なく出家される人相近くなつて見えます。幾歳になるかと問ひました。能信言ふ、十九歳になりますといふ、實成言ふ、さては今年出家をし給はんといひました、後に出家を聞いて、實成言ふ、されば案の通りであつたと申しました。人相見でないが、貴き人は物をよく見給ふのであります。道長言ふ、今は無益である、今更何とも出來ぬ。甚だ歎いて顯信に聞かれぬやうにしてくれ、歎いたことを聞いて心を亂れさするのも顯信の爲にかはいさうである。法師子の無かつたため、幼くとも法師になさんと思ひましたが、如何にせん人々は反對したから止めたとて、只例の作法のやうに取扱つて、法師にせられました。受戒の時には道長が登りました。人々はわれも〳〵と御伴に參りまして、甚だ嚴しく立派でありました。威儀僧には言ふに言はれぬ立派な人ども擇ばせました。前驅には有識、僧綱どもの貴い人々が居りました。山の所司や道長の御隨身どもは人を拂ひさわぎました。顯信が戒壇に登り給うた時は道長はあはれに思うて見ることは出來ませんでした。顯信自身は父の悲しめるを見て、本意なく笑止と思ひました。天臺座主は手輿に乘つて、白蓋ささせて登りましたとき、あはれ天臺座主の戒を授くる和尚の一番よと見えました。世繼の隣家に居るものが、其の際に出あつて見奉り

て語りました。春宮の大夫殿、中宮の權大夫殿などの大納言になられたをりは、さりとも御耳に止まつて聞き給ふらんと思ひましたのに、その大饗の時の事どもや、大納言の坐する席を添へひろげられたことなど語り申したけれど、顯信は少しも羨しいと思ふ樣子も見えず念佛を勤めながら、かやうの事はたゞ一時の榮華なりと言はれたことは、立派で優美に思はれたと、通任の君は申しました。道長の子供は男女合せて十二人皆そろうて居ります。男も女も官位は心のまゝに昇進され、御心持や人格は如何とも致しがたきものなるに、少しも不十分で人に惡しく言はるゝ人もなく、各々有識に結構であるのも、他の事ではない。道長の御幸の言ひやうなくあるのでありませう。道長の以前の殿原の君たちありましたが、皆かくの如く思ふさまではなかつた。自然に男も女も善きも惡きも交つてあるやうでした。此の道長の北の方の二人は源氏でありますから、末の世の源氏の榮え給ふべきしるしと評判しました。かゝれば此の二所の御ありさまかくの如くであります。

□

但し殿の御前は三十より關白せさせ給ひて、一條院三條院の御時世をまつりごち我儘にておはしましゝに、又當代の九歳にて位に即かせにしかば、御年五十一にて攝政せさせ給ふ年、わが御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をば、今の關白おとどに讓り奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふ寛仁三年己未三月十八日、夜中ばかりより胸やませ給ひて、わざとにはおはしまさねど、いかゞおぼしめしけむ、俄かに廿一日の未の時ばかりに起きゐさせ給ひて、御冠めし、搔練の御下襲に布袴をさうぞかせ給ひて、御手水めせば、何事にかと、關白殿をはじめて、殿原もおぼしめすに、寢殿の西の渡殿に出でさせ給ひて、南に向きて拜せさせたまふ。春日の明神に暇申させ給ふなりけり。慶命僧都、定基律師して、御ぐしおろさせ給ふ。關白殿をはじめとして、公達殿ばらなど、いとあさましとおぼしめせど、おぼしたちて俄かにせさせ給ふ事なれば、誰れも〳〵あきれて、え制し申させ給はず。あさましとは愚かなり。院源法印、戒の師爲給ふ。信惠僧都の袈裟衣をぞ奉りそめける。俄かの事にて設けさせ給はざりけるにや、御名行觀とぞつかせ給へりし。後に、しもの字かへて行覺とぞ侍りし。かくて後にぞ、內、東宮の宮達にもかくと聞えさせ給ひける。聞きつけさせ給へる宮たちの御心ども、あさましがりさわぐとは愚かなり。申の時ばかり、小一條院わたらせ給ふ。御門の外にて御車の牛かきおろして、引き入れて、中門の外にておりさせ給ひてこそはおはしましゝか。よせておりさせ給はで、かしこまり申させ給ふほど、いとものかたじけなく、めでたき御有樣なりしぞかし。宮たちも、夕さりこそは渡らせ給ひしか。中宮皇后宮などは、一つ御車にてぞ渡らせたまへりし。行啓のありさまも俄かにて、例の作法にも侍らざりけり。同じき年の九月廿七日、奈良にて御受戒侍りし。かゝる御有樣につけても、めでたき事どもの多く侍りしかど、皆人知り給へる事どもなればこまかに申し侍らじ。

語釋　○殿の御まへ　道長　○當代　後一條天皇　○今の關白　頼通　○わざとにはおはしまさねど　別段たいした容體でもなかつたが　○搔練　紅のねりぎぬの打ちたるもの　○下襲　束帶の時に半臂の下に着るもの　○布袴を云々　指貫の袴をはく　○春日の明神　天兒屋根の命を祭る　○法印　僧に賜はる最上の位　○戒の師　受戒の師　○一條院　前東宮にて寛子の婿　○よせて　御殿

まで車をひきいれて　○かしこまり　遠慮　○例の作法にも云々　例の行啓の作法でない

通釋　但し道長は三十より關白となつて、一條院三條院の御時の政治を執られ、我心のまゝにてをりましたに、又後一條院が九歳にて位に卽きましたので、五十一にて攝政いたしました年、我が身は太政大臣になり攝政をば今の賴道大臣に讓りまして、御年五十四になりました寛仁三年つちのひつじ三月十八日、夜中ごろより御胸をやみまして、特に重態といふ程ではないが、如何に考へたか、にはかに廿一日の未の時分に起きまして、御冠をかぶり、搔練の御下襲に布袴を着まして、御手水をつかひました、何事にかと賴通始め殿原も思ふに、寢殿の西のわたり廊に出まして、南に向いて拜しました。春日の明神に暇乞を申したのでありました。慶命僧都、定基僧都をして御髮下させました。賴通を始として子供たちは甚だあさましと思うたが、思ひ立つて、にはかに致した事であるから、誰も誰もあきれて、留め申すことは出來ません、あさましなどいふもおろかな事であります。院源法印戒の師を致しました。信惠僧都は袈裟衣を奉り始めました。急の事で準備をしませんでしたか、御名は行觀とつけました。後に下の文字を取りかへて、行覺と申しました。かくて後に後一條、後朱雀の宮たちにもかやうにと申し上げました。聞きつけました宮たちの御心どもは、あさましと思うてさわぐは勿論のことであります。申の時分小一條院參りたまひ、御門の外で御車牛かきおろして、車を引き入れて中門の外にて下りまして、御出でになりました。車を中門に寄せて下りませんで、つつしみ申しましたほど、甚だかたじけなく結構なありさまでありました。宮たちも夕景に御出でになりました。中宮皇太后などは、一つ車で御出でになりました。行啓のありさまも、俄かの事で例の定つてゐる作法ではありませんでした。同じき年の九月廿七日、奈良にて御受戒ありました。かゝる御有樣につけても、めでたい事など多くありましたが、皆人々の知り給ふ事であるから、こまかには申しません。

□

御出家し給へれど、猶又同じき五月八日准三宮の位にならせ給ひて、年官年爵えさせ給ふ。みかど東宮の御祖父、三人の後、關白左大臣、內大臣あまたの納言の御父にておはします。世を保たせ給ふことかくて三十一年ばかりにやならせ給ひぬらむ、今年は六十におはしませば、かんの殿の御產の後に御賀あるべしとこそ人申すめれ。いかに又、さま〳〵おはしまさひて、めでたく侍らむずらむ。大かた又世になき事なり。大臣の御むすめ三人、后にてさしならべ奉り給ふこと、あさましく希有のことなり。もろこしには、昔三千人の后おはしけれど、それは筋もたづねで、たゞかたちありと聞ゆるを、隣の國まで擇び出して、その中に楊貴妃ごときは、あまり時めきすぎて、悲しき事あり。王昭君は、えびすの王に賜はりて、胡の國の人となり、上陽人は楊貴妃にそばめられて、みかどに見え奉らで、春の行き秋の過ぐることを知らずして、十六にて參りて、六十までありけり。かやうなれば三千人のかひなし。我が國には、七の后こそおはすべけれど、代々に四人ぞ立て給ふ。此の入道殿下の御一つ門よりこそ、太皇太后皇太后宮、中宮三所出でおはしたれば、誠に希有の御幸なり。皇后宮一人のみ、すぢわかれ給へりといへども、それも貞信公の御末におはしませば、これをよそ人と思ひ申すべき事かは。しかれば、ただ世の中は、此の殿の御光ならずといふことなきに、此の春こそはうせ給ひにしかば、いとどたゞ三后のみ世におはしますめり。

語釋　○年官年爵　前にあり　○かんの殿　東宮の女御嬉子　○御賀　六十の賀　○おはしまさひて　ありまして　○大方又世にな

き事なり　大抵比類もなく盛んなことであらう　○あさましく　驚くべく　○筋もたづねてたゞかたちあり云々　血統もかまはずに容顏のよいのを　○楊貴妃　唐の玄宗の妃　○王昭君　漢の元帝の宮女　○えびすの王に賜はり　匈奴の單子に賜ふ　○上陽人　玄宗の宮女　○そばめられ　ねたまれ　○七の后　令制には妃二人、夫人三人、嬪四人にて九人とあり　○皇后宮　後一條天皇の皇后娍子、濟時の女なり　○此の春こそうせ給ひ云々　萬壽二年三月廿五日皇后崩じ給ふ

通釋　道長は出家しましたが、なほ又同じき五月八日准三宮の位になりまして、年官年爵を得ました。三人の后と關白左大臣、內大臣あまたの納言の御父で、後一條院後朱雀院の御祖父であります。世の政治を執りましたことは三十一年ほどになりましたらう。今年は滿六十になりましたので、かんの殿嬉子の御產の後に、六十の御賀あるだらうと、人は申すやうです。いかに又さま〴〵の事がおはしまして、いかばかりめでたいことであらう。大かた又道長の榮華は、世に比類のなきことであります。一家三人の后を奉りしこと、あさましきまで古來例の無いことであります。唐土には昔三千人の后居りましたけれど、それは系統もたずねずして、たゞ容の美しいものを隣の國までさがし出しました。其の中に楊貴妃などは、あまり時にあひすぎて、悲しき事がありました。王昭君は胡國の王に賜はつて、胡の人となり、上陽人は楊貴妃にけおされて、御門に御めにかゝることは出來ずして、春のゆき秋の過ぐる事をもしらずして、十六にて參りて六十になりました。かやうであれば三千人のかひがありません。我が國では、七人の后が居られることであらうが、代々四人を立てました。此の入道の道長の一門より太皇太后宮彰子、皇太后宮妍子、中宮威子の三所が、出でましたから、まことにめづらしい幸であります。皇后宮娍子一人のみ血統は別れてゐます。けれどもそれも貞信公の御子孫でありますから、これを他人とは申されません。さればただ世の中は、この道長の御光であります。この春皇后娍子は失せましたれば、ます〴〵三人の后のみ世におはすやうであります。

□

此の殿事にふれてあそばせる詩和歌など、居易、人丸、躬恒、貫之といふとも、え思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ。春日の行幸は、さきの一條院の御時よりはじまれるぞかし。それに又、當代をさなくおはしませども、必ずあるべきことにて、はじまりたる例になりにたれば、大宮御輿にそひ申させ給ひておはします。めてたしなどいふも世の常なり。すべらぎの御祖父にて、打添ひつかふまつらせ給へる殿の御ありさま御かたちなど、少し世の常にもおはしまさましかば、他かぬ事にや侍らまし。そこら集りたる田舍世界の民百姓、これこそはたしかに見奉りけめ。たゞ轉輪聖王などは、かくやとひかるやうにおはしますに、佛見たてまつりたらむやうに、額に手をあてゝ拜みまどふさまことわりなり。大宮の赤色の御扇さしかくして、御肩のほどなどは、すこし見えさせたまひけり。かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御透影もふたぎ、いかゞとこそはもてかくし奉るに、こと限りあれば、今日はよそほしき御ありさまも、少しは人の見奉らむも、などかはともや思召しけむ、殿も宮も、いふよしなく御心ゆかせ給へりけること、おしはかられ侍るは。殿、大宮に、

そのかみや祈りおきけむ春日野のおなじ道にもたづねゆくかな

御かへし、

くもりなき世の光りにや春日野のおなじ道にもたづねゆくらむ

かやうに申しかはさせ給ふほどに、げに〳〵と聞えて、めでたく侍りしなかにも、大宮のあそばしたりし、

三笠山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきの跡をたづねて

これこそは、翁らが心およばざるにや、あがりても、かばかりの秀歌えさぶらはじ。その日にとりては、春日の明神のよませたまへりけるとおぼえ侍り。けふかゝる事どもの榮あるべきにて、前の一條院の御時にも、大入道の行幸申し行はせ給ひけるにやとこそ心得られ侍れな、大方さいはひおはしまさむ人の、和歌の道おくれ給へらむは、事のはえなくや侍らまし。此の殿は折ふしごとに、必ずかやうのこと仰せられて、事をはやさせ給ふなり。一年の北政所の御賀によませ給へりしは、

ありなれし契はたえて今更にこゝろけがしに千代といふらむ

又この一品の宮の生れおはしましたりし御うぶやしなひ、大宮のせさ給へりし夜の御歌は聞き給へりや。それこそいと興あることを。たゞ人は思ひよるべき事にも侍らぬ和歌の體なり。

おと宮のうぶやしなひを姉宮のしたまふ見るぞ嬉しかりける

とかや承りしとて、心よく怨みたり。

語釋　○居易　唐の詩人白樂天なり、名は居易、字は樂天、香山と號す　○人丸　奈良朝の歌人、柿本人麿　○躬恒　凡河内躬恒　○貫之　紀貫之　○春日の行幸　奈良春日神社への行幸　○當代　後一條天皇　○必ずあるべきことにて　必ず行幸あるべきことで　○はじまりたる例に云々　先帝の時に例を開きたることなれば　○大宮　御母彰子　○世の常にもおはしまさましかば　道長のさまは人間とは思へない程立派で、今少し普通であつたなら、かへつてよからうと思はれた　○そこら　澤山　○これこそは云々　此の道長をたしかに見たらう　○轉輪聖王　佛說に天竺の大聖王としていへるなり　○扇さしかくして　肩でかほをかくす　○つゆの御透影もふたぎ　僅のかげの透いて見ゆるすきまも塞ぐ　○いかゞとこそはもてかくし奉るに　見る人をしてあまりなりと思はしむるまでかくす　○こと限りあれば　物事には限りのあるものなれば　○よそほしき御ありさまも　此の立派なありさまを　○いふよしなく御心ゆかせ給へりけること　いふにいはれぬ御滿足であつたこと　○そのかみや云々　むかし兼家公が子孫の繁昌を祈りおかれてあつたらう其の春日神社に今一族うち拂うて目出たく神詣するよとなり　○曇りなき云々　一首の意は、仰せの如く此の聖代の御威光により、かく打拂うて同じ道に神詣するよとの意なり　○三竿山云々　一首の意は、昔一條天皇行幸の御あとをたづねて、春日明神のある三笠山をさして來給うたといふこと。三笠山は春日神社の後にあり、指しては笠にちなめり、石上は古の枕詞なり此の御歌千載集にあり　○翁らが心およばざるにやあがりてもかばかりの秀歌えさぶらはず　世繼は曰ふ私らの淺學の爲め知らぬのか上代でも此の位の秀歌はあるまいと思ふ　○けふかゝる事どものはえあるべきにて　今日かくの如き名譽あるべきを知つて　○大入道　兼家　○心得られ侍れな　なは感嘆詞　○おくれ給へらむは　下手なことは　○事のはえ　事の見ばえ　○此の殿　道長　○かやうのこと　歌をよむこと　○事をはやさせ給ふなり　事の興を添へる　○北政所　道長の奥方　○御賀　六十の賀　○ありなれし云々　一首の意は、世の中に相馴れて親しみし契も、我れ出家の後は久しく絶えた。然るに今六十の賀をするに當り、猶千代もと願ふは我が道心のけがれたるならむとなり　○一品の宮　三條天皇の皇女禎子内親王　○うぶやしなひ　產後三日、五日、七日めに親族より產婦の衣服、赤兒のうぶぎ等を贈り祝宴を開くこと　○おと宮の云々　一首の意は、妹の中宮妍子のうぶやしなひを姉宮なる皇太后がし給ふがうれしとなり。

通釋　道長の事にふれて作りました詩、和歌などは、白樂天や、山邊赤人や、柿本人麿や、凡河内躬恒や、紀貫之といふとも考へつくことは出來まいと思ひます。春日神社の行幸は、さきの一條院の御時より始まりました。それに又後一條院は幼くありますけれど、必ず參り給ふべき事にて、始まりたる例でありましたので、大宮彰子は御興

に添ひ申して參られました。めでたしなどいふも世の常のことで、言葉足らぬのであります。天皇の御祖父で打添ひ御伴をし給へる道長の御有樣御容質など、今少し普通であつたならば、飽かず御すがたをながめたらう。數多集りたる田舍人や國々の民百姓などはたしかに見ましたやうです。たゞ轉輪聖王などは、かやうであらうかと、光るやうでありますから、佛を見ましたやうに額に手をあてゝ拜みまどふさま道理であります。大宮は赤色の御扇をさしかくして、御肩のあたりなどは少し見えました。かやうに貴くなりました人は、少しのすきまもふさぎ、少しでも見えては如何に恐れ多いことと、かくし奉るに、さやうにする事も限りあることなれば、今日は裝はれた御ありさまも、少しは人が見てもわろくはないと思つたらう、道長も大宮も申す詞なきまで御愉快に見えました。道長は大宮に、

そのかみやいのりおきけむかすが野のおなじ道にもたづねゆくかな

といふ歌をよみました、大宮の返しは、

くもりなき世の光りにや春日野のおなじみちにもたづねゆくらむ

かやうに贈答し給ふほどに、まことにもと聞えて、すぐれて居る中にも、大宮のよまれました歌、

みかさ山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきのあとをたづねて

これこそ翁(世繼)らが心の及ばぬためか、上代にもこれほどの秀歌はありますまい。その日にとりては、春日明神のよみましたものと思ひます。今日かくはえ〴〵しき行幸あるべきために、先の一條院の御時にも兼家は奏上して行幸を行はせ給ひけるのかと思ひます。大方幸のあられる人が、和歌の道が劣つて居るのは榮えのなきことであります。道長は事のあるをりふし毎に必ず詩歌を作られて事のはえを添へました。或年の北の方の六十の賀のときによみました歌は、

ありなれしちぎりはたえでいまさらに心けがしに千代といふらん

又この一品の宮禎子の生れました御うぶやしなひを、大宮がいたしました夜の歌は聞きましたか、それこそ甚だ面白いことで、凡人は思ひつくべきものでない和歌のさまであります。

おとみやのうぶやしなひをあね宮のしたまふ見るぞうれしかりける

とか申しますと承つたと心よく笑ひました。

□

四條大納言の、かく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、大入道殿「いかでかゝらむうらやましくもあるかな。わが子どもの影だにふむべくもあらぬこそくちをしけれ」と申させ給ひければ、中關白殿、粟田殿などは、げにさもとやおぼすらむと、はづかしげなる御けしきにて、物ものたまはぬに、此の入道殿は、いと若うおはします御身にて、「影をばふまで、面をやはふまぬ」とこそ仰せられけれ。誠にこそさおはしますめれ。内大臣殿をだに近くえ見奉り給はぬよ。さるべき人は、とうより御心だましひのたけく、御まもりもこはきなめりとおぼえ侍るは。花山院の御時に、五月しもつやみに、五月雨しもすぎて、いとおどろ〳〵しくかきみだれ雨のふる夜、みかどさう〳〵しくやおぼしめしけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔おそろしかりける事どもなどに申しなり給へるに、「こよひこそ、いとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに、けしきおぼゆ。まして物離れたる所などいかならむ。さあらむ所に、ひとりいなむや」と仰せられけるに、「えまからじ」

とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなむ」と申し給ひければ、さる所おはしますみかどにて、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ」と仰せられければ、よその君たちは「便なきことをも奏してけるかな」と思ふ。又うけたまはらせ給へる殿ばらは御けしきかはりて、やくなしとおぼしたるに、入道殿は、つゆさる御けしきもなくて「私の從者をば具し候はじ。此の陣吉上にまれ、一人昭慶門まで送れとおほせごとたべ。それより内には、ひとり入り侍らむ」と申し給へば、「證なき事にこそ」と仰せらるゝに、げにとて御手箱におかせ給へる小刀さして立ち給ひぬ。今二所もにがむ〳〵各おはさうじぬ。子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけむ、「道隆は右衞門の陣よりいでよ、道長は承明門より出でよ」と、それをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに宴の松原のほどに、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて還り給ふ。粟田殿は露臺の外までわななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、物もおぼえで、身の候はじこそ、仰せ事も承らめとて、各たちかへり參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿は、いと久しう見えさせ給はぬを、いかゞとおぼしめすほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて參らせ給へる。いかにいかにと問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものをとりぐして奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰せらるれば、「たゞにて還りまゐりて侍らむは證候ふまじきによりて高御座の南面の柱のものを削りて候ふなり」と、つれなく申し給ふに、いとあさましうおぼしめさる。こと殿たちの御けしきは、今にも猶なほらで、此の殿のかくれて參り給へるを、みかどより始め、感じのゝしられ給へど、羨しきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。猶疑はしくおぼしめされければ、つとめて藏人して、けづり屑をつがはして見よ」と仰せごとありければ、もていきておしつけて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。その削りあとは、いとあざやかにて侍るめり。末の世にも、見る人はなほあさましきことにぞ申しゝかし。

語釋　○四條大納言　藤原公任　○大入道　兼家　○いかでかゝらむ　どうしてあんなに偉いだらう　○影だにふむべく云々　あとについて行く　○中關白　道隆　○粟田殿　道兼　○げにさもとやおぼすらむ　父は實にそのやうに思ふは無理はない　○此の入道道長　○面をやはふまぬ　面をふんで見せます　○内大臣をだに云々　道長をば勿論のこと、今は其の男の内大臣教通さへ公任は近よりて見ることはできぬ身分だ　○御まもり　神佛のまもり　○五月しもつやみ　五月下旬　○おどろ〳〵しくかきみだれ　物すごくおそろしいほど雨の亂れて降ること　○さうゞしく　さびしく　○殿上　清涼殿の殿上の間　○むつかしげなる夜なめれ　恐しい夜である　○けしきおぼゆ　恐しいやうだ　○さあらむ所にひとりいなむや　さういふさびしき所には行かれまい　○えまからじ行くことはできまい　○さる所おはしますみかどにて　さやうのことを好きな天皇で　○豐樂院　諸の節會饗宴等を行ふ所　○仁壽殿　内宴を行はるゝ所　○塗籠　周圍を壁にてぬりこめた室　○大極殿　天皇臨御政をみそなはす所　○よその君たち　他の公卿　○便なき　都合わるいこと　○やくなし　つまらぬこと　○陣吉上　近衞府、衞門府、兵衞府の下役　○瀧口　瀧口の武士にて禁中の護衞を掌る　○證なきことにこそ　一人では行つたか行かぬか證據がないと天皇の仰せだ　○にがむ〳〵　苦しい顏をする　○おはさうじぬ　おはしましぬ　○子四つ　午後十一時より午前一時に至る間は子の刻なり一刻二時間を四分して一つ二つ三つ四つとい

ふ卽ち子四つは午前零時三十分なり　○丑　午前一時より三時迄　○右衞門陣　宜秋門　○それをさへ　行く道までも　○陣　右衞門の陣　○念じて　忍耐して　○その物ともなき聲　何んだかわけのわからぬ聲　○すぢなくて　せんすべなくて　○砌　石だたみ　○身の候はゞこそ　命あらば　○御扇をたゝきて　天皇が扇をたゝきたるなり　○さりげなく　平氣な顏で　○事にもあらずげに　何んでもないことだといふ風で　○つれなく　平氣で　○つとめて　朝早く　○つがはして　繼き合はして　○見たうびけるに　見給ひけるに　○けざやか　あざやか　○末の世　今でも　○あさましきこと　勇氣におどろく

通釋　四條大納言公任のかく何事もすぐれて結構でありますことを、大入道兼家の言ふ、公任は如何にしてかく諸藝に達してゐることであらう。うらやましくあることよ、わが子供らは公任の影だに踏むこと出來ぬは殘念であると申された。道隆や道兼は何事も公任にかくれてゐることを自覺し、父の公任を羨むは、尤もなることと恥かしげなる御樣子で何事も申さぬに、道長は甚だ若くある身で、言ふやう、蔭をばふまずして面を踏まうと仰せられた。まことに今は其のやうであるやうです。內大臣教通をさへ公任は近く見奉ることのできぬ身分ですよ。然るべき人は、早くより心膽もつよく、神佛の守りも强くあるだらうと思ひます。花山院の御時に五月二十日後の闇の夜に、さみだれもすぎていと驚くべくかき亂れ、雨のふる夜、帝はさびしくおぼしめしたらう、殿上に御出でになりまして、遊んで居られましたに、人々物語り申しなどしまして、昔おそろしくあつた話などになりました。花山院のたまふやう、今宵は甚だ氣味わろき夜であるやうだ、かやうに人が多く居てさへ、物恐しき氣もちします。まして物はなれたる所などは如何であらう、そのやうな所に獨り行かれるかと仰せられた。人々は參ることは出來ませんと申しました。道長は何處でも參りませうと申しましたれば、かゝる事を面白がり給ふ帝で、それは甚だ面白いことである、さらば行け、道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿に行けと仰せられました。他の君たちは都合のわろい事を奏したと思ひました。又承つた道隆、道兼は樣子變つてつまらないと思うたのに、道長は少しもそのやうな樣子もなく、道長言ふやう、私の從者をばつれますまい、この陣の吉上でも、瀧口でもよい、一人昭慶門まで送れと、陛下の仰せ言を給はりたい、それより內には、ひとり入りませうと申しますれば、花山院のたまふやう、證據のないことと仰せらるゝに、道長はまことにもと思うて、御手箱に置きました小刀持つて立ちました。今二人もしぶ〳〵參りました。子四つと奏して、かやうに仰せられ議する程に、丑の刻にもなりましたらう、道隆は右衞門の陣より出でよ、道長は承明門より出でよと、それさへ分けましたれば、その通りに參りましたに、道隆は陣まで忍耐して參りましたところ、安の松原あたりに、何だかわからぬ聲などの聞ゆるに、術なくしてかへりました。道兼は露臺の外まで、ふるひながら參りましたに、仁壽殿の東面のみぎりのあたりに、鶯とひとしい高い人のあるやうに見えましたから、夢中になつて、道兼いふ、命のあつてこそ仰せ事も承ることは出來るとて各々歸りましたれば、陛下は御扇をたゝいて笑ひました。道長は甚だ久しくもえぬのを、如何なるありさまかと、甚だ平氣で、なんともない樣子で參りました。花山院はいかに〳〵と問はせますと、甚だのどかに、御刀に削られたる物をとりて具して奉らせ給ふに、花山院はこれは何にぞと仰せられますと、道長言ふやう、たゞにてかへり參りて侍らんは、證據はありますまいによつて、高御座の南面の柱の下を削つて、取りましたと、すげなく申しましたに、甚だあさましく思ひました。他の殿だちの御樣子は、いかに猶なほらで、道長のかくて參りましたのを花山院を始め感じのゝしられ給へど、羨しきにや、又如何なるわけか、物をも言はで、そばについてをりました。道長曰ふ、なほ疑しく思はれるならば早朝に至り藏人をやつて、けづりくづをくみあはせて見よと仰せ言ありましたから、持つて行きて押しつけて見ましたれば、少しもちがひませんでした。その削りあとは甚だあざやかであります。後世にも、それを見る人はなほあさましき事として申しました。

□

故女院の御修法して、飯室の權僧正のおはしましゝ伴僧にて、相人の候ひしを、女房どものよびて相せ

られけるついでに、「内のおとど殿はいかゞおはする」、と問ふに「いとかしこうおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿こそいみじくおはしませ」といふ。又粟田殿を問ひ奉れば、「それもいとかしこうおはします。大臣の相おはします、又あはれ中宮大夫殿こそいみじうおはしませ」といふ。又權大納言殿を問ひ奉れば「それもいとやんごとなくおはします」。「いかづちの相おはします」と申しければ、「いかづちはいかなるぞ」と問ふに、「ひときは、いと高くなれど、後とげのなきなり。されば、御末いかがおはしまさむと見えたり。中宮大夫殿こそ、限なく、きはなくおはしませ」と、こと人を問ひ奉るたびには、此の入道殿を、必ずひきそへ奉りてほめ申す。「いかにおはすれば、かくたびごとには聞え給ふぞ」といへば「第一の相には虎子、如渡、深山峯なり」と申したるに、聊かたがはせ給はねば、かく申し侍るなり。此の喩は、虎の子のけはしき山を渡るが如しと申すなり。御かたちようて、いはゞ毘娑門のいきほひ見奉らむやうにおはします。御相かくの如し」といへば、「誰れよりもすぐれ給へり」とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせ給へる事やはおはします。帥のおとどの大臣まで、かくすかやかになり給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり。いかづちはおちぬれど、又もあがるものを、星のおちて、石となるにぞたとふべきにや。それこそかへりあがる事なけれ。

語釋　○故女院　圓融天皇の皇后東三條院詮子　○御修法　眞言祕密の法を修すること　○飯室の權僧正　師輔の男なる尋禪　○おはしましゝ伴僧　其の時の伴僧なり、伴僧は修法、法會等の時、阿闍梨また尊師を除きたる他の僧をいふ　○内のおとど　内大臣道隆　○天下とる　攝政關白となりて政事を執る　○中宮大夫殿　道長　○權大納言殿　伊周　○いかづち　雷　○後とげ　成し遂げる　○御かたちようて　容貌端麗で　○毘沙門天　佛の道を護る四天王の一　○すかやかに　伊周のずんずんと進んだことをいふ　○星のおちて云々　雷は落らても又あがる、伊周は落ちて再びあがらなかつた、されば星が落ちて石となる相だといふ方がよいと思ふ星は落ちれば再びあがることはない

通釋　故女院詮子の御修法して、飯室の權僧正の御出でになつた時の伴僧で、相人のありましたのを、女房どもが呼んで、人相を見てもらうたついでに、女房は内大臣道隆は如何おはすると問へば、相人いふ、甚だ立派であります、天下とる人相があります。併しながら中宮大夫道長こそすぐれてをりますといふ。又粟田殿を問ひ奉れば、それも甚だ立派であります。大臣の人相があります。又併しながら中宮大夫道長の人相はすぐれてをりますといひました。又權大納言伊周を問ひますと、それも甚だ尊くあります。いかづちの人相がありますと申しました。女房はいかづちとはいかなることぞと問ふに、ひときは甚だ高く鳴れど、鳴りつゞくものでないから御末は如何であらうと見えます。中宮大夫殿こそ限なく際なくありますと、他人を問ふたびに、この道長を必ずひきそへてほめ申しました。女房は如何なるわけてかく度ごとには申すぞといへば、相人は第一の相には「虎子如渡深山峯」と申しますに、少しもたがはぬから、かやうに申すのである。此の譬は虎の子の險しき山の峯をわたるが如しと申すのであります。御容貌は毘沙門の勢見ますやうであります。御相はかやうであるといへば、女房たちはそれをきいて道長の人相は誰よりもすぐれてゐると申しました。非常に上手な人相見であります。當て違ふことはありません。伊周は大臣まで故障もなくすら〳〵となり給へりしを、相人は始よしとは言うたのであらう。雷は落ちれば又もあがるものを、伊周は星の落ちて石となるに喩へませうか、落ちた後は、あがることはありませんでした。

をり〳〵につけたる御かたちなどは、げに長き思ひいでとこそは人申すめれ。中にも三條院の御時、賀茂の行幸の日、雪の殊の外にいたう降りしかば、御單の袖をひきいでゝ、御扇を高く持たせ給へるに、いと白く降りかゝりたれば、あないみじとて、打拂はせ給へりし御もてなしは、いとめでたくおはしましゝものかな。うへの御衣は黑きに、御ひとへぎぬは紅のはなやかなるあはひに、雪の色ももてはやされてえもいはずおはしましゝものかな。高名の某といひし御馬、いみじかりし惡馬なり。あはれそれを奉りしづめ給へりしはや。三條院も其の日の事をこそおぼしめしいでおはしますなれ。御病のうちにも「賀茂の行幸の日の雪こそ忘れがたけれ」と仰せられけむこそあはれに侍れ。かく世間の光にておはしますの殿の一年ばかり、物を安からず思召したりしよ。いかに天道御覽じけむ。さりながらも、些かひけし御心やは通させ給へりし。おほやけざまの公じ作法ばかりにはあるべき程にふるまひ、時たがふる事なく勤めさせ給ひて、内々には所もおき聞えさせ給はざりしぞかし。帥殿の、南の院にて人々あつめて弓あそばしゝに此の殿わたらせ給へれば、思ひかけずあやしと、中關白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて下蔀におはしませど、前にたて奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢數いま二つ劣り給ひぬ。關白殿また御前にさぶらふ人も、今二度のべさせ給へと申てのべさせ給へりけるに、安からずおぼしなりて「さらばのべさせ給へ」と仰せられて又射させ給ふとて、仰せらるゝやう、「道長が家より、みかど后立ち給ふべきものならば、此矢あたれ」とおほせらるゝに、同じものゝ中心にはあたるものか。次に帥殿射たまふに、いみじう臆し給ひて、御手もわなゝくけにや、的のあたり近くだによらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。又入道殿射させ給ふとて、「攝政關白すべきものならば、此の矢あたれ」と仰せらるゝに、初と同じやうに的のわるゝばかりに射させ給ひつ。饗應しもてはやし聞えさせ給ひつる興もさめて、事にがくなりぬ。父おとど帥殿に「なにかいる。な射ぞ〳〵」と制せさせ給ひて、ことさめにけり。入道殿矢もどして、やがて出させ給ひぬ。其のをりは左京大夫とぞ申しゝ。弓をいみじく射させ給ひしなり。又いみじく好ませ給ひしなり。希有に見ゆべきことならねども、人の御さまの、いひいでさせ給ふことのおもむきより、かたへは臆せられ給ふなめり。

語釋　○をり〳〵につけたる御かたち云々　事に臨み折にふれたる時々の容姿　○長き思ひ出　長く忘れぬ　○ひきいでゝ　引き出して　○御もてなし　御態度　○うへの御衣　袍のことで束帶及び衣冠の表衣なり　○あはひ　黑き袍の袖の下より紅の單の袖のひきいだされたるが其黑きと紅なるとの相接する處　○もてはやされて　降りかゝりたること　○高名　有名の　○奉りしづめ　乘りしづめ　○はや　感嘆詞　○光　ほこり　○物を安からず思召したりしよ　伊周の横暴の爲め心配したこと　○些かひけし御心やは通させ給へりし　臆した心持で道隆に追從をしたか、否追從などはしない　○あるべき程にふるまひ　定刻に出勤して執務する　○内々には所もおき聞えさせ給はざりしぞかし　私用の事では道隆に遠慮はしなかつた　○帥殿　伊周　○南の院　六條北、烏丸西にあり　○中關白　道隆　○下蔀におはしませど　道長の官位卑けれど　○前にたて奉りて　先きに弓を射さした　○關白　道隆　○御前　道隆の前　○二度のべさせ云々　今二度勝負をのばすがよい　○安からずおぼしなりて　道長は腹を立てたこと　○同じものゝ中心にはあたるものか　中つたも中つたも眞中に中つた　○無邊世界　際涯なき世界の意で虛空をいふ　○事にがくなりぬ　にがい顏をした　○父おとど　道隆　○なにかいるな射ぞ〳〵　なぜいるか、もはや射るな　○もどして　借りた矢をかへした　○希有に

見ゆべきならねども　伊周の賃けるは當然のことであるが　○人の御さまの　道長の我が家より后みかど立ち云々攝政關白云々の祈りをいふ　○いひいでさせ給ふことのおもむきより　旁若無人の詞を出されたこと　○かたへは　一には、一説に片方なり、伊周をさす

通釋　折々につけて道長の容貌を見たる人々には、長き思ひ出と人は申すやうです。中にも三條院の御時、賀茂の行幸の日に雪が特別に多く降りましたれば、道長は御單の袖をひき出して、御扇を高く持ちました。それに白く降りかゝりましたれば、道長はあゝ強く降る雪にとて打ち拂ひたる御樣子は、甚だ結構なものでありました。上の御衣は黑きに、御單衣は紅のはなやかなるあはひに、雪の色も一層榮えて、言ふに言はれぬものでありました。名高いなにがしといひし御馬は、非常の惡馬であるが、それを乘り靜め給へりしことよ。三條院も其の日の事を思ひ出してあらるゝのであります。御病の中にも、三條院は賀茂の行幸の日の雪は忘れかねると仰せられたことはあはれであります。かく世間の光ともいふべき道長は、一年ほどは憂悶して居りました。いかに天道は御覽になられたらう。さりながら少しもひけを取るやうな心はありませんでした。朝廷の公事作法のみには、當然のまゝにふるまひ、不參遲刻等もなくつとめまして、私の上のことでは遠慮もなく思ふまゝに行ひました。伊周の南の院で人々集めて弓を射ましたとき道長も參りました。思ひかけぬ不思議と道隆は驚き思うて、大に饗應しまして道隆より官位は下であるが、前に立てまして、第一番に射させましたに、伊周の矢の當りは二本負けました。道隆も又前の其に居る人々も、今二度射て勝負を決せよと申して、延べましたに道長は不平に思ひ、さらば延べさせよと言うて、又射給ふとき仰せらるゝやう、道長の家より御門、后立ち給ふべきものならば、この矢當れと言うに、的の正中に當りました。伊周射給ふに、甚だ臆して、御手も振へるためか的のあたり近くだによりませんで、際限もなき空を射ましたので、道隆は靑くなりました。又道長射給ふとて、吾れ攝政關白すべきものならば、この矢當れと仰せらるゝに、初めと同じやうに的のわるゝほど射ました。饗應しもてなしたる興もさめて、事面白からずなりました。道隆は伊周になぜに射る、射るなかれと制止しまして興さめました。道長は矢を返して、やがて退出しました。その時は道長左京太夫と申しました。弓を上手に射ました、又弓を好まれました。道長の伊周に勝ちたるは珍らしきことでもないが、道長の人品や又占言の趣の意外なるよりして、一方は臆せられたのでありませう。

□

又故女院の御石山詣でに、此の殿は御馬にて、帥殿は車にて參り給ふに、さはる事ありて、粟田口より御殿かへり給ふとて、院の御車のもとに參り給ひて、案内申させ給ふに、御車もとどめたれば、轅をおさへて立ち給へるに、入道殿は、御馬をおしかへして帥殿の御うなじのもとに、いと近う打寄らせ給ひて「疾く仕うまつれ、日の暮れぬるに」と御せられければ、怪しくおぼされて見かへり給へれど、驚きたる御けしきもなく、とみにものかせ給はで、「日暮れぬ、とくとく」とそゝのかせ給ふを、いみじう安からずおぼせど、いかゞはせさせ給はむ。やをらたちのかせ給ひにけり。父おとどにぞ申させ給ひければ「大臣輕むる人のよきやうなし」とぞのたまはせける。三月上の巳の日の御祓に、やがて逍遙し給ふとて、帥殿、河原にさるべき人々あまた具して、いでさせ給へり。平張どもあまたうちわたしたるおはし所に、入道殿もいでさせ給ひたる、御車を近くやれば「便なき事、かくなせそ。やりのけよ」と仰せられけるを、なにがし丸といひし御車副の「何事のたまふ殿にかあらむ。かくきこえ給へれば、此の殿は不運におはするぞかし。わざはひや〳〵」とて、いたく御車の牛をうちて、今少し平張のもと近くこ

そ仕うまつりよせたりけれ。「からうも此の男にいはれぬるかな」とぞ仰せられける。さて其の御車副をば、いみじくらうたくせさせ給ひ、御かへりみありしかば、かやうの事にて、此の殿たち御仲のいとあしかりき。

語釋　○故女院　東三條院詮子　○石山詣　一條天皇長德元年二月二十八日なり、時に伊周は内大臣で、道長は權大納言なり　○此の殿道長　○帥殿　伊周　○さはること　差支　○案内申させ給ふに　院に申しあげる爲に其の意を通じたるなり　○御車もとどめたれば　院は御車をとどめ給ふなり　○轅をおさへて立ち　伊周なり　○おしかへして　引きかへして　○うなじのところ云々　伊周のえりくびのところに近く馬上ながらよつてきた　○怪しくおぼされて　伊周は無禮をあやしく思うた　○とみにものかせ給はで道長はにはかにも退かずそのまゝで　○そゝのかせ　せきたつる　○いみじう安からずおぼせど　伊周は甚だ不快に思つた　○やをら　徐かに　○よきやうなし　よき果報ない　○三月上の巳の御祓　三月の節供　○逍遙　あそびあるく　○河原　鴨の河原　○具ひきつれ　○平張　天井を幕にてはりたる假屋　○おはし所　伊周の座所　○御車を近くやれば　道長の車を御者は平張近くやるなり　○便なきこと云々　伊周の詞なり、かゝる所に寄せるは不都合なり、車を退けよ　○御車副　道長の車の左右に居りたる舍人（とねり）　○何事のたまふ殿にかあらん云々　つまらぬ事を言つたものである、こんなに意地がわるいから不仕合である、とんでもない災にあつたと車副の言葉である　○からうも此の男にいはれぬるかな　道長の言なり、こんな下人にひどく辱しめられたのは氣味がよいと、伊周が車副に辱しめられたるを悅びしなり　○らうたく　愛する　○かへりみ　恩顧　○此の殿たち　伊周と道長

通釋　又故女院詮子の御石山詣に、道長は馬にて、伊周は車にて參り給ふに、故障があつて、粟田口より伊周は歸り給ふとて、女院の御車のもとに參りまして、仔細を申しました。女院は御車を停めましたれば、轅をおさへて立ち給へるに、道長は御馬をおしかへして、伊周のうなじのもとに、甚だ近く寄りまして、疾くいだされよ、日は暮れてしまひますにと、仰せになれば、伊周は不思議に思うて見かへりましたが、驚きたる樣子もなく、急にも退きませんので、日は暮れてしまひます、疾く〳〵と催促しました。伊周は甚だ不快に思うたが、如何ともすべきやうなくて、徐に立ち退かせました。父の道隆に申しましたれば、道隆は大臣を輕んずる人はよい事はないと申しました。三月上の巳の日の御祓に、やがて逍遙し給ふとて、伊周は鴨の河原に然るべき人々數多つれて、出られました。日覆の天幕をあまたうち渡したる座所に道長も出まして、御車を近くやれば、道長いふ、不都合なり、さやうにするな、遣り退けよと仰せられました。なにがし丸といふ御車副はいふ、いでや何事をの給ふぞ、かく遠慮がちであるから、あなたは不運であります、わざはひや〳〵とて、ひどく御車牛をうちて、今少し平張のもと近くのりよせました。道長は辛くも此の男に不運などといはれぬるよと仰せになりました。さてその車副をば非常に愛し給ひ、目をかけましたから、かやうの事で、道長と伊周との御仲が甚だわろくありました。

□

女院は人道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿はうと〳〵しくもてなさせ給へりけり。みかど、皇后宮をねんごろに時めかさせ給ふゆかりに、帥殿は明くれ御前に候はせ給ひて、入道殿ばをさらにも申さず、女院をもよからず、事にふれて申させ給ふを、おのづから心やえさせ給ひけむ、いとほいなき事に思召しける。ことわりなりな。入道殿の世をしらせ給はむことを、みかどいみじう、しぶらせ給ひけり。皇后宮、父おとどおはしまさで、世の中をひきかはらせ給はむことを、いと心ぐるしう思召して、粟田殿にも、とみにやは宜旨くださせ給ひし。されども、女院の道理のまゝの御事をおぼしめし、また帥殿をばよからず思ひ聞えさせ給ひければ、入道殿の御事をば、いみじ

うしぶらせ給ひけれど、「いかでかくは思召し仰せらるゝぞ。大臣こえられたる事だに、いといとほしく侍りしに、父おとどのあながちにし侍りしことなれば、いなびさせ給はずなりしにこそ侍れ。栗田の侍おとどにはせさせ給ひて、これにしも侍らざらむは、いとほしさよりも、御爲なむいと便なく、世の人もいひなし侍らむ」など、いみじう奏せさせ給ひければ、むつかしうやおぼしめされけむ、後には渡らせ給はざりけり。されば、上の御局にのぼらせ給ひて、こなたへとは申させ給はで、我れ夜御殿に入らせ給ひて、泣く〳〵申させ給ふ。その日は、入道殿は、上の御局にさぶらはせ給ふ。いと久しう出でさせ給はねば、御胸つぶれさせ給ひける程に、とばかりありて、戸をおしあけてさしいでさせ給へりける。御顔は赤み、ぬれつやめかせながら、御口は快く笑ませ給ひて、「あはや宜旨下りぬ」とこそ申させ給ひけれ。些かの事だに、皆この世ならず侍るなれば、いはむや、かばかりの御有様は、人のともかくもおぼしおかむによらせ給ふべきにもあらねども、いかでかは院をおろかに思ひ申させ給はまし。その中にも、道理すぎてこそは報じ奉りつかうまつらせ給ひしか。御骨をさへこそはかけさせ給へりしか。中關白殿、栗田殿うちつゞきうせさせ給ひて、入道殿に、世のうつりし程は、さも胸つぶれて、きよきよとおぼえ侍りしわざかな。いとあがりての世はしり侍らず、翁物おぼえて後は、かゝること候はぬものをや。今の世となりては一の人の貞信公、小野宮殿をはなち奉りては、十年とおはする事の近くは侍らねば、此の入道殿もいかがと思ひ申し侍りしに、いとどかゝる運におされて、御兄たちは、とりもあへず亡び給ひしにこそおはしますめれ。それもまたさるべくあるやうあることを、皆世はかかるなめりとぞ、人々思召すとて、有様を少し又申すべきなり。

語釋　○とりわき奉らせ　特別愛する　○うと〳〵しく　疎遠に　○みかど皇后宮を云々　一條天皇は皇后を大層御寵愛遊ばされたる縁によりて　○入道殿をばさらにも申さず云々　伊周は道長と東三條院とをそしられた　○心やえさせけむ　陛下は信用遊ばされたらう　○ほいなきもの　頼まれものに　○しぶらせ　進まぬこと　○父おとど　道隆　○世の中をひきかはらせ給はむことを云々　道隆薨じ關白職を他家に移すことを御心配なされて　○栗田殿　道兼　○とみにやは云々　頓には宣旨を下し給はぬ　○女院　東三條院　○しぶらせ給ひけれど　天皇の進ませ給はぬことなり　○いかでかくは思召し仰せらるゝぞ云々　此れより三條院の詞なり　いかなれば道長を關白にせぬと仰せらるゝぞ、伊周の爲に道長は大臣をこえられたることだに、道長の爲に氣の毒であつたのに道隆が強ひて爲したことであるから、伊周もどうともすることは出來なかつた、其の後栗田殿に關白をさせて道長に關白をさせぬのは、道長を氣の毒と思ふよりも、陛下の御爲不都合で、世の人も彼此批評しませうと奏したるなり　○むつかしう　うるさく　○渡らせ給はざりけり　陛下は女院の御へやに御出でがない　○上の御局にのぼらせ給ひて云々　女院は清涼殿の上の御局に登られ、天皇の御臨幸をこなたへと願はずに、自分で夜御殿に御入りになつて　○いと久しう云々　女院は夜御殿を久しく出てこぬこと　○御胸つぶれ　道長の胸つぶれるなり　○とばかりありて　やゝしばらくして　○あはや宣旨下りぬ　あゝ漸く關白とするとの宣旨が下つたと話された　○些かの事だに云々　些細のことでも皆前世の約束ごとであるから　○かばかりの御有様は人の云々　道長の關白になつたことは、人がとやかくやと定めて、おいたから、かうなつたなどといふべきではないが　○いかでかは院を　道長は院を有りがたく思うた　○道理すぎてこそは報じ云々　報恩も道理をすぎたほどのことをした、即ち三條院崩じた時に火葬場から其の御骨を頸にかけて陵に行かれた）　○さも胸つぶれて　世繼の心配するさまである　○きよ〳〵と　氣をもむこと　○あがりての世　上代　○貞信公　忠平　○小野宮　實頼　○十年とおはする云々　攝政關白で十年居られた人はない　○かゝる運におされて　道長の大なる運命にまけて　○それもまたさるべくあるやうあることを　かやうに幸運を得られたのも然るべき前世の約束であるものを　○世は

かゝるなめりとぞ云々　攝政關白ならば皆同じことだと人は思うてゐるから攝政關白の話を少し申すべきである

通釋　女院詮子は、道長を特別に非常に愛してをられたから、伊周はうとうとしく待遇されてゐました。一條院は皇后宮定子をねんごろに御寵愛し給ふ緣により、帥殿伊周はあけくれ陛下の御前に御伺いたして、道長をば申すに及ばず女院までも、あしざまに事にふれて申しました。陛下は自然と知り給うたのか、道長と女院とを甚だ本意なきものと思ひました。道理であります。道長の政事を執らるゝことを帝は甚だ澁りました。又皇后宮も父道隆大臣が居りませんで、世の政事を他人の手に移すことを甚だ心苦しく思ひまして、道兼にも急には宣旨を下させませんでした。されど女院は道理のまゝの事を思ひ、また伊周をあしく奏しましたれば、陛下は道長の事を甚だしぶらせ給うたけれど、女院詮子の言はれるやう、如何で、かやうに思召さるゝぞ、伊周に大臣を越えられた事だに、甚だ氣の毒に思ひました。けれど、父の大臣道隆の强ひて致しましたことなれば、御ことわりできかねましたらう。道兼に關白をさせて道長にさせぬことは、道長を氣の毒に思ふよりも陛下の御爲め、甚だ都合あしく世の人もいひなしませうなど、非常に奏聞しましたから、陛下はむづかしく思召しならられたらう、後には女院の御方に御臨幸ありませんでした。されば女院は上の御局にのぼりまして、こちらへ御臨幸は御願ひいたしませんで、自ら夜の御殿に入らせ給うて泣くなく申しました。その日は道長は上の御局に居りました。女院は夜の御殿より久しく出られませんから、道長も落膽してをられた時に、しばらくして女院は戸を推しあけてさし出でました。御顏は赤くなり、涙にぬれつやめかせながら、御口は心よく笑み給うて、ああ關白の宣旨下つたと申されました。少しの事でも皆前世の約束ごとなれば、ましてかやうの重大事件は人のとやかく左右することの出來ることでないが、いかてか女院をおろかに思ひませう、その中にも道理をすぎて御報恩いたしました。即ち女院薨去の時に道長は御骨をさへ首にかけられました。道隆も道兼も打ちつゞき失せまして、道長に世の政事の移りし時は、私は(世繼)道長も早世するかと心配して恐れあやぶみました。甚だ遠き上代の事は知りませんが、翁の物おぼえて後は、攝政關白で長くつゞくことは無いものであります。今の世となつては、攝政關白の貞信公忠平、小野宮實賴を除いては、十年續くことは近年無いことであるが、この入道殿道長も如何と思ひ申しましたに、いとど道長のかゝる幸運に壓されて、御兄たちはとりあへず亡びたまひしならん、かく幸運におはしたるも、また然るべき宿世のありしに由ることである。然るに世の人々は、いつも世間はかやうなるものなりと思ひ居られることは心外なれば、古より攝政關白となりし人々の有樣を少し申しませう。

□

世の中のみかど、神の代七代をばさるものにて、神武天皇より始め奉りて、三十七代に當り給ふ孝德天皇の御代よりこそは、さま〴〵の大臣定まり給ふなれ。但し此の御時、中臣の鎌足の連と申して、內大臣になりはじめ給ふ。其のおとどは、常陸の國にて生れ給へりければ、三十九代にあたり給へるみかど、天智天皇と申す。其のみかどの御時にこそ、此の鎌足のおとどの御姓藤原と改り給ひたれ。されば、世の中の藤氏の始は、內大臣鎌足のおとどをし奉れり。その末々より、多くのみかど、后、大臣、公卿、さま〴〵になりいで給へり。但し此の鎌足のおとどを、此の天智天皇、いとかしこく時めかしおぼして、わが女御御一人を、此のおとどに讓らしめ給ひつ。その女御、たゞにもあらず孕み給へりければ、みかどのおぼさしめ給ひたるやう、此の女御の孕める子、男ならば、おとどが子とせむ、女ならば我が子とせむとおぼして、かのおとどに仰せられけるやう、「男ならばおとどの子とせよ、女ならばわが

子にせむ」と契らしめ給へりけるに、此の御子男にて生れ給へりければ、内大臣の御子とし給ふ。此のおとどは、もとより男一人女一人をぞ持ち奉り給へりける。此の女御の御腹に、さしつゞき女二人、男二人生れ給へぬ。その姫君、天智天皇の皇子大友皇子と申しゝが、太政大臣の位にて、次にはやがて同じ年の内に帝となり給ひて、天武天皇と申しける帝の女御にて、二所ながらさしつゞきおはしけり。おとどのもとの太郎君をば、中臣の意美麻呂とて、宰相までなり給へり。天智天皇の女御の孕まれ給へりしは、右大臣までなり給ひて、藤原不比等のおとどとておはしけり。うせ給ひてのち、贈太政大臣になり給へり。鎌足のおとどの三郎は宇合とぞ申しける。四郎は麻呂と申しき。此の男君たち、皆宰相ばかりまでぞなり給へる。かくて鎌足のおとどは、天智天皇の御時、藤原の姓賜り給ひし年ぞうせさせ給ひける。内大臣の位にて二十五年ぞおはしましける。太政大臣になり給はねど、藤原氏のいではじめの、やんごとなきによりて、うせ給へる後の御諱、淡海公と申しけり。此の繁樹がいふやう、「大織冠をばいかでか淡海公とは申さむ。大織冠は、大臣の位にて二十五年、御年五十六にてなむかくれおはしましける。主ののたまふことも、天の川をかき流すやうに侍れど、をりをりかゝるひがことぞ交りたる。されどもたれか又かうは語らむな。佛在世の淨名居士とおぼえ侍るものかな」といへば、世繼がいはく、「昔唐國に孔子と申すものしりののたまひけるやう侍り。智者も千のおもひはかりありといへども、必ず一つのあやまちありとなんあれば、世繼、年百歳に多くあまり、二百歳に足らぬほどにて、かくまで、問はずがたりを申すは、昔の人にも劣らざりけるにあらむとなむおぼゆる」といへば、繁樹「しかしか、まことに申すべき方なくこそ侍れ」とて、且は涙をおしのごひなど、感ずるさまことなり、まことにいひても、あまりにぞおぼゆるにや。

語釋　○いとかしこく時めかし　大變に寵愛せられた　○女二人　氷上娘、五百重娘、○男二人　不比等、定慧　○大友皇子云々　大友皇子を天武天皇とせしは誤なり、大友皇子は弘文天皇である、但し二人の娘は天武天皇の妃となれり　○宰相　中納言となれるをいふ　○大織冠をばいかでか淡海公とは申さむ　繁樹は世繼の詞を反駁せしなり、淡海公とは不比等のことだといへるなり　○主世繼をさす　○天の川云々　懸河の辯　○ひがごと　まちがひ　○千のおもひはかり　千慮　○しかしか　御尤だ御尤だ　○まことにいひても云々　世繼がありのままゝにいひても繁樹はそれ以外に思ひ添ふることあるにやあらんとのことなり

通釋　世の中の帝、神代七代は言ふまでもないが、神武天皇より始めまして、三十七代に當り給ふ孝德天皇の御代より、さま〴〵の大臣は定まりました。たゞしこの御時中臣の鎌足の連と申して、内大臣になり始めました。其の大臣は常陸の國で生れました。三十九代に當りました帝を天智天皇と申します。其の帝の御時に鎌足の大臣の御姓藤原と改りました。されば世の中の藤氏の始は内大臣鎌足の大臣を申します。その子孫より多くの帝、后、大臣、公卿さま〴〵になり出でました。此の鎌足の大臣を天智天皇は甚だすぐれて愛用されて、わが女御一人を此の大臣に讓られました。その女御は姙娠してをりましたので、帝は思しめさるゝやう、此の女御のはらめる子、男ならば大臣の子とせよ。女ならば朕が子としようと思して、鎌足に仰せけるやう、男ならば大臣の子とせよ、女ならばわが子とせんと約束されました。この御子、男にて生れましたから、内大臣の御子としました。この大臣はもとより、男一人女一人をもつてをりました。この女御の御はらにさしつづき女二人、男二人生れました。その姫君は天武天皇と申しました帝の女御で、二所ながら、さしつづきなられました。鎌足のもとの太郎君をば、中臣の意美麻呂と

申して宰相までなりました。天智天皇の女御の生みました男君は、右大臣までなりまして、藤原不比等の大臣とて居りました。失せまして後に贈太政大臣になりました。鎌足大臣の三郎は宇合と申しました。四郎は麻呂と申しました。此の男君たち皆宰相までなりました。かくて鎌足大臣は、天智天皇の御時、藤原の姓を賜はりし年に失せました。内大臣の位で二十五年居りました。太政大臣になりませんけれど、藤原氏の出で始めの貴きによつて、失せたまひし後のおくり名を淡海公と申しました。此の繁樹の言ふやう、大織冠鎌足公をばいかでか淡海公とは申さん、大織冠は大臣の位で二十五年、御年五十六で失せました。主(世繼)の言ふことは、天の川をかき流すやうに能辯にすら〳〵としてをるが、時々かゝるあやまつたことが交つてゐます。されども誰か世繼のやうに語るものあらうか、釋迦在世中の維摩居士とも思ひますものよと、ほめれば、世繼が言ふやう、昔支那の國に、孔子と申すものしりの言はれたことがあります。智者も千慮の中には一つの過失ありとあれば、世繼は百歳に餘り、二百歳に足らぬほどの老人で、かくまで問はれぬに話をするのは、昔の人にも劣らないのであらうと思ふといへば、繁樹の言ふやう、さやうさやう、まことに申すべきやうなく、其の通りであるとて、且は涙をおしのごひなど感ずるさま、他の人に異つて見えます。此二人の翁の體裁は、口に言ふにもあまりなるまでに思はれました。

□

御子の右大臣不比等のおとどは、實は天智天皇の御子なり。されど鎌足のおとどの二郎になり給へり。此の不比等のおとど、御名の文字よりはじめて、なべてならずおはしましけり。ならび等しからずと付けられ給へる名にてぞ、此のもじは侍りける。此の不比等のおとどの御男君たち二人ぞおはしける。太郎は武智麻呂(むちまろ)ときこえて、左大臣までなり給へり。二郎は房前(ふさまさき)と申して、宰相までなり給へり。此の不比等のおとどの御むすめ二人おはしけり。一所は聖武(しやうむ)天皇の御母后光明(くわうみやう)皇后とぞ申しける。今一所の御娘は、聖武天皇の女御にて、女御子(をんなみこ)をぞ生み給へりける。女御子を、聖武天皇女帝にする奉り給ひてけり。此の女帝をば高野の女帝と申しけり。二度位に卽かせ給ひたりける。弓削の法皇は此の時ぞかし。さて不比等のおとどの男子二人、又御弟二人とを四家となづけて、みな門(かど)わかち給へりけり。その太郎武智麻呂をば南家となづけ、二郎房前をば北家となづけ、御はらからの宇合(うまかひ)の式部卿をば式家(しきけ)となづけ、その弟の麻呂をば京家となづけて給ひて、之れを藤氏の四家とはなづけられたるなりけり。此の四つの家より、あまたのさま〳〵の國王、大臣、公卿多くいで給ひて、榮えおはします。しかあれど、北家の末今に枝ひろごり給へり。その御つゞきを、また一筋に申すべきなり。絶えにたる方をば申さじ。人ならぬ程のものどもは、おのづから其の御末にもや侍らむ。此の鎌足のおとどよりの御次々、今の關白まで十三代にやならせ給ひぬらむ。その次第をきこしめせ。藤氏と申せば、たゞ藤原をばさいふなりけりとぞ、人はおぼさるらむ。さはあれど、本末知ることは、いと有り難きことなり。

語釋　○なべてならずおはしけり　普通でなかつた　○宰相　參議をいふ　○聖武天皇の御母光明皇后　光明皇后は安宿媛(あすかひめ)といひ聖武天皇の皇后にて孝謙天皇の母后なり　○高野の女帝　孝謙天皇　○弓削(ゆげ)の法皇(はふわう)　道鏡　○人ならぬ程　零落したる人　○藤氏と申せば云々　藤氏と申せば皆一樣なりと思ふ人もあるべけれど、本末等の別ありて區別することはたしかならず　○いと有りがたき困難

通釋　御子の右大臣不比等の大臣は、實は天智天皇の御子であります。されど鎌足大臣の二男になりました。この

不比等の大臣の御名の文字より始めて、なみなみでなくありました。この文字はならびひとしからずとつけられた名であります。この不比等の大臣の男君は二人をりました。太郎は武智麿と申して左大臣までなりました。二郎は房前と申して宰相までなりました。又御女は二人をりました。一人は聖武天皇の御母后皇太夫人と申しました。今一人は聖武天皇の后にて、光明皇后と申しました。そして女親王を生みました。この女親王を聖武天皇は女帝にすゑ奉りました。この女帝をば高野の女帝と申して、二度位に即かれました。弓削の道鏡は此の時であります。さて不比等の大臣の男二人又御弟二人とを四家と名づけ、みな門戸を分けました。その太郎武智麿をば南家と名づけ、二郎房前をば北家と名づけ、御兄弟の宇合の式部卿を式家と名づけ、その弟の麿をば京家と名づけまして、之れを藤氏の四家とは、名づけられたのであります。此の四家よりあまたのさまざまの國王、大臣、公卿多く出でまして榮えてをります。されど北家の子孫は今に繁榮してゐます。その御つづきを一筋に申しません。零落して人らしくない程のものどもは自然に其の子孫にも居りませう。此の鎌足大臣の御つぎ〳〵今の關白頼通まで十三代になりましたらう。即ち其の次第を御聞きなさい。鎌足、不比等、房前、眞楯、内麿、冬嗣、良房、基經、忠平、師輔、兼家、道長、頼通であります。藤氏と申せば只藤原をばすべていふと人は思ひませう。されど本來嫡庶の別あつて是を知りあきらめることは容易なことではありません。

□

内大臣鎌足のおとど藤原の姓賜はり給ひての年の、十月十六日にうせさせ給ひぬ。御年五十六。大臣の位にて廿五年。此の姓のいでくるを聞きて、紀氏の人のいひける「藤かゝりぬる木は枯れるぬるものなり。今ぞ紀氏はうせぬむずる」とぞのたまひける。まことにこそしか侍るめれ。この鎌足のおとどの病つき給へるに、昔この國に佛法ひろまらず、僧などはたはやすく侍らずやありけむ、聖德太子の傳へ給ふといへども。此の頃だに生れたるちごも、法華經をよむと申せども、またよまぬも侍るぞかし。百濟國より渡りたりける尼して維摩經供養し給へりけるに、御心地一度はおこたりて侍りければ、その經をいみじきものにし給ひけるままに、維摩會は侍るなり。

語釋　○紀氏の人　紀朝臣にて建内宿禰の末裔なり　○藤かゝりぬる木は云々　藤蔓のかゝれる木は枯れるものだ。今藤を以て氏とする一族顯はれたれば木を以て氏とする紀氏は滅亡せんとなり　○たはやすく侍らず　容易に無かりしとなり　○此の頃だに生れたるちごも云々　此の頃生れたものはちごも法華經をよむけれども、またよまぬものもある　○百濟より渡りたる尼に云々　僧侶は不足であるから百濟より來た尼に維摩經供養させた　○おこたりて　全快して　○侍るなり　起つたといふこと

通釋　内大臣鎌足の大臣は藤原の姓賜はつての年十月十六日に失せました。御年五十六であります。大臣の位で廿五年をりました。藤原の姓の出でくるを聞いて、紀氏の人は言ひました。「藤のかゝる木は枯れるものである。今や紀氏はなくならうとする」と申しました。まことに其の通りでありませう。この鎌足の大臣病氣になりました時に、昔は佛法もひろまらず、僧などもたやすくは見つかりませんでしたらう。聖德太子は佛法を傳へ給ふというてゐるが、この頃でさへ生れたちごも法華經をよむと申せど、まだ讀みえぬも居りますぞよ。さて百濟に渡つた尼に維摩經供養させましたに、鎌足の御心ち一度に全快しましたから、此の經を有り難いものに思うて維摩會は起つたのであります。

□

鎌足のおとどの御次郎右大臣正一位不比等のおとど御年六十二、養老四年八月三日失せ給ふ。大臣の位

にて十三年、贈太政大臣にならせ給へり。元明天皇、元正天皇の御時二代、大臣にておはしましき。不比等のおとどの御次郎房前宰相にて二十年、大炊天皇の御時、天平寶字四年庚子八月七日、贈太政大臣になり給ふ。元正天皇聖武天皇二代、このあひだ宰相にて、天平九年四月十七日にうせ給ひにき。

語釋　○大炊天皇　淳仁天皇

通釋　鎌足大臣の二男は右大臣正一位不比等の大臣で、御年六十二、養老四年八年三月失せました。大臣の位で十三年、贈太政大臣になりました。元明天皇、元正天皇の御時二代大臣でありました。不比等大臣の二男房前、宰相で二十年、大炊天皇の御時。天平寶字四年庚子八月七日贈太政大臣になりました。元正天皇、聖武天皇二代の間宰相でをられて、天平九年四月十七日に失せました。

□

房前のおとどの四男眞楯の大納言、稱德天皇の御時、天平神護二年三月十五日にうせ給ひぬ。御年五十二。贈太政大臣、公卿にて七年。

眞楯の大納言の御二郎右大臣從二位左近衛大將内麿のおとど、御年五十七。公卿にて二十年大臣の位にて七年、贈從一位左大臣、桓武天皇、平城天皇の二代にあひ給へり。内麿のおとどの御三郎冬嗣のおとどは右大臣までなり給へり。贈太政大臣、此の殿より次々、さま〴〵あかしたれば、こまかに申さじ。鎌足の御代より榮えひろごり給へる御末々、やう〳〵うせ給ひて、此の冬嗣の程は、むげに心細くなり給へり。そのほどは、源氏のみこそ、さま〴〵大臣公卿にておはせしに、此のおとどなむ、南圓堂を建てゝ、丈六の不空羂索觀音をすゑ奉り給ふ。さてやがて、不空羂索經一千卷供養し給へり。今に其の經ありつゝ、藤氏の人々にとりてまもりにしあひ給へり。その佛經の力にこそ侍るめれ。また榮えてみかどの御うしろみ、今に絶えず末々せさせ給ふめるは。その供養の日ぞかし、この姓の上達部あまた、日のうちにうせ給ひにければ、まことにや人々申すめり。

語釋　○さま〴〵あかしたれば　くはしくのべたから　○南圓堂　奈良興福寺中にあり　○不空羂索觀音　三面七臂の觀音なり、不空羂索とは生死の大海に於て妙法蓮華の餌を散じ、心念不空の索を以て、衆生の魚を釣りあげ之れを菩提の彼岸に送るの意なり　○末々せさせ給ふめる　みかどの御うしろみにかゝる。末々は子孫なり。子孫はみかどの後見をするとのこと　○こと姓　他姓の　○日のうちに　一日の中に

通釋　房前の大臣の四男眞楯の大納言は、稱德天皇の御時、天平神護二年三月十五日に失せました御年五十二、贈太政大臣、公卿にて七年をりました。

眞楯の大納言の御二男、右大臣從二位、左近衛大將内麿の大臣、御年五十七。公卿にて二十年、大臣の位にて七年、贈從一位左大臣で、桓武天皇、平城天皇の二代に仕へました。

内麿大臣の御三男冬嗣の大臣は、左大臣までなりました。贈太政大臣であります。此の殿より次々は前にさま〴〵話しましたから、細かに申しません。鎌足の御代より榮えひろがり給へる御子孫は段々失せまして、此の冬嗣の時は、此の上なく心細くなりました。その時分は源氏ばかりさま〴〵大臣公卿にてをりましたに、此の大臣は南圓堂を建てゝ丈六の不空羂索觀音を安置しました。やがて又不空羂索經一千卷供養しました。今に其の經はあつて、藤

原氏の人に取つて互に守りとしてをります。其の佛教の力でありませう、又榮えて、帝の御後見今に絶えず末々までするやうに見えます。その供養の日で上ります、他姓の上達部あまた一日の中に死にましたれば、世人は大願の功德なりと言うたのはまことでありませうか。

□

一、冬嗣おとどの御太郎長良の中納言は、贈太政大臣までなり給へり。
一、長良のおとどの御三郎基經のおとどは太政大臣までなり給へり。
一、基經のおとどの御四郎忠平のおとどは太政大臣までなり給へり。
一、忠平のおとどの御二郎師輔のおとどは右大臣までなり給へり。
一、師輔のおとどの御三郎兼家のおとどは太政大臣まで。
一、兼家のおとどの御五郎道長のおとどは太政大臣まで。

道長のおとどの御太郎只今の關白左大臣頼道のおとど、これにおはします。此の殿の御子の、今までおはしまささりつるこそ、いと不便に侍りつるを、此の若君の生れさせ給へる、いとかしこき事なり。母は申さぬことなれど、これはいとやむごとなくさへおはするこそ。故左兵衛督は人がらいとしも思はれ給はざりしかども、もとのあて人におはするに、又かく世をひゞかす御孫のいでおはしましたる、なきあとにもいとよし。七夜の事は、入道殿せさせ給へるに、つかはしける歌、

年をへてまちつる松の若枝にうれしくあへる春のみどり子

みかど東宮をはなち奉りては、これこそ孫のをさとて、やがて御わらは名を長君とつけ奉らせ給ふ。此の四家の君たち、昔も今もあまたおはします中に、みちにたえずすぐれ給へるはかくなり。

語釋　○此の殿　頼通　○苦君　道房　○故左兵衛督　源憲定　○人がらいとしも云々　品位高く人より思はれざりしとにて、官位のひくきをいふ　○あて人　爲平親王の御子なればいふ　○御孫　道長の孫、頼通の長男なり　○なきあとにもいとよし　死後でも満足だ　○七夜　七夜の祝　○年をへし云々　一首の意は、數年來みどり子の生まれるのを待ちつるに、松の若枝に、今年はみどり子の生じたのはうれしいとの意なり。松の若枝は頼通をさす　○みどり子　松のみどりにかけていふ。道房の生れたこと　○みかど東宮を云々　後一條院、後朱雀院も外孫にあたるが、それを除いては道房は第一の孫である　○みちたえず　系統絶えず　○かくなり　此の道りだ

通釋　冬嗣大臣の長男長良の中納言は、贈太政大臣までなりました。
一、長良大臣の三男基經大臣は、太政大臣までなりました。
一、基經大臣の四男忠平大臣は、太政大臣までなりました。
一、忠平大臣の二男師輔大臣は、右大臣までなりました。
一、師輔大臣の三男兼家大臣は、太政大臣までなりました。
一、兼家大臣の五男道長大臣は、太政大臣までなりました。
一、道長大臣の長男、只今の關白左大臣頼通の大臣これにをります。この殿の御子が今まで無かつたことは、甚だ氣の毒でありましたものを、道房の生れましたことは、甚だめでたく悦ばしき事であります。母は今迄の例には申さぬことなれど、甚だ高貴の御血統であります。故左兵衛督憲定は人物としてすぐれた所なく、甚だ世の覺えなく

不遇の人であつたが、高貴の血統で又かやうに、世をひびがす御孫の生れましたことは、亡き後にも甚だよいことであります。七夜の事は道長がいたしまして、つかはしたる歌、「年をへてまちつる松のわかえだにうれしくあへる春のみどり子」といふのであります。帝、東宮を除きましては、これは孫の長とて、やがて御わらは名ををさ君とつけました。この藤氏四家の君だち、昔も今もあまた居る中に、特に子孫絶えず繁榮し、すぐれてをるはこの家で以上のべた通りであります。

□

その鎌足のおとど生れ給へるは、常陸の國なれば、かしこに鹿島といふ所に此の御神をすましめ奉り給ひて、其の御時より今に至るまで、あたらしき御かど、后、大臣立ち給ふをりは、御幣の使かならず立つ。みかど奈良におはしましゝ時に、鹿島遠しとて、大和國三笠山にふり奉りて、春日明神となづけ奉りて、今に藤氏の御氏神にて、おほやけ、男女使にたてさせ給ひ、后の宮、氏の大臣公卿、皆此の明神に仕うまつり給ひて、二月、十一月上の申の日御祭にてなむ、さまざまの使たちのゝしる。みかど、此の京にうつらしめ給ひては、又近くふり奉りて、大原野と申す。ささらぎの初卯の日、霜月の初子の日と定めて、年に二度の御祭あり。又同じくおほやけの使たつ。藤氏の殿ばら、皆この神に御幣十列たてまつり給ふ。猶も近くとて、又ふり奉りて、吉田と申しておはしますめり。此の吉田明神は、山蔭の中納言のふり奉り給へるぞかし。御祭の日、四月の下の子の日、十一月の下の申の日とを定めて、我が御族にみかど、后の宮たち給ふものならば、おほやけ祭になさむと誓ひ奉り給へれば、一條院の御時より、おほやけまつりにはなりたるなり。又鎌足のおとどの御氏寺、大和の國多武峯につくらしめ給ひて、そこに御骨を納め給ひて、今に三昧行ひ奉り給ふ。不比等のおとどは、山階寺を建立せしめ給へり。それにより、かの寺に藤氏を祈り申すに、此の御寺並に多武峯、春日、大原野、吉田に、例にたがひあやしき事いできぬれば、御寺の住僧、禰宜など、おほやけに奏し申して、其の時に藤氏の長者殿うらなはしめ給ふに、御慎あるべきは、年のあたり給ふ殿ばらたちの御もとに、御物忌を書きて、一の所よりくばらしめ給ふ。凡そ彼の寺よりはじまりて、年に二三度會を行はる。正月八日より十四日まで八省にて、奈良がたの僧を講師として、御齋會おこなはしむ。おほやけよりはじめ、藤氏の殿ばち、皆加供し給ふ。また三月七日よりはじめて、十三日まで、藥師寺にて最勝會七日、また山階寺にて、十月十日より維摩會七日、みなこれらの度に、勅使下向してふすまつかはす。藤氏の殿ばらより五位まで奉り給ふ。南京の法師は、三會の講師しつれば、已講と名づけて、其の次第をつくりて、律師僧綱になる。かゝれば彼の御寺いかめしうやむごとなき所なり。いみじき非道の事も、山階寺にかゝりぬれば、又ともかくも人をものいはず。山階道理とつけておきつ。かゝれば、藤氏の御ありさま、たぐひなくめでたし。

語釋　○御幣の使　奉幣使　○ふり奉りて　神璽を移し奉るをいふ。○此の京　京都　○大原野　山城國乙訓郡大原野の大原野神社にて官幣中社なり。祭神は天兒屋根命なり　○ささらぎ　二月　○御幣十列　御幣と十列の馬である　○吉田　京都市上京區吉田町にあり、官幣中社吉田神社なり。天兒屋根命を祭る　○山蔭の中納言　越前守藤原高房の二男　○おほやけ祭　官祭　○三昧　念佛三昧の法を行ふ。三昧は心を專らにして　其の法を修すること　○山階寺　山城國宇治郡にあり　○年のあたり給ふ　慎しまざるべ

からざる年齢の殿原　○物忌　木にてつくれる札に物忌と書きたり。愼の人は殿舍の簾にかけ、又外出の時は冠につける　○一の所氏の長者　○會　齋會　○八省　八省院の中央なる大極殿をいふ　○奈良がたの僧　興福寺の僧　○御齋會　毎年正月八日より七日間、大極殿にて金光明最勝王經を講說して國家の安泰を祈らるゝ儀式　○加供（かぐ）し給ふ　布施を出す　○最勝會　金光明最勝王經を講說する法會○ふすま　衾なり。僧に贈はるもの　○五位まで奉り給ふ　五位の人まで僧に布施すること　○南京の法師　奈良興福寺の僧　○三會御齋會、維摩會、最勝會　○已講（いかう）　僧の職名、論議即ち經文の要義を論義する時に出題のことを司る　○律師僧綱　僧綱はすべての僧尼を統括し法勝を司るもの、僧正、僧都、律師の三段あり、即ち三會の講師をつとめ終れば僧綱になるなり　○彼の御寺　山階寺　○かゝりぬれば　關係すれば

通釋　その鎌足の大臣生れ給ひしは、常陸の國であるから、かしこの鹿島といふところに、氏の神なる天兒屋根命を祭りまして、その御時より今に至るまで、新しき御門や、皇后や、大臣の立ち給ふ折りは、奉幣使をつかはされて、祭祀をさせました。御門奈良におはしゝ時に、鹿島は遠いとて、大和國三笠山に遷し奉りて、春日明神と名づけまして、今も藤氏の氏神で、朝廷にては男女使に立てさせ給うて、后の宮、氏の大臣、公卿、皆この明神に奉仕されます。」二月十一日上（かみ）の申の日御祭にて、さま〴〵の使は立ちさわぎます。御門が平安京に遷らしめ給うては、又近く遷しまして大原野と申します。二月の初卯の日十一月の初子の日と定めて、年に二度の御祭りあり、又同じく朝廷よりの使が立ちます。藤原の殿原は皆この神に御幣として走馬十疋を奉ります。なほも近くしようとて、又遷しまして、吉田神社と申してあるやうです。この吉田の明神は山蔭の中納言の遷したものであります。御祭の日四月下の子の日と、十一月下の申の日とを定めて、我が一族に御門、后の宮立ち給ふものならば、官祭となさんと誓ひましたから、一條院の御時より官祭となりました。又鎌足大臣の氏寺を大和の國多武峰に造りまして、そこに御骨を納めまして、今に一心不亂に念佛勤行いたします。不比等の大臣は、山階寺を建立しました。それによりかの寺に藤氏を祈り申すに、此の御寺、並に多武峰、春日、大原野、吉田に怪異の事が出で來ますと、御寺の住僧、禰宜など朝廷に奏して、其の時に藤原氏の長者殿は陰陽師に命じて占はしめ給ふに、御愼あるべき年に當りたる殿ばらの御もとに、御物忌と書いた札を一の人より配らせます。凡そ彼の寺より始まつて、年に二三度法會を行はれます。正月八日より十四日までは八省院の太極殿で、奈良の興福寺の僧を講師として、御佛會を行はせます。朝廷より始め藤氏の殿原みな供養に加はります。また三月七日より始めて、十三日まで藥師寺にて勝會七日、また山階寺にて十月十日より維摩會七日、みなこれらの度に勅使下向して、僧どもに賜はる衾をつかはします。藤氏の殿原より五位の人まで供養に加はります。南京（奈良）の法師は三會の講師しますと已講と名づけて、其の次第をつくつて、律師や僧綱になります。かゝる次第なれば彼の山階寺はまことにいかめしく尊い寺であります。甚しく道理に戻れることも山階寺に關したことなれば、又ともかくも人は物を言はず、山階道理と名づけてすててておきました。藤氏の御ありさま比類なく結講であります。

□

同じ事のやうなれど、又つゞきを申すべきなり。后の宮の御父、みかどのおほぢとなり給へるたぐひをこそはあかし申さめとて、

内大臣鎌足のおとどの御女二所、やがて皆天武天皇に奉り給へりけり。男女親（みと）王たちおはしましけれど、みかど東宮立たせ給はざめり。

贈太政大臣不比等のおとどの御娘二所、ひとりの御娘は、天武天皇の御時の女御、みこ生れたまへり。それを聖武天皇と申す。御母をば光明皇后と申しき。今ひとりの御娘はやがて御をひの聖武天皇に奉り

て、女みこ生み奉り給へるを、女帝に立て奉り給へるなり。高野の女帝と申す、これなり。四十六代にあたり給ふ。それおり給へるに、又みかどひとりを隔て奉りて　又四十八代にかへりゐ給へるなり。御母后を贈皇后と申す。しかれば、不比等のおとどの御娘二人ながら、后におはしますめれど、高野の女帝の御母后は、贈后と申したるにておはしまさぬ世に后の宮にゐたまへると見えたり。かるが故に、不比等のおとどは、光明皇后、又贈后の御父、聖武天皇ならびに高野の女帝の御おほぢ。

一、贈太政大臣冬嗣のおとどは、太皇太后順子の御父、文德天皇の御おほぢ。

一、太政大臣良房のおとどは、皇太后明子の御子、清和天皇の御おほぢ。

一、贈太政大臣長良のおとどは、皇太后高子の御父、陽成天皇の御おほぢ。

一、贈太政大臣總繼のおとどは、贈皇太后澤子の御父、光孝天皇の御おほぢ。

一、內大臣高藤のおとどは、皇太后宮胤子の御父、醍醐天皇の御おほぢ。

一、太政大臣基經のおとどは、皇后宮穩子の御父、朱雀天皇、並に村上帝二代の御おほぢ。

一、右大臣師輔のおとどは、皇后宮安子の御父、冷泉院、並に圓融院の御おほぢ。

一、太政大臣伊尹のおとどは、贈皇后宮懷子の御父、花山院の御おほぢ。

一、太政大臣兼家のおとどは、皇太后詮子並に贈后超子の御父、一條院、三條院の御おほぢ。

一、太政大臣道長のおとどは、太皇太后宮彰子、皇太后宮妍子、中宮威子、東宮の御息所の御父、當代ならびに東宮の御おほぢにおはします。こゝらの御中に后三人ならべすゑて見奉らせ給ふ事は、入道殿下より外に聞えさせ給はざめり。關白左大臣、內大臣、大納言二人、中納言の御親にておはします。さりや。きこしめしあつめよ。日本國には唯一無二におはします。

語釋　○御母をば光明皇后云々　聖武天皇の御母は光明皇后とするは誤なり。御母にあらずして皇后なり　○御をひ　聖武天皇は光明皇后の御甥なり　○それおり給へるに　孝謙天皇の御退位なり　○又みかどひとりを隔て　淳仁天皇なり　○かへりゐ給へるなり　再び御位に復らせ給へるなり　○贈后　光明子は御在世中に皇后なり、贈后とするは誤なり　○さりや　然かあることよ　○きこしめしあつめよ　道長のすぐれたる所を聞き集めよとのこと

通釋　同じことのやうなれどつゞきを申しませう。后の宮の御父、又天皇の御祖父となりました人々を明にしようとて語り始めました。

一、內大臣鎌足の大臣の御女二人とも、やがて皆天武天皇に奉りました。其の腹の男女御子たち居りましたが、皇位又は東宮に立たせ給ふ人はありませんでした。

一、贈太政大臣不比等の大臣の御女は二人あります。一人の御女宮子姫は、文武天皇の時の女御で、御子生れました。それを聖武天皇と申す。御母をば宮子の娘と申した。今ひとりの御女安宿姫は、やがて御姪の聖武天皇に奉つて、后に立ちました。これを光明皇后と申しました。この御腹に女皇子を生みました。即ち女帝に立て奉りました。四十六代に當ります。位を退かれ、又淳仁天皇をへだて、又四十八代に歸りました稱德天皇と申します。御母后を贈皇后と申します。しかれば、不比等の大臣の御女二人ながら后おはすやうですが、高野の女帝の御母后は贈皇后と申したので、失せ給うた後に后位に居給へると見えます。故に不比等大臣は光明皇后(安宿姫)又贈皇后(宮子姫)の御父、聖武天皇ならびに高野の女帝の御祖父であります。

一、贈太政大臣冬嗣の大臣は、太皇太后順子の御父、文德天皇の御祖父であります。
一、太政大臣良房の大臣は皇太后明子の御父で清和天皇の御祖父であります。
一、贈太政大臣長良の大臣は、皇太后高子の御父、陽成天皇の御祖父であります。
一、贈太政大臣總繼の大臣は、贈皇太后澤子の御父で、光孝天皇の御祖父であります。
一、內大臣高藤の大臣は、皇太后宮胤子の御父で、醍醐天皇の御祖父であります。
一、太政大臣基經の大臣は皇后宮妍子の御父で、朱雀、村上二代の御祖父であります。
一、右　臣師輔の大臣は皇后宮安子の御父で、冷泉院ならびに圓融院の御祖父であります。
一、太政大臣伊尹の大臣は、贈皇后宮懷子の御父で、花山院の御祖父であります。
一、太政大臣兼家の大臣は、皇太后宮詮子並に贈后超子の御父で、一條院ならびに三條院の御祖父であります。
一、太政大臣道長の大臣は、太皇太后宮彰子、皇太后宮妍子、中宮威子、東宮の御息所嬉子の御父で、後一條院ならびに後朱雀院の御祖父であります。數多關白の多い中に、后三人ならべすゑて見ます事は道長より外に聞えぬやうであります。關白左大臣頼通、內大臣教通、大納言二人頼宗、能信、中納言長家の御親であります。然り他の攝關大臣の例を聞き集めて見給へよ、かゝる道長の如きは、この日本國に他に二人となく唯一人であります。

□

まづ造らしめたまへる御堂などの有樣、鎌足のおとどの多武峰、不比等のおとどの山階寺、基經のおとどの極樂寺、忠平のおとどの法性寺、九條殿の楞嚴院、あめのみかどの造り給へる東大寺も、佛ばかりこそは大きにおはしますめれど、猶此の無量壽院にはならび給はず。まして、こと御寺々はいふべきならず。大安寺は兜卒天の一院を、天竺の祇園精舍にうつしつくり、天竺の祇園精舍を、唐土の西明寺にうつしつくり、唐土の西明寺の一院を、此の國のみかどは、大安寺にうつさしめ給へるなり。しかあれども、只今はなほ、此無量壽院まさり給へり。南京のそこばくの多かる寺ども、猶あたり給ふなし。恒德公の法住寺いと猛なれど、猶この無量壽院すぐれ給へり。難波の天王寺など、聖德太子の御心に入れ造り給へれど、猶この無量壽院まされり。奈良は七大寺十五大寺々など見くらぶるに、猶この無量壽院いとめでたく、極樂淨土の、此の世にあらはれけるよと見えたり。かるが故に、此の無量壽院も、思ふに、思召し願ずる事侍りけむ。淨妙寺は、東三條殿大臣になり給ひて、御よろこびに、木幡に參らせ給へりしに、御供に入道殿具し奉らせ給ひて、御覽ずるに、多くの先祖の御骨おはするに、鐘の聲きゝ給はぬ、いとうき事なり。我が身思ふさまになりたらば、三昧堂たてむと、御心のうちにおぼし企てたりけるとこそは承れ。

語釋　○多武峯　謙足の建立にあらず　○極樂寺　山城國紀伊郡深草にありたりといふ　○法性寺　鴨川の東、九条の南にあつた　○楞嚴院　叡山横川の一院なり　○あめのみかど　聖武天皇　○東大寺　奈良市に現にあり　○無量壽院　法成寺のことにいへり。近衞北、京極東にあつた　○大安寺　大和添上郡、大安寺村にあり　○兜卒天　須彌山の頂上にあり、彌勒菩薩の住む處といふ　○南京　奈良　○猛なれど　盛大なれど　○七大寺　東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、○十五大寺　以上の七大寺に新藥師寺、大后寺、不退寺、京法花寺、超證寺、招提寺、宗鏡寺、弘福寺を加ふ　○淨妙寺　山城宇治木幡に在り　○東三條殿　兼家　○我が身思ふさま云々　道長の心の內なり　○三昧堂　法華三昧堂なり

通釋　まづは造りたる御堂などの有様は、鎌足大臣の多武峯、不比等大臣の山階寺、基經大臣の極樂寺、忠平大臣の法性寺、九條殿の楞嚴院、聖武天皇の造り給へる東大寺も、佛のみは大きくあるやうであるが、なほこの無量壽院にはならびません。まして他の寺々は言ふまでもありません。大安寺といふは、兜卒天の一院を印度の祇園精舍に移し造り、印度の祇園精舍を唐土の西明寺にうつして造り、唐土の西明寺の一院を、皇極天皇は大安寺に遷さしめ給へるのであります。然れども只今は猶この道長の無量壽院はまさつてゐます。奈良の澤山ある寺ども猶比較するものはありません。恒德公爲光の法住寺は甚だ盛んであるが、なほ此の無量壽院はすぐれてゐます。奈良は七大寺十五大寺など見くらべるに、なほ此の無量壽院は甚だ結構で、極樂淨土がこの世にあらはれたと見えました。故にこの無量壽院を造らるるも思ふに、祈願する事あつたでありませう。淨妙寺は兼家大臣が大臣になりまして、御悅びに木幡に參つたとき、御ともに道長をつれられて御覽ずるに、多くの先祖の御骨があるに、念佛の聲の聞えぬのは、甚だ面白からぬ事である。わが身思ふさまになりたらば、三昧堂建てようと御心の中に思ひ企てたと聞えてをります。

□

昔もかゝること多く侍りけるに、極樂寺、法性寺ぞいみじく侍るや。御年などもおとなびさせ給へるだにも、思召しよるらむ程、なべてならずおぼえ侍るに、いづれの御時とは、たしかにえ聞き侍らず。たゞ深草の御ほどにやなどぞ思ひやられはべる。芹川の行幸せしめ給ひけるに、昭宣公童殿上にて仕うまつらせ給へりけるに、みかど琴をあそばしける。此の琴ひく人は、別の爪を作りて、指にさし入れてぞ彈くことにて侍りし。さて持たせ給ひたりけるを、おとしおはしまして、大事におぼしけれど、又作らせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにてぞおぼしめしよりけむ、おとなしき人々にも仰せられて、をさなくおはします君にも「もとめてまゐれ」と仰せられければ、御馬をうちかへしておはしましけれど、いづこをはかりとも、いかでかは尋ねさせ給はむ、見いでゝまゐらせざらむ事の、いといみじうおぼしめされければ、これもとめいでたらむ所には、一伽藍をたてむと願じおぼして、もとめさせ給ひけるに、いできたる所ぞかし極樂寺は。をさなき御心に、いかでかおぼしめしよらせ給ひけむ。さるべきにて御爪もおち、をさなくおはします人にも仰せられけるにこそは侍りけめ。さて、やむごとなくならせ給ひて、御堂たてさせにおはします御車に、貞信公はいとちひさくて具し奉り給へりけるに、法性寺の前わたり給ふとて、てゝごに「こゝこそよき堂所なめれ、こゝに建てさせ給へかし」と聞えさせ給ひけるに、いかに見て、かくいふやらむとおぼして、さしいでゝ御覽ずれば、誠にいとよく見えければ、をさなき目にいかでかく見つらむ、さるべきにこそあらめと思召して、「げにいとよき所なめり、ましが堂をたてよ、われはしか〳〵の事ありしかば、そこに建てむずるぞ」と申させ給ひける。さて法性寺は建てさせ給ひしなり。

語釋　○いみじく侍るや　有がたく貴くある　○御年なども云々　年齢の相當にとつた人でさへ思ひつくことは出來まいと思ふに年若くして寺の建立を企てたるは殊勝だとのこと　○深草の御ほど　仁明天皇の御時　○芹川　山城國桂川に入る小流　○さるべきにてぞ云々　然るべき因緣ありて思ひつきたるならんとなり　○おとなしき人　大人　○もとめて　探り求める　○いづこをはかりとも　何處をあてとして　○いといみじう　甚だ殘念　○伽藍　梵語にて寺院のこと　○さるべきにて云々　極樂寺建立さるべき運命

にて爪もおち又幼きものに探索を命じたるならんとなり　○やむごとなくならせ給ひて　基經の關白となれること　○さるべきにこそあらめ　佛のみちびきであらう　○まし　いましにて汝のこと

通釋　昔もかやうの事多くあつた中に、極樂寺や法性寺はすぐれてをります。御年なども成人してから、寺の建立を思ひたつさへ、普通でなく思ひますに、何れの御時とはたしかに聞くことは出來ませんが、只仁明帝の御時かと思ひます。芹川に行幸せられた時に基經は童殿上で御供をせられた時、帝は琴を御ひきなされた。この琴ひく人は、別の爪を作つて指にはめて彈くことであります。さて帝は御持ちになつたのを落されまして、大變のことゝ思ひましたが、又作り給ふべきやうもなかつたから、前世の宿緣に由つてであらう、大人の人に仰せられないで、幼き基經に、求めて參れと仰せられました。基經は御馬をうち返して參りましたが、何處をあてと尋ねることは出來ず、見つけて參らぬ事の甚だわるく思ひましたれば、この爪を見つけた處に、一つの寺を建てんと祈願して求めましたに、出でたる處に極樂寺は建てられたのであります。幼き心には思ひつくべきことでないが、さるべき因緣で、御爪も落ち、幼き人にも仰せられたことでありませう。さて基經が貴くなられて御堂建てに參る御車に、忠平は甚だ小さくて御供をしましたに、法性等の前を通り給ふとて、父の基經に向ひこゝは堂を建てるによき處である、こゝに建て給へと申しました。如何に見てかやうに言ふのだらうと思うて、さし出でゝ御覽ずればまことによく見えましたから、幼き目にどうしてかやうに見つけたらう、然るべき因緣があらうと思つて、まことに好き處であるやうだ、御身は堂を建てよ、吾れはかやう〳〵の事があつたから、そこに建てようとすると申されました。さてかやうの理由で法性寺は建てられました。

□

又九條殿の飯室の事などはいかにぞ。横川の大僧正の御坊にのぼらせ給ひし御供には、繁樹もまゐりて侍りき。かうやうの事ども聞き見給ふれど、なほ此の入道殿世にすぐれぬけいでさせ給へり。天地にうけられさせ給へるは、此の殿こそおはしませ。何事もおこなはせ給ふをりに、いみじき大風吹き長雨ふれどもまづ二三月かねて、空晴れ土乾くめり。かゝれば、或は聖德太子の生れ給へると申し、或は弘法大師の佛法興隆のために生れ給ふとも申すめり。げにそれは翁らがさがなめにも、たゞ人とは見えさせ給はざめり。猶權者にこそおはしますべかめれとなむ仰ぎ見奉る。かゝれば、此の御世のたのしきことは限りなし。其の故は、昔は殿ばら宮ばらの馬飼牛飼、何の御靈會祭の料として、錢、紙、米など乞ひのの しりて、野山の草をだにやはからせし。仕丁のおもの持ち出で來て、人の物とり奪ふ事のたえにけり。また里の刀禰、村の行事いできて、火祭りや何やと、煩しくせし事、今は聞えず。かばかり安穩泰平なる時にはあひなむやと思ふは。翁らがいやしき宿りも帶紐をとき、門をだにさゝで安らかにのびふしたれば、年もわかえ、命ものびたるぞかし。まづは北野、加茂原に作りたる豆さゝげ、瓜なすびといふもの、此の中頃は、更にすべなかりし物をや。此の年頃は、いとこそ樂しけれ。人のとらぬをばさる物にて、馬牛だにぞはまぬ。されば、たゞまかせすてつゝおきたるぞかし。かくたのしき禰勒の世にこそあひて侍れや」といふめれば、いまひとりの翁、「たゞ今は、この御堂の夫をしきりにめす事こそは、人は堪へがたげに申すめれ。それはさは聞き給はぬか」といふめれば「世繼しかしか、そのことぞある。二三日まぜにめすぞかし。されど、れてたてまつるにあしからず。故は極樂淨土のあらたにあらはれいで

給ふべき爲にめすなりと思ひ侍れば、いかで力堪へばまゐりてつかうまつらむ。行末に、この御堂の草木となりてしがなとこそ思ひ侍れ。されば、物の心しりたらむ人は、望みても參るべきなり。されば翁ら未だ有らじ、一度かゝずたてまつり侍るなり。さてまゐりたれば、あしきことやはある。飯、酒しげくたび、もてまゐる果物をさへめぐみたび、常に仕うまつるものは、衣裳をさへこそはあて行はしめ給へ。されば參る下人も、いみじう、いそがしがりてぞ進みつどふめる」といへば、「しか、それさる事に侍り、但し翁らが思ひえて侍るやうは、いとたのもしきなり。翁いまだ世に侍るに、衣裳やれ、むづかしきめ見侍らず。また飯、酒乏しきめ見侍らず。若し此の事どものすぢなからむ時は、紙三枚をぞもとむべき。故は、入道殿下の御前に申文を奉るべきなり。その文につくるべきやうは、翁、故大政太臣貞信公殿下の御時の小舍人童なり。それ多くの年積りて、すぢなくなりにて侍り。閣下の君の、末の家の子におはしませば、同じき君と賴み仰ぎ奉る。物少しめぐみ給はらむと申さむには、少々の物はたばじやはと思へば、それは案の物にて、倉におきたるが如くになむ思ひ侍る」といへば、世繼「それはげにさる事なり。家貧しくならむをりは、御寺に申文奉らしめむとなむ、いやしきわらはべと、うちかたらひ侍る」と、同じ心に言ひかはす。

語釋　○飯室　叡山横川の一院にて寶滿寺といふ　○大僧正　慈惠大僧正なり　○かうやうの事ども云々　繁樹は飯室の事を問きたるに世繼は其れに頓着なく話しつゞけたるにて、かうやうの事は云々は世繼の言葉のつゞきなり　○天地にうけられさせ給へるは天地より同情を得てゐるのは　○二三日かねて　二三日前になれば　○さがなめにも　わるい目にも　○權者　佛の化身　○馬飼牛飼　牛馬を養ひ又は使ふもの　○御靈會　怨を含める人の靈をなぐさめる爲の法會　○野山の草をだにやはからせし　野山の草も刈らせなかつた　○仕丁　いやしき召使　○おもの　供御にあらず、食物の意、即ち辨當を持つてくること　○里の刀禰　里長　○村の行事　一村の事を扱ふ役人　○のびふし　足を伸してねる　○わかえ　若くなり　○更にすべなかりし物をや　盗まれてしやうがなかつたものを　○はまぬ　食はぬ　○彌勒の世　彌勒菩薩の出世に等しき世　○今ひとりの翁　繁樹　○御堂の夫　法成寺建立についての人夫　○しかしか　然り然り　○二三日まぜ　二三日おきに　○物の心しりたらむ人　物の道理のわかる人　○翁らまたあらじ、一度かゝず云々　翁らは再び此のやうな事にあふことは出來まいから、一度もかゝさずつとめてゐる　○常に仕うまつるものは常にたえずはたらいてゐるもの　○いそがしがりてぞ進みつどふめる　急いで進み行きて集りつとめる　○しか、それはさる事に侍り　繁樹の詞なり　○思ひえて　思ひついたことは　○世に侍るに　世を渡るに　○やれ　破れ　○むつかしきめ　むさくるしきめ　○若し此の事どものすぢなからむ時は紙三枚をぞもとむべき　もし衣食に困つて仕樣のない時は紙三枚をめぐんで下さいと世繼に言うた　○故は　紙をもらふわけは　○申文　願書　○すぢなくなりにて侍り　生活もできなくなつた　○閣下の君の末の家の子におはしませば　閣下(道長)は貞信公の御子孫であるから　○たばじやは　下さらないことはない　○案の物にて云々　机の上にのせてあるものと同じく又倉に入れてあると同じだと安心してゐる　○いやしきわらはべと　世繼は自分の妻をいふ

通釋　世繼言ふ、又九條殿の飯室の事などはどうであつたらう。繁樹がいふ、横川の大僧正の御席に、九條殿の上り給ひし御供には、私も參りました。世繼いふ、かゝる先祖の上り代々の造寺の因緣などのこと多くあれど、なほ今の道長公は世にすぐれ秀でゝをります。天地の神明に承引されてゐるのは、この道長であります。何事も行ふ時に、前より甚しき大風吹き、ながら雨降つて居つても、二三日前より空はれ土乾くやうです。されば或は聖德太子の生れ給へると申し、或は弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給ふとも申すやうです。まことにそれは私らがあしき目にも常人とは見えませんです。なほ佛の假に此の世に姿を顯したものと見えます。されば此の世の樂しきことは限り

ありません。そのわけは昔は殿ばらや、宮ばらの馬飼牛飼などが、何の御靈會とか、祭の料とかにて、錢、紙、米など良民に請ひ求めて、良民には野山の草木すら刈らせずに、自分たちで刈り取りました。然るに道長の時になつては、卑しき仕丁なども、食物など持ち來りて、人の食物を奪ふことは絶えました。又里の里長村長や、一村の事を取りあつかふ人が出て來て、火祭や何やとうるさく金錢を責め取りしことは、今は聞えません。これほど安穩泰平なる時には逢はれまいと思ひます。翁らが賤しき宿も、帶紐解いて、門をとざさずに、安らかにのび〳〵と臥しましたから、年も若くなり命も延びます。まづは北野、加茂河原に作つた豆さゝげ、瓜、なすびといふ物、この中頃は人に取られていたし方なかつた物を、この年頃甚だ樂しいことです。人の取らぬは勿論で、馬牛までも食むことはありません。されば只自然にまかせて捨てゝ置きました。かく樂しい彌勒の世にあひましたと言ふやうです。今一人の翁繁樹いふ、只今はこの御堂を造る人夫をしきりに召すので人は堪へがたげに申すやうです。それはさやに聞きませんかと言ふらしい。世繼いふ、さやう〳〵その事である。二三日おきに召します。されど人夫を召し出すことは惡くはない。其の故は極樂淨土の新に現はれ出づべき爲に召すのであると思ひますから、力堪へるならば、參つて仕へ奉ります。行末にはこの御堂の草木となりたいものだと思ひます。されば物のわけを知りたる人は、希望しても參るべきであります。さて翁らはまたと極樂淨土の出現にはあはれますまい。故に一度もかかさず參ります。また參りますとわろいことはない。飯酒たび〳〵賜はり、もてまゐる菓物を惠み與へ、常に仕はれてゐるものには、衣裳をさへ賜はります。されば參る下人も、甚だいそがしがつて集るやうですといへば、繁樹いふ、さやう、その通りであります。但し私の思ひついたことは、甚だ賴もしいことです。私は今迄世に生きて居りますに、衣裳破れ、凍えるやうなめにあひません。また飯、酒も不足ではありません。併し此の後に衣服破れ食物不足な目にあはば、紙三枚を求むべきです。其の故は入道殿下の前に申文を奉りませう。その文に作り書くべきやうは、「翁は故太政大臣貞信公の御時の小舍人童である。それが多くの年積つて、生活する方法がなくなりました。閤下の君の末の家來でありますから、閤下を同じ君と賴み仰ぎます。物を少し惠んで下さい」と申したならば、少しの物は下さらぬ事はないと思ふと、それは宛も机の上に置いたり、倉にたくはへて置いたりするやうに思ひますといへば、世繼いふ、それは實に其の通りである、家貧しくなつた時は、この法成寺に申文を奉つて歎願せんと、拙者も常々妻と相談してゐますと、繁樹と同じ心に語りあひました。

□

「さても〳〵うれしく對面したるかな。年頃の袋の口あけ、綻びをたち侍りぬること、さても、こののゝしる無量壽院には、いくたびまゐりをがみ奉り給ひつ」といへば、「おのれは大御堂の供養の年の會の日は、人いみじうはらふべかなりと聞きしかば、試樂といふこと、三日かねてせしめ給ひしになむ參りて侍りし」といへば、世繼、おのれは度々まゐり侍りぬ。供養の日のありさまのめでたきは更にもあらずや。又の日、けふは御佛など近くて拜みたてまつらむ、ものども取り置かれぬさきにと思ひて、參りて侍りしに、宮たちの諸堂拜み奉らせ給ひし、見申し侍りしこそ、かゝる事にあはむとて、今まで生きたるなりけりと覺え侍りしか。

語釋　○年頃の袋の口あけ綻をたち、侍りぬること　年來しめくゝりたる袋の口を開け、縫ひふさぎたる袋の綻をたち切りて其の中の物を取り出した如く、思うてゐたことを話したはうれしとなり　○のゝしる　人のさわぐ　○おのれは　繁樹は世繼に答へたるなり　○大御堂　法成寺　○會の日　法會の日で治安二年七月十四日なり　○はらふべかなり　人は多く出るから混雜を防がん爲に人を拂ひ立退かしむること　○試樂　舞樂儀式等の豫習をなすを試樂といふ　○三日かねて　三日かけて　○あらずや　やは感歎詞

○又の日　翌日　○ものども取り置かれぬさきに　佛前の飾物供物などを取つて他に置かぬ中に　○宮たち　太皇太后其他の后宮

通釋　世繼いふ、さても〳〵うれしく對面したるよ。年頃の袋の口あけ、綻をたちきつて中の物を皆取り出した如く心の中は清くなつた。さて此の世の人のさわぐ無量壽院には、幾度參つて拜しましたかといへば、繁樹いふ、私は大御堂供養の年の會の日は、人の立ちこめるを拂ひ退くると聞きましたから、試樂といふこと、三日かけてせられたとき參りましたといへば、世繼いふ、私はたびたび參りました。供養の日の有樣の立派なことは言ふまでもない。其のあくる日、今日は御佛などを近き處から拜みませう、佛具供物などの飾られたるまゝで取りかたずけられぬうちにと思うて、參りましたに、諸の后たちの諸堂を拜み給ふのを見ましたので、このやうな事にあはうとて今まで生きて居たのだと思ひました。

□

物おぼえてのち、さる事をこそまだ見侍らね。御てぐるまに四所奉りしぞかし。口に大宮、皇太后、御袖ばかりをいさゝかさしいでさせ給ひて侍りしに、枇杷殿の宮の御ぐしの、土にいと長くひかれさせ給ひて、出でさせ給へりしは、いとめづらかなりしことかな。しりの方には、中宮、かんの殿奉りて、たゞ御身ばかり御車におはしますやうにて、御衣ども皆がらいでて、それも土までこそ引かれ侍りしか。一品宮も中に奉りたりけるにや、御衣どもは何がしのぬしの持ちたうびて、御車のしりにぞ候はれし。ひとへの御衣ばかりを奉りておはしましけるなめり。御車は、まうち君たちひかれて、しりには關白殿をはじめ奉り、殿ばら、さらぬ上達部、殿上人、御直衣にて歩みつゞかせ給へりし。いであないみじや。中宮權太夫殿のみぞ堅固の御物忌にて參らせ給はざりし。さていみじく口惜しがらせ給ひける。中宮の御裝束は、權太夫殿せさせ給へりし。いと清らにてこそ見え侍りしか。「供養の日啓すべき事ありておはします所にまゐりて、五所ゐならばせ給へりしを見奉りしかば、中宮の御ぞの優に見えしは我がしたればにや」とこそ、大夫殿仰せられけれ。かく口ばかりさかしだち侍れど、下蔦のつたなき事は、いづれの御ぞも程へぬれば、色どものつぶとわすれ侍りにけるよ。ことにめでたくせさせ給へりければにや、下は紅薄物の御單重にや。御うはぎよくも覺え候はず。萩の織物の三重がさねの御唐衣に、秋の野を縫物にし、繪にもかゝれたるにやとぞ、目もおどろきて見給へし。こと宮々のも、殿ばらの調じて奉らせ給へりけるとぞ、人申しゝ。大宮は二重織物おり重ねられて侍りし。皇太后は、そうじて唐裝束、かんの殿のは、殿よりこそはせさせ給へりしか。こと御方々のも繪かきなどせられたりと聞かせ給ひて、俄かに箔おしなどせられたりければ、入道殿御覽じて、よき呪師の裝束かなとて笑ひ申させ給ひけり。

語釋　○四所　太皇太后宮彰子、皇太后宮妍子、中宮威子、東宮女御嬉子　○奉りし　乘つた　○口　車の前方　○大宮　彰子　○枇杷殿の宮　妍子　○出でさせ給へりし　御堂さして參り給へるをいふ　○かんの殿　嬉子　○一品宮　禎子内親王　○御ぞどもは何がしのぬしの持ちたうびて　御衣は某殿が持つて　御車のあとに附いてゐられた　○まうち君たちひかれて　御車は殿上人が引いて　○いであないみじや　實に立派である　○中宮權大夫殿　藤原能信　○堅固の御物忌　重い物忌　○供養の日　十四日　○啓すべきこと　能信は中宮に申上ぐべきこと　○優　立派　○口ばかりかしこだち　世繼は自分を口のみかしこさうにしやべるとのこと　○下蔦のつたなきことは　下賤のものゝかなしさは　○つぶと　すつかり　○ことにめでたく云々　中宮の服裝をいふ　○紅薄物の

御單重　紅の羅の單重　○うはぎ　重袿の上に着する袿なり　○萩の織物　經は青く緯は蘇芳の織物なり。一説に萩の模様をおり出せるものをいふと　○三重がさね　地文ある綾の上に色の異れる絲を以て二種の別文を織り重ねたもの　○唐衣　表着の上に着す　○殿ばら　兄弟　○唐裝束　唐土の織物にてつくれる衣裳　○殿　道長　○箔おし　金銀の箔をおしつけて模様をおく　○呪師　大法會の時に呪願を讀誦する僧、其の僧の裝束に似たゆゑに笑ひたるなり

通釋　物覺えて後、かやうの事をまだ見ません。御輦車に四所乘られてゐました。車の前正面に向ひたる方には、大宮彰子、皇太后宮妍子は御乘りになつて、御袖のみを少しさし出してをられましたに、枇杷殿宮妍子の御髪が、土に甚だ長く引いて出てをりましたことは、甚だ珍らしい事であります。後の方には、中宮威子、かんの殿嬉子御乘りになつて、ただ御身ばかり御車に居るやうで、御衣どもは皆出でゝ、それを土まで引いてゐました。一品宮禎子も、中に居られましたらうか、御衣どもは某と申す人が持つて、御車のしりに居りました。單の御衣ばかりをめして居られたのでありませう。御車は四位五位の人たちがひいて、しりには關白頼道を始め、殿原、其のほかの上達部、殿上人は御直衣で歩み續きました。いやもう立派なことよ。中宮權大夫能信のみは、堅く慎みあるべき物忌の爲に參りませんでした。さて甚だ殘念に思はれました。中宮の御裝束は權大夫殿が作つて奉りましたもので、甚だ清らかに見えました。供養の日、能信は中宮に啓すべき事あつて、御出でならるゝ所に參つて、五所とも居並んでをらるゝを見まして、中宮の御衣の優美に見えたのは、私が作つたためであると言れました。かやうに口ばかり賢さうであるが、下萬の拙く愚なることには、五所の御方の何れの御衣も、程へましたので、色合などは、すつかり忘れました。併しながら、中宮のは、殊に結構に作られたればにや、少しは記憶してゐる。下は紅薄物の御單重かと思はれる。御表着はよくも覺えません。萩の紋がらを顯した織物の三重がさねの御唐衣に、秋の野を繡にし、繪にも畫かれたのかと目を驚かして見ました。他の宮たちのものも、殿ばらが調製して奉つたと、人は申しました。大宮は二重織物を着重ねて居りました。皇太后宮はすべて唐裝束で、かんの殿のものは頼通が調製しました。前にした后たちの裝束に繪かきなどしたと聞かれて、頼通はにはかに金銀の箔などつけられましたので、道長は御覽になられて、よき呪師の裝束よと申して笑はれました。

□

殿はまづ御堂々々あけつゝ待ち申させ給ふ。南の大門のほどにて見申すだにゑましくおぼえ侍りしに、御堂の渡殿の物のはざまより一品宮の辨の乳母、今一人はそれも一品宮の大輔の乳母、中將の乳母とかや、三人とぞ承りし。御車より下りさせ給ひて、膝行り續かせ給ひつるを、見奉りたるぞかし。恐ろしさにわなゝかれしかど、今日さばかりのことはありなむやと思ひて、見まゐらするに、などてかはとは申しながら、いづれと聞えさすべくもなく、とりどりにめでたくおはしまさふ。大宮の御髪御衣の裾に餘らせ給へり。中宮は身長に少し餘らせ給へり。皇太后宮は御衣の裾に一尺許りあまらせ給へる御末、扇の樣にぞ。かんの殿、御身長に七八寸あまらせ給へり。御扇少し仰けてさし隱させ給ひける。一品宮は、殿の御前、「何か居させ給ふ。たゝせ給へ」とて長押おりのぼらせ給ふ御手をとらへつゝ、たすけ申させ給ふ。あまりなることは、目もおどろく心地なむし給ひける。あらはならず、ひきふたぎなど繕はせ給ひける程に、御覽じつけられたる物か。あないみじ、宮仕に宿世のつくる日なりけると、生ける心地もせで、三人ながら候ひ給ひける程に、「宮たち見奉りつるか、いかゞおはしましつる。此老い法師の娘たちには、けしうはあらずぞおはしまさふ。なあなづられそよ」と打笑みて仰せられかけて、いたう

も、塞がせ給はでおはしましたりしなん、生き出でたる心地して、うれしなどはいふべきやうもなく、かたみに見れば、顔はそこらけさうじたりつれど、草の葉の色のやうにて、又赤くなりなどさま〳〵に、汗水になりて見かはしたり。「さらぬ人だにあざれたるもののぞきは、いと便なき事にするを、せめてめでたうおぼしめしければ、御悦びにたへで、さばれとおぼしめしつるにこそと思ひなすも、心おごりなんする」とのたまひいまさふじけり。

語釋　○殿　道長　○あけつゝ　戸をあけること　○見申すだにゑましく　見るのでさへうれし　○渡殿（わたどの）　廊下　○はざま　間　○いざりつづかせ給ひつるを　膝行しつゝ續く　○さばかりのことはありなむや　さほどの御とがめもあるまい　○などてかはとは申しながら　何としてあんなに揃うて美しいのだと言ひながら　○いづれと聞えさすべくもなく　何の御方が美しいと取りたてゝ言ふやうもなく　○まさふ　ます　○すこしのけて　少しはなして　○殿の御前　道長　○なにかゐさせ給ふたゝせ給へ　一品宮の途中にて長押を下つたり上つたりしてゐるのを見て、なぜにかゝる所にゐさせ給ふ、早く立たせ給へと道長は一品宮に言ひしなり。○たすけ申させ給ふ　御つれ申した　○あまりなる事　あまり立派なこと　○あらはならず云々　道長に見られまいと乳母等は袖などにて顔をかくしてゐたが遂に見つけられたよ　○あないみじ　あゝ恥し　○宮仕に宿世のつくる日なりけると　奉公につきて前世の果報もつきはてたるつらき日なりけると　○生ける心地もせで云々　三人の乳母は生きた心地もせずにそこにかしこまつた　○宮たち見奉りつるか云々　道長の言なり、宮たちを見たか、如何です、此の老法師の娘としてはわろくもあるまい。侮つて下さるな　○いたうもふたがせ給はで　長き間ゆく手を塞がずして　○生きいでたる心地　乳母たちの心なり　○うれしなどはいふべきやうもなく　あまりのことにうれしなどいふ力もないこと　○かたみに　お互に　○そこらけさうじたりつれど　十分に化粧したけれど　○草の葉の色云々　顔色の青きこと　○見かはしたり　お互に見合つた　○さらぬ人だにあざれたるもののぞきは云々　道長のやうな身分のよい人でなくても婦人の居る所をのぞいて、じやうだんなどを言ふは不都合だといふことは承知してゐる、道長の今の振舞は不都合である、併し娘の宮様たちが立派なるを見ては、たまらぬほどうれしいので、人の笑ふはまゝよ、一つたはむれてやらうと思はれたので、別に好色といふわけでないのだらう、こんな事をわれ〳〵が思ふのは道長をばかにしたやうな心地がすると言つてゐられた

通釋　道長はまづ御堂御堂を開（あ）けて待つて居られました。南大門のあたりで見ますさへ、道長は微笑してゐるやうに思ひましたに、御堂の廊下の間より一品の宮禎子の辨の乳母、今一人は一品の宮の大輔の乳母と、中將の乳母とか三人と聞いてゐます。御車よりおりまして、徐々とつゞきあるかせ給ふを見ました。さて乳母の後に話したことを聞きましたが、乳母のいふ、「恐ろしさにふるひましたが、今日は供養の日であるから、近くに參つても叱られるやうの事はなからう、と思うて見奉るに、何と宮、后とある方のわろきがあるべきやうはないが、何れの御方が美しいと申しあぐることは出來ず。どの方もどの方も、美しくあります。大宮の御髪は御衣のすそにあまつてゐます。中宮の御髪は御身長に少し餘つてゐます。御扇を甚だ近くさしかくして居られます。皇太后宮の御髪は御衣の裾に一尺ほど餘つてゐます。御髪の末は特にふさやかにて扇のやうに廣がつてゐます。かんの殿の御髪は御身長に七八寸餘つてゐます。皇太后は御扇を少し仰向ざまに持つて御顔をさしかくしてゐられます。一品の宮は幼くありますから、何か見とれなどしてゐ給ふを、道長はさし出でゝ、なぜにかゝる所にをられます。立つて歩ませ給へとて、長押を降り昇るときは、その御手を執り、助けながら歩ませ奉ります。かやうに后たちの御有樣を見ますことは、あまりに恐れ多くも、めでたくも、目をおどろかし眩しき心ちしました。かくて三人の乳母たちは、明かに顔を見られまいと物をおほひて引きふさぎなど、取つくろうて居りました時に、意外にも道長公に見つけられました。あゝ悲しや、かゝる物を伺ふさまを見つけられて、甚だ恥かしい。宮仕に過去の因緣の絶えて、暇を賜はるべき日であると生きた心地もなく、三人ながら案じてゐました時に、道長公のいふ、宮たちを見ましたか、いかがでありますか、この老法師の女たちとしてはわろくはないと思ひませう、侮りかろしめ給ふなと、笑うて仰せられて、殊更にいたく后達を見奉らぬやうに塞ぎませんで、深く咎めもせず、ゆきすぎられたので、生きかへつた心地し

て、うれしさ言ひやうなく、互に見れば顏は一體に化粧してゐましたが、道長公に見つけられた恐しさに、草の葉のやうに靑くなり、又赤くなり、汗水を流してゐました。宮仕人ならぬ物のわきまへなき下人などでも、すきまを見、物のぞきなどするは、不都合なならひであるのに、乳母ともある女房の惡戲を、道長公の見ましたけれど、今日の供養のめでたき悅に堪へないで、咎め給はざりしならんと、身勝手の推量をするも、何となく我ながら心驕りする」と乳母は言うてゐました。

□

かやうの事どもを見給ふるまゝに、いとしも此の世の榮花御さかえのみおぼえて染着の心のいとどますます〳〵に起りつゝ道心つくべくも侍らぬに河內國そこ〳〵に住む某のひじりは、いほりより出づることもせられねど、後世のせめを思へばとて、のぼりまゐられたりけるに、關白殿まゐらせ給ひて、雜人どもを拂ひのゝしるに、これこそは一の人におはしますめれと見奉るに、入道殿の御前にゐさせたまへば、なほまさらせ給ふなりけりと見奉るほどに、また行幸なりて、亂聲し、待ちうけ奉らせ給ふさま、御輿の入らせ給ふほどなど、見奉りつる殿たちのかしこまり申させ給へば、なほ國王こそ日本一の事なりけれと思ふに、おりおはしまして阿彌陀堂の中尊の御前についゐさせ給ひて、拜み申させ給ひしに、なほ〳〵佛こそ上なくはおはしましけれと、此の會の庭にはかしこう結緣し申して、道心なむいとど熟し侍りぬるとこそ申され侍りしか。かたはらにゐられたりしなりや、まこに忘れ侍りにけり。

語釋　○此の世の榮花御さかえのみおぼえて　道長の榮花を極めてゐられる此の世のことのみ思はれる　○染着　心が外物にしみついて離れざるをいふ。これは世繼の心をいふ　○道心　佛道修業の心　○そこ〳〵に　某處に　○後世のせめを思へばとて　後生がおそろしいとて　○のぼりまゐられ　上京され　○拂ひのゝしる　人を追ひ拂ふとてさわぐ　○一の人　攝政關白　○なほまさらせ給ふなり　道長は攝政關白よりまさるとなり　○行幸なりて　後一條天皇の御到着なり　○亂聲　笛と大鼓と鉦鼓とにて奏する一種の音樂　○中尊　阿彌陀如來　○ついゐさせ　手をつきて坐し給ふ　○會の庭　法會の式場　○かしこう結緣申して　勿體なくも佛に因緣を結びて　○かたはらにゐられたりしなりや　此の河內の上人は式場近くにゐて見たのかよぐおぼえてゐる　○まことに忘れ侍りにけり　世繼自身は本當に忘れてしまつた

通釋　かやうのめでたい事どもを見ますまゝに、一段この浮世の榮華のさかえのみ目にとまつて、執着心が一層ますす〳〵起つて、佛道修業の心がつきさうでもないに、河內國何とかいふ所に住む僧は、庵より出ることもしないが、後世の呵責を思へばとて、此の法會に上り參りましたに、關白賴通殿の參りまして、見物の雜人どもを追ひ拂ひさわぎました。これこそ關白であらうと見ますに、關白は道長公の御前に居りますと、猶入道殿はまさつて立派でありました。又行幸なりて亂聲して待ちうけ奉り給ふさま、又御こしの入り給ふ時などは、見てゐらるゝ殿だちが畏りますので、なほ國王こそ日本第一の事であると思ひました。なほ御門はおりおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前に跪き給うて拜みましから、なほ〳〵佛は上なく尊くおはしました。この供養の法會の場所にはかしこく佛と緣を結んで、佛道を欣求する心は甚だ熟しましたと申されました。此の聖はこの日の儀式を側近く居つて見聞されたのであります。まことに私(世繼)は忘れました。

□

世の中の人の申すやう、大宮の入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女院となむ申すべきに、此の御寺に戒壇たてられて、御受戒あるべきなれば、世の中の尼ども、參りて受くべきなりと

て、悦びをこそなすなれ。此の世繼が嫗なども、かゝることを傳へきゝて申すやう、「おのれも、そのをりにだに、白髪のすそそぎてむとなむ。何か制する」と語らひ侍れば、「何せむにか制せむ。但しさらむ後には、わかゝらむめのわらはべ求めて、えさすばかりぞ」といひ侍れば、「我が姪なる女ひとりあり。それを今よりいひかたらむ。いとさし離れたらむもなさけなき事もぞある」と申せば、「それあるまじき事なり。近くも遠くも、身のためにおろかならむ人を、今更によすべきかは」となむ語らひ侍る。やうやう衣袈裟などの設けに、よさきぬ一二匹もとめまうけ侍るなどいひて、さすがにいかにぞや、ものあはれげなるけしきのいでくるは、女どもにそむかれむ事の心細きにやとぞ見え侍りし。

語釋　○大宮　皇大后宮彰子　○此の御寺　法成寺　○嫗　妻をいふ　○白髪のすそそぎてむ　尼になること　○何か制する　止め給ふまじの意　○語ひ侍れば　世繼の妻は世繼に語つたから　○何せむにか制せむ云々　何しに止めようぞ但し其の時には若き女一人世話せよ　○我が姪なる女ひとりあり云々　世繼の妻が世繼に語れるなり、我が姪が一人あり、それを今より話して見よう、まるで他人では不親切のこともあらん　○それあるまじきことなり云々　其のやうなことはない、身よりのものも他人も不親切の人を今更に私のそばに置くべきか、決して置かぬ　○さすがにいかにぞや　相變らず元氣なやうであるか實際はどうか　○女どもにそむかれむ云々　世繼は妻に離れられて尼にならるゝので心細きやうに見ゆるとのこと

通釋　世の中の人の申すには、大宮が入道されて、太上天皇の御位になられ、女院と申します。この御寺に佛戒を受くる壇を建てられて、佛戒を受けらるべきなれば、世の中の尼ども悉く參つて、佛戒を受くべきなりとて、悦をなすのであります。この世繼の妻などもかゝる事を傳へ聞いて申すやう、私も其の時に白髪のすそをきり捨てよう、止め給ふなと私に相談しました。私は止めることはしない、然る後は年の若い女を娶つてくらすばかりと言ひました。妻のいふ、わが姪なる女一人あり、それを今より後妻にするやうに話しませう、何の緣もなき他人は情なきことがあらうもはかられないと申せば、私はいふ、さやうの事を心配することはない、たとひ親類の者なりとも、他人でも、私の身に親切でないものを此の老年になつてから、手許にひきよせて馴れ親むべきでないと話しました。漸く法衣や袈裟などを作る料によき絹一二疋求め用意しましたなど言うて、さうは言ふものゝ何となく物あはれなるやうすの出で來たるは、妻にこの世を背かれ、佛道に入るを心細く思ふためであらうと見受けられました。

（さすがにの下は記者の評）

□

さて今年こそは天變しきりにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。かんの殿のかく懷妊せしめ給ひ、院の女御殿のつねの、御惱みの中にも今年となりては、ひまなくおはしますなるなどこそ、おそろしうけたまはれ。いでや、かうやうの事をうち續け申せば、昔の事こそ唯今のやうに覺え侍れなど、見かはして繁樹がいふやう、「いであはれ、かくさま〳〵にめでたきことどもあはれにもそこら多く見聞き侍れど、猶わがたからの君におくれ奉りし折りのやうに、物の悲しく思ひ給へらるゝをりこそは侍らね。八月十日あまりの事に候ひしかば、をりさへこそあはれに、時しもあれと覺え侍りし物かな」とて、鼻たび〳〵かみてえもいひやらず。いみじと思ひたるさま、誠にそのをりもかくこそはと見えたれ。一日かた時生きて、世にめぐらふべき心ちもし侍らざりしかど、かくまで候ふは、いよ〳〵ひろごり榮えおはしますを、見奉り悦び申さむとに侍るめり。さて、又の年の五月廿四日こそは、冷泉院は誕

生せしめ給へりしか。それにつけて、いとゝこそ口惜しきをりのうれしさは、かりもおはしまさざりしかな」といへば、世繼も、しか〳〵と快く思へるさまおろかならず。「朱雀院村上などの、うちつゞき生れおはしましゝは、又いかに」などいふほど餘りにおそろしくぞ。また世繼が思ふ事こそ侍れ。便なきことなれど、あすとも知らぬ身にて侍れば、たゞ申してむ。「この一品宮の御有樣のゆかしくおぼえさせ給ふにこそ、又命をしく侍れ。その故は、生れおはしまさむとて、いとかしこき夢見給へしなり。さおぼえ侍りし事は、故女院、この大宮など孕まれさせ給はむとて見えし、たゞ同じさまなる夢に侍りしなり。それにてよろづおしはかられさせ給ふ御ありさまなり。皇太后宮にいかで啓せしめむと思ひ侍れど、その宮のほとりの人にえあひ侍らぬが口をしさに、ここら集り給へる中に、若しおはしましやすらむと思ひ給へて、且はかく申し侍るぞ。行末にも、よくいひけるものかなと、おぼしあはする事も侍りなむ」といひしをりこそ、こゝにありとて、さしいでまほしかりしか。

語釋　○今年　萬壽二年二月　○妖言　あやしき流言　○院の女御殿のつねの御惱みの云々　東宮の女御寬子は常に御病氣であるが今年はたえず病氣であるなど　○いであはれ　いやもう　○そこら　數多　○わが寶の君に　我が大事の貞信公に死なれた時のやうに　○時しもあれと覺え侍りし物かな　時もあらうに、なぜに八月の秋にゆかれたかと思うた　○そのをり　其の死んだをり　○世にめぐらふべき　世にめぐりあふべき　○口惜しき　貞信公死したる爲め　○おろかならず　おろそかでない　○おそろしくぞ　恐ろしく思うた　○便なきことなれど　不都合なることなれど　○故女院　東三條院詮子　○ここら　澤山　○行末にも　將來に　○よくいひけるものかな　よく言つたものよ　○おぼしあはする事も侍りなむ　感心だと思召すことはありませうと　○さしいでまほしかりしか　飛び出して行きたかつた

通釋　さて今年こそは、天變はしきりに到り、世のよからぬ言ひふらしなど聞えるやうです。かんの殿は御姙娠になられ、院の女御殿寬子は、常に御病氣であつたが、今年となつては、たえまなく御病氣がちであるなど、物ごと恐しく聞えます。いやもう、かやうの事を打ちつづけて話せば昔の事は只今のやうに思ひますなど世繼と繁樹と顏を見あはせて、繁樹のいふやう、いやもう、かくさま〴〵のめでたきことも、又あはれなることも、數限りなく見聞しましたが、なほわが大切の主人貞信公の、薨去された時の悲しかつた時のやうに悲しく思うたことはありません。八月十日餘の事でありましたから、折しも秋の半なれば、折もあらうに、さなくともこの物がなしき秋の時節に薨去されしことよとて、鼻をたびたびかみて、物もよくいはれず、非常に悲しいと思つてゐるさまをみれば、まことに貞信公の薨ぜられし時も、今のやうに悲しんだことと見えました。繁樹いふ、一日片時も生きながらへて、世に在るべき心地もしませんでしたが、今日まで生きて居つたのは、貞信公の子孫がいよ〳〵ひろがり榮えますを見て悅び申さう爲であります。さて又の年の五月四日こそは冷泉院は御降誕になりました。それにつけても、貞信公の薨ぜし口惜しき時にかゝはらず、私の嬉しさは實に無量で、此程の悅び事またと無かつたといへば、世繼もさやう〳〵と心よく思うたさま、一通でなく見えました。世繼のいふ、「朱雀院村上院などの打ちつゞき生れましたは又如何に」など言ふほど、あまり恐しく思ひました(記者は恐しく思うたのである)、又世繼のいふ、私の常に思ひをることがあります。こゝにて語るは不都合なることなれど、老人の明日ともわからぬ身でありますから、ただ申してみよう。この一品の宮禎子內親王の將來の御有樣の尙長く見奉りたく思ふによりて、又命惜しく思ひます。その故は、この一品の宮の御生誕あらせられんとした時、私は甚だよい夢想を見ました爲であります。その夢想の吉相であると思はれし事は、故女院詮及び子この大宮彰子など孕まれた時に見し夢と同じさまの夢想でありました。

それですべてを推しはかることが出來るのであります。皇太后宮妍子にどうかして申しあげようと思ひますが、その宮に仕へる人にもあふことが出來ぬのを殘念に思うて、數多集つて居る中に若し宮仕の人もあらうかと思うて、一面には老の身のはかなさに申し殘し、一面には御母后宮に啓し奉らうかとて、かく不都合なることなれど申しますぞ。將來この一品宮の御有樣を見る人は、かつて世繼がしかゞ〳〵の事を申してあつたが、よく申しあてたことかなと、思ひ合はせて感心せらるゝこともあらうかと語つた時に、その宮のほとりに仕ふるものはこゝにありと、翁の前に名乘り出たかつたと例の記者の言である。

□

いと〳〵淺ましくめづらかに、つきもせず、ふたり語らひしに、此の侍「いと〳〵興あることをも承るかな。さても物のおぼえはじめは何事ぞや。それこそまづ聞かましけれ。語られよといへば、世繼、六七歳より見聞き侍りし事は、いとよくおぼえ侍れど、其の事となきさは證のなければ用ふる人も候はじ。九つに侍りし時の大事を申し侍らむ。小松のみかどの親王にておはしましし時の御所は、皆人知りて侍り。己が親のさぶらひし所、大炊の御門よりは北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば、宮のかたはらにて、常に參りて遊び侍りしかば、いと閑散にてこそおはしましゝか。二月の三日は初午といへど甲午の最吉日、つねよりも世擧りて、稲荷まうでにのゝしりしかば、父のまうで侍りし供に、隨ひ參りて侍る。さは申せど、をさなき程にて、坂の怖きを登り侍りしかば、困じて、え其の日のうちに還向つかまつらざりしかば、父がやがて　その御社の禰宜の大夫がうしろみ仕うまつりて、いとうるさくて候ひし宿に罷りよりて、一夜は宿り候ひて又の日歸り侍りしに、東の洞院よりのぼりにまかるに、大炊の御門より西ざまに、人々のささと走れば、怪しくて見候ひしかば、我が家のほどにしも、いと黑うなるまで、人立ちこみて見ゆるに、いとゞ驚かれて、若し燒亡かと思ひて、上を見あぐれば、烟もたゞず、さは大きなる追捕かなと、かた〳〵に心もなきまで惑ひまかりしかば、小野宮のほどにて、上達部の御車や鞍おきたる馬をも、かうぶり、袍など着たる人々などの見え侍りしに、心得ず怪しくて、「何事ぞ〳〵」と人ごとに問ひ候ひしかば、「式部卿の宮みかどにゐさせ給ふとて、大殿をはじめ奉りて、皆人まゐらせ給へるなり」とて、いそぎまかりしなどぞ、物おぼえたる如くにて見給へし。

語釋　○あさましくめづらかに　おどろくほど珍らしき　○ふたり　世繼と繁樹　○此の侍　例の青侍　○おぼえはじめ　記臆してゐる中の最初のもの　○其の事となきは　格別の事でないのは　○小松のみかど　光孝天皇　○大炊の御門　東西に通じたる街路の名　○町尻　南北に通じて室町と西洞院との間にある通路なり　○閑散　ひま　○甲午の最吉日　當時は甲午を最吉日となした　○稲荷　山城國紀伊郡深草村に在り　○坂のこはき　坂の急にて怖しき　○え其の日のうちに還向つかまつらざりしかば　其の日には歸ることが出來なかつたから　○禰宜の大夫　五位のねぎ　○うしろみ　萬事世話する　○うるさくて　交情の深厚なること　○ささと　急ぎ　○大なる追捕　追捕は盜賊などを捕へること　○かた〳〵に心もなきまで云々　さま〴〵心配して氣を失ふほど　○小野宮　大炊御門の南、烏丸の西にあり　○かうぶり　冠　○うへのきぬ　袍にて束帶の時に上に着る　○式部卿の宮　光孝天皇　○みかどにゐさせ給ふとて　天皇の位に登らせ給ふ　○大殿　基經　○いそぎまかりし　急いで行つてしまつた　○物おぼえたる如くにて見給へし　これが物をおぼえた初のやうである

通釋　非常にあきれて肝のつぶれる程珍しいことを、いつ盡くるともなく、世繼と繁樹と二人語りましたに、この

青侍はいふ、甚だ面白いことを御聞き申すことよ、さて翁の最も始めに覺えましたことは如何なる事にか、まづそれを聞きたく思ひます、語り給へといへば、世繼のいふ、六七歳より見聞きましたことは、甚だよく覺えてゐるが、その事となく、あまり世に聞えぬことは、證據なければ聞く人も信用せぬだらう。されば九歳になつた時の大事件を申しませう。光孝天皇の親王であられた時の御所は、皆人は知つてゐます。私の親の居つた所は、大炊の御門よりは北、町尻よりは西になりました、されば、小松殿の傍で、常に參つて遊びをりましたが、帝は甚だ暇のおはした御身でありました。二月の三日は初午といへど、甲午最吉日で、常よりも世の中こぞつて、稲荷詣にさわぎましたので、私も父の御供をしました。さうはいへど、幼き時で、坂の險しきを登りましたから、疲れて其の日の中に還ることは出來ませんでした。父は卽ちその御社の禰宜の太夫の後見をして居て、甚だ仲好くしてゐたのでその宿にまゐつて、一夜は宿つて、翌日歸りましたに、東の洞院をのぼりますに、大炊の御門より西の方に、人々急いで走るから、怪しく思うて見ましたが、わが家のあたりに、甚だ黑くなるまで、人が立ちこめて見えました。大に驚いて火事かと思うて、上を見あぐれば烟も立ちません。さては大いなる追捕かと、種々に心配し喪神するまでおどろき惑うて、次第に行きますと、小野の宮のあたりで、上達部の御車や鞍おきたる馬ども、冠。上の衣着たる人々なども見えました。不思議に思つて、何事ぞと人毎に問ひましたれば、時康親王が御門にならせ給ふとて、基經を始めとしみな人は參り給ふのであるとて、急き參りました。この事を見申したなどは、わが物覺えた初の事でありました。

□

また七つばかりにや、元慶二年ばかりやありけむ、式部卿の宮の侍從と申しゝをりぞ、寛平の天皇、つねに狩をこのませおはしまして、霜月の廿日あまりのほどにや、鷹狩に式部卿の宮より出でおはしまし

ど御供に走り參りて侍り。賀茂の堤のそこ〳〵なる處に、侍從殿鷹つかはせ給ひて、いみじう興に入らせ給へるほどに、遊に露たち、世間もかいくらがりて侍りしに、東西もおぼえず、くれのいぬるにやとおぼえて、やぶの中にたふれふして、わなゝき惑ひ候ふほどに、時中ばかりや侍りけむ。後にてうけたまはれば、賀茂の明神のあらはれおはしまして、侍從殿に物申させおはしましける程なりけり。その事は、皆世に申しおかれて侍るなれば、中々申さじ。しろしめしたらむ、あはそかに申すべきにも侍らず。さて後六年ばかりありてや、賀茂の臨時の祭はじまりけむ。位につかせおはしましゝ年とぞおぼえ侍る。其の日の酉の日にて侍りければ、やがて霜月のはての酉の日にては侍るぞ。はじめたる東遊の歌、敏行の中將ぞかし。

ちはやぶる賀茂の社の姫小松よろづよまでも色はかはらじ

古今に入りて侍り。皆人しろしめしたる事なれど、いみじくよみ給へるぬしかな。今にたえずひろごらせ給へる御末、みかどと申せど、かくしもやおはします。

語釋　○式部卿の宮　宇多天皇の以前の稱　○寛平の天皇　宇多天皇　○鷹狩　鷹を放ちて鳥を捕ふること　○そこそこなる處　或る處　○世間もかいくらがりて　天地もくらくなつて　○くれのいぬるにや　暮になつたのか　○時中　半時なり、今ならば一時間に當る　○侍從殿　宇多天皇なり　○あはそかに　疎略に　○其の日の酉の日にて云々　其の日の酉の日であつたから毎年十一月酉の日に祭をするといふ意　○はじめたる東遊の歌　最初の祭の時の東遊の歌　○敏行の中將ぞかし云々　敏行の作なり、さて一首の意は前の本紀に解釋せり　○古今　古今和歌集　○今にたえずひろごらせ給へる御末　宇多天皇の御子孫の盛なること　○かくしも

やおはします　賀茂の明神の御守なりとのこと

通釋　又七つ位の時であつたらう。元慶六年頃と思ひます。宇多天皇が光孝天皇の侍從であつた時に、常に狩を好まれて、十一月の二十日餘の程であつたらう。鷹狩に式部卿の宮より出でおはしました時の御供に走り參りました。賀茂の堤の或所に侍從殿鷹をつかはれて、甚だ悅んでゐ給へる時に、俄に霧たつて、世間も暗くなりましたに、東西もわからず暮れになり行くのかと思うて、藪の中に倒れふして、ふるうてをつた時に、半時ばかりであつたらう。後にて聞けば、賀茂の明神があらはれまして、侍從殿に御話しされてをつた程でありました。その事は皆世にしるしおかれてあるから、かへつて申しますまい。集れる人々も知つてをらるゝだらう、なまなかに申すべきではありません。さて後六年ほどあつて、賀茂の臨時の祭は始まつてあつたらう。宇多天皇の御卽位の年と思ひます。その日酉の日でありましたから、卽ち祭りは十一月の末の酉の日であります。始めての祭の時の東遊の歌、敏行の中將はつくりました、「ちはやぶるかものやしろのひめこ松よろづ代ま　もいろはかはらじ」といふので古今集にあります。みな人の知つてをることなれど立派によみ給へる君であるよ。今に宇多天皇の御子孫は繁昌してをります。御門と申しましてもみなかくの如きものではありません。

□

八幡の臨時の祭、朱雀院の御時よりぞかし。朱雀院生れさせ給ひて三年はおはします殿の御格子まゐらず、夜晝火をともして、御帳のうちにておほしたて奉らせ給ふ。北野におぢ申させ給ひて。天曆のみかどをばいと然も守り奉らせ給はず、いみじき折節に生れさせ給へるぞかし。朱雀院生れおはしまさずば藤氏の御榮いと斯うしも侍らざらまし。さて位に卽かせ給ひて、將門が亂出で來て、其の御願にてとぞ承りし。其の東遊の歌貫之の主ぞかし。

松も生ひ又も苔むす石淸水行く末遠く仕へまつらん

集にも書きて侍るぞかしと言へば、又繁樹は、此の翁も其の主の申されつるがごとく、くだ〳〵しき事は申さじ。同じ事のやうなれど、寛平延喜などの御讓位の事などは、いと畏くたしかに覺え侍るをや。伊勢の君の弘徽殿の壁に書きつけ給へりし歌こそは、そのかみのあはれなることと人申し〳〵か。

別るれどあひも思はぬもゝしきをみざらむことのなにかかなしき

法皇の御かへし。

身一つにあらぬばかりをおしなべてゆきかへりてもなどか見ざらむ

といへば、傍なる人、「法皇の書かせ給へりけるを、延喜の、後に御覽じつけて、かたはらに書きつけさせ給へりと承るは、いづれかまことならむ。」

語釋　○八幡　石淸水八幡宮　○三年はおはします殿の御格子まゐらす　三年間は御出でになる殿の御格子戸を閉ぢてをられた　○御帳　御帳臺のこと前にあり　○おほしたて　育てあげ　○北野におぢ　菅原道眞の靈におそれた　○天曆のみかどをば云々　村上天皇の御幼時は朱雀天皇の時のやうには守護し給はなかつた　○いみじきをりふし　恐ろしき時に　○その御願云々　將門討平の祈願にて臨時の祭は始つた　○松もおひ又も苔むす石淸水云々　一首の意は、松も生ひ又苔むす石淸水の神に將來長く仕へまつらうとの意なり　○集　貫之の歌集　○寛平延喜　宇多天皇、醍醐天皇　○いとかしこく　甚だたしかに　○伊勢　大和守藤原繼隆の女、宇多天皇の中宮溫子に仕ふ、後に繼隆は伊勢の守たりしを以て伊勢と稱す、後、天皇の寵を得て皇子を生む　○別るれど云々　一首

の意は、宇多天皇は位を御去りになられたので、われも禁中を去るのであるが、相思の君のいまさぬのに、此の禁中を見ないやうになるのを、なぜ悲しく思ふだらう　○法皇　宇多天皇　○身一つにあらぬばかりを云々　天皇はわれ一人にてはない、次々に御位に即く　だらうから代々の天皇に厩任するがよい、いかなればなげくぞとの意なり　○延喜　醍醐天皇

通釋　八幡の臨時の祭は朱雀院の御時より始まりました。朱雀院御降誕になられて、三年の間は、御座す殿の御格子をあげられず、夜晝火をともして、御帳の中で御育てになりました。菅公の靈に恐れ申したのでありました。村上の御門をば、そんなにも守り奉りません。朱雀院は好い折に生れましたのであります。朱雀院御降誕なくば藤氏の御榮え、かやうに盛大ではなかつたでありませう。さて朱雀院が位に即かせられて、平の將門の亂が出て來て、其平定の御祈願の爲と承りました。その臨時の祭の時の東遊の歌は貫之の大人がよまれました。「松もおひまたもこけむすいはしみづゆくすゑとほくつかへまつらん」といふのであります。貫之の歌集に書いてありますといへば、又繁樹のいふ、私は世繼の申された如く、くだ〳〵しきことは申しますまい。同じ事のやうなれど、宇多、醍醐などの御讓位の程の事などは、甚だすぐれて確に覺えてゐますから、それを語りませう。伊勢の君の弘徽殿の壁に書きつけました歌は、宇多天皇御讓位當時のあはれなる事と人は申しました。「わかるれどあひも思はぬもゝしきを見ざらんことのなにかかなしき」といふのであります。

法皇の御かへし「身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきかへりてもなどか見ざらむ」と申すのであります、といへば、傍の人のいふ、宇多法皇の御書きになつたものを、醍醐帝は後に御覽になつて、傍に書きつけ給へるとも承つてゐますが、いづれが實でありませう。」

□

同じみかどと申せど、その御時に生れあひて候ひけるは、あやしの民の竈まで、やんごとなくこそ。大小寒のころほひ、いみじう雪ふりさえたる夜は、諸國の民百姓いかに寒からんとて、御衣をこそ、夜の御殿より投げ出しおはしましければ、おのれらまでも惠みあはれびられ奉りて侍る身と、おもだたしうこそは。されば、その世に見給へし事は、猶末までもいみじきことと覺え侍るぞ。人々きこしめせ。此の座にて申すは憚あることなれど、かつは若く候ひしほど、いみじと心にしみて思ひ給へし罪も、今にうせ侍らし。今日此の伽藍にて懺悔つかうまつりてむ。

語釋　○あやしの民　卑しき民　○やんごとなくこそ　有り難いことである　○大小寒　大寒小寒　○夜の御殿　清涼殿の一室にて御寢所なり　○おもだたしうこそは　面目ある心ちし　ありがたい　○罪　佛敎にては執着を罪とする故に、延喜の帝の御衣を脫せられたことを心に忘れずにゐたことを罪といへるなり。○懺悔　過去の罪惡を悔い改めること

通釋　何れの御門も、同じく天下をしろしめす帝ではあるが、此の御門の世に生れあひたる人は、甚だ幸でありました。賤しき民家の上までも。御心を注がせ給うたことは有り難いことであります。大寒小寒の頃、非常に雪の降つたさむい夜は、諸國の民百姓は如何に寒からうとて、御衣をよるの御殿より投げ出されました。されば、われわれ如き賤しきものも、君に惠まるゝ身と思へば、面目ある心地がいたします。されば、この世に見ました事は、猶末々の今に至るまで心にしみて思ひます。人々御聞き下さい。この座にて申すは憚あることなれど、只ぬしたちに聞かせんとのみにあらず、また一つには、翁の若くあつた時、心に染みて思ひたりし執着の罪を、今日悉くこの寺でざんげして、罪を滅さうとて、かく語らうとするのであります。

□

六條の式部卿の宮と申しゝは、延喜のみかどの一つ腹の御兄弟におはします。野の行幸せさせ給ひし

に、此の宮仕うまつらせ給ふべかりけれど、京のほど遲參せさせ給へりしかば、桂の里にぞまゐりあはせ給へりしかば、御輿とどめて、さきだてまつらせたまひしに、なにがしといひし犬飼の犬の足を二つながら肩に引きこして、深き河の瀨わたりしこそ、行幸につかうまつり給へる人々、さながら興じ給はぬなく、みかども興ありげに思召したる御けしきにこそ見えおはしましゝか。さて山口いらせ給ひしほどに、しらせうといひし御鷹の、鳥を捕りながら御輿の鳳の上に飛び參りて居て候ひし。漸々日は山の端に入りがたに、光のいみじうさして、山の紅葉錦を張りたるさまなるに、鷹の色はいと白くて、雉は紺青のやうにて、羽うちひろげて居て候ひし程は、實に雪少し打ち散りて、折節取り集めて、さる事やは候ひしとよ。身にしむばかり思ひ給へしかば、いかに罪得はべりけむとて、つまはじきはた〳〵とす。

語釋　○六條の式部卿　宇多天皇の皇子敦實親王　○野の御幸　鷹狩の爲め嵯峨野に行幸し給ふ　○此宮仕うまつらせ給ふべかりけれど、此の宮供奉せらるべきであつたが　○京のほど遲參云々　京都の中は列に加はらぬこと　○桂の里　山城葛野郡　○まゐりあはせ　馳せて列に加はりたり　○さきだて云々　此の宮を天皇よりさきにせられた　○肩に引きこして　犬の足をひきかつぐなり　○山口　山の入口　○しらせう　白き雄鷹なり　○鳥　きじなり　○ゐてさぶらひし　持つてこられた　○雪少すこし打ちちりて　雪が少しふつてきた　○折節とりあつめて　をりふし色々の景色をとりあつめて　○さる事やは候ひしとよ　そのやうな美しい景は比類なかつた　○いかにつみ得はべりけむ　忘れずにをるから執着の罪を得たりとのこと　○つまはじき　彈指　○はた〳〵　ばち〳〵

通釋　六條の式部卿の宮敦實親王は、醍醐帝の一つ腹の御兄弟であります。大原野行幸せられた時、この宮は御供をし給ふべきであつたが、京の供奉に遲參して、桂の里にて、後より追ひ參らせて、供奉に參會されましたから、天皇の鳳輦を傍めて、六條宮を先に立てましたに、某というた犬飼は、犬の前足を二つながら肩にひきこして負うて深き河の瀨を渡りました。行幸の御供の人々は何れも興じ給はぬはなく、御門も興ありげに思し召した御樣子が見えました。さて山の入口に入らせ給うた時に、しらせうといひし御鷹が、鳥を取りながら御輿の鳳の上に飛びまゐつてをりました。だん〳〵日は山の端に入り方になつて、夕日の光はひどくさして、山の紅葉は錦を張つたやうなるに、鷹の色はいと白くて、雉は紺青のやうで、羽をうちひろげて居つたさま、まことに、雪も少し降つて、色々取り集めてあつたので、またと再び見るべからざる景色でありました。身にしむほどに思ひましたから、如何に佛より罪を得たのであらうとて、つまはじきをはた〳〵といたしました。

□

大かた延喜のみかど、常に笑みてぞおはしける。其の故は實たちたる人には物言ひ難し、打解けたる氣色つきてなむ人は物は言ひよき。然れば大小のこと聞かんが爲なりとぞ、仰言ありける。それさることなり。氣惡き顏には物言ひふれ難きものなり。さて我れ如何でか、文月、長月に死にせじ、相樸の節、九日の節の停らむが口惜しきにと仰せられけれと、九月に失せさせ給ひて、九日の節は其れより止まりたるなり。其の日左衞門の陣の前にて、御鷹ども放たれしは、あはれなりしものかな、頓にこそ飛退かざりしか。公忠の辨をば大方の事にとりても、やんごとなきものに思したりし中にも、鷹のかたざまにはいみじう興ぜさせ給ひしなり。日々に政をつとめ給ひて、馬をいづこにぞや立て給ひて、事終るまゝにこそ、中山へはいませしか。官の司の辨の曹司の壁には、其の殿の鷹の物は未だ附きて侍らむ。久世の鳥交野の鳥の味は參り知りたりき。傍は虛言をのたまふにこそ試み奉らんとて、みそかに二所の鳥をつく

り交ぜて、印を附けて人の參りたりければ、いささか取り違へず、此れは久世の、此れは交野のなりとこそまゐり知りたりけれ。かゝりければ、ひたぶるの鷹飼にて候ふものゝ、殿上に候ふこそ見苦しけれと、延喜に奏し申す人のおはしければ、「公事を疎にして、狩をのみせばこそ罪はあらめ、一度政をもかかで公事をよろづ勤めて後に、ともかくもあらむは、なでう事かあらむ」とこそ仰せられけれ。

語釋　○まめだちたる人　まじめなる人　○打とけたるけしき　親みやすき容子　○けにくき顏　やさしから顏　○文月　七月　○長月　九月　○相撲の節　毎年七月宮中にて相撲天覽群臣に宴を賜ふ　○九日の節　重陽の節供　○その日　九日　○左衞門の陣　建春門　○御鷹ども放たれしは云々　日頃御愛しになられた鷹を放生の意にて放ちましたが、鷹は急にはとびのかなかつた　○公忠　源公忠　○大かたの事　何事にても　○鷹のかたざまには云々　公忠は鷹のことに委しかつたから天皇も甚だ面白くおもひなされた　○日々に政をつとめ給ひて云々　公忠の鷹狩に出るのをいふ　○事はつるまゝにこそ中山へ云々　政務を終れば直に中山に鷹狩にゆかれしなり　○官のつかさ　太政官廳　○辨の曹司　辨官の詰所なり、官廳の東北隅に在り　○鷹の物　鷹の糞　○久世　山城國久世郡にあり　○交野　河内國北河内郡にあり　○まゐりしりたりき　食べわけをした　○かたへ　他の人々　○みそか　ひそか　○人のまゐりたれは　人は贈りたれば　○ひたぶるの鷹飼にて候ふものゝ云々　公忠は鷹狩に夢中になつてゐるから清涼殿上に伺候するは見苦しいと讒言した　○公事　政務　○なでう事からむ　何の仔細があらうぞ

通釋　繁樹いふ、おほかた、醍醐天皇は、いつも笑顏でをられました。その故はまじめの顏してゐる人には物言ひにくいものである、打ちとけたやうすについて、人は物を言ひよきものである。されば、大小の事を聞かんがために笑まるゝのであると、帝は仰せられました。それはその通りであります。氣はひ疾き顏には口をきゝにくいものである。さて帝はわれはどうしても七月九月には死なじ、相撲の節九日の節の停るのが殘念であると仰せられたが、九月に崩御になられて、九日の重陽の節は、それより停まりました。その日左衞門の陣の前で、御鷹の日頃愛し給ひしものを放ちましたに、鷹もかなしく思ひましたらう、速にとび去りもしなかつたことは、あはれであつた。右少辨公忠をば何事につけても愛し給うたが、鷹の方には甚だしく興ぜさせ給ひました。日々に政事をつとめ給うて、その退廳の時は豫て用意して、何處にかつなぎおかれた馬に乘つて中山に參りました。太政官廳の壁には、公忠の鷹の糞はまだ着いて居りませう。公忠は久世の鳥、交野の鳥の味を食ひ別けられました。半分は虛言を言ふのだらう、試みませうと、密に二處の鳥を作りまぜて、しるしをつけて、公忠に參らせたるに少しも取りたがへず、これは久世のもの、これは交野のものなりと食ひ別けました。かやうであつたから、專ら鷹飼をする人が、殿上に居るは見ぐるしいとて、醐醍帝に奏し申す人がありましたけれど、帝のしたまふやう、公事をおろそかにして、狩をのみせば罪はあるだらう、一度も政事を執ることをかゝさずして、公事をすべてつとめて後に、わが好む道にとかく心を寄せることは、何の罪があらうと仰せられて、少しも咎められませんでした。

□

いで　いみじく侍りしことは、やがて同じ君の、大井河の行幸に、富小路の御息所の御腹の御子の、七歳にて舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人しほたれぬ人侍らざりき。あまり御かたちの光るやうにし給ひしかば、山の神めでゝ取り奉り給ひてしぞかし。其の御時にいと面白き事ども多く侍りきや、大方申し盡すべきならず。先づ申すべき事をも、唯だ覺ゆる事に從ひて、しどけなく申さむ。法皇の所々修行あそばせ給ひて、宮の瀧御覽ぜし程こそいみじう侍りしか。其の折菅原の大臣の遊ばしたりし和歌

水引の白絲延へて織る機は旅の衣に截ちや重ねむ

大井の御幸も侍りしぞかし。扨又御幸ありぬべき所と申させ給ひて事の由奏せんとて、小一條のおほいまうちぎみぞかし、

小倉山紅葉の色も心あらば今一度の行幸待たなむ

あはれ優にも候ひしものかな。さて、みゆきにあまたの題賜りて、やまと歌つかうまつりしなかに、「猿山のかひに叫ぶ」といふ題を躬恒、

わびしらに猿ななきそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

その日の序題は、やがて貫之のぬしこそ仕うまつりしか。

語釋　○いで　さて　○いみじく侍りしことは　大層なことはあつた　○富小路の御息所　藤原時平の女褒子　御子　雅明親王　○舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか　舞をまつたほど感心したことはない　○萬人しほたれぬ云々　すべての人は感涙を流した　○山の神云々　山の神は愛して取りました即ちまもなく薨去なされた　○しどけなく　しまりなく　○修業しあそばせ給ひて　佛道を修業あそばれて　○宮の瀧　吉野川の上流にあり　○菅原のおとど　道眞公　◎水ひきの白糸はへて云々　一首の意は、此の瀧は眞白な糸を引きのべて、布帛を織れるやうだ。今寒さは身にしむから、此の布帛を裁つて、旅の衣に重ねて着よう　○大井の御幸　延喜七年九月十日なり　○みゆきありぬべき所　天皇の御幸あらせられてよき所　○小一條のおほいまうちぎみ　左大臣藤原忠平をいふ　おほいまうちぎみは大臣のこと　◎小倉山もみぢの色も云々　一首の意は、小倉山の紅葉よ。今上皇の御幸ありて然るべき所と御ほめになられたれば、今一回の御幸あるまで散らずに待つてくれればよい　◎わびしらに云々　一首の意は、猿よ左樣に啼くことなかれ、今日は宇多法皇は御幸なられて、此の山のかひあるうれしき日でないか、わびしらは　迷惑さうに　○その日の序題　和歌の集の序文なり

通釋　又すぐれてあつた事は、やがて醍醐帝の大井河の行幸に、富小路の御息所の御腹の御子の、七歳で舞をせられた事のやうな事はなかつた。其の時、舞のめでたきため、萬人感に堪へないで、思に沈み涙にぬれぬ人は無かつたのです。雅明親王はあまり御容貌は光るやうに美しくありましたから、山の神は賞美して取つてしまひました。即ちまもなく失せ給うたのであります。その行幸の時に、甚だ面白い事ども多くありました。大かた言ひ盡すことはできぬ。まづ申すべき事をも、只覺えてゐるにしたがつて、とりしまりなく申しあげよう。宇多法皇は所々修行し給うて、宮の瀧御覽ぜし時はまことによい景色でありました。その折菅原道眞の大臣のよみ給うた歌は「みづひきのしらいとはへておるはたをたびのころもにたちやかさねむ」といふのであります。大井の法皇の御幸もありました。さて又大井の流、小倉山の紅葉すぐれたる景色なれば、必ず天皇も行幸しおはしまして、然るべき所なりと、法皇の申されたのを、忠平公其の旨を受けて、行幸あるべき由を奏聞せんとして、よみたる歌は「をぐら山もみぢの色も心あらば今ひとたびのみゆきまたなむ」といふのであります。あはれ優美にもよませ給ふものよ。さて帝の行幸に、あまたの題たまはつて、和歌をよみました中に、猿山の峽に叫ぶといふ題を躬恒は「わびしらにましらなきそあし引の山のかひあるけふにやはあらぬ」とよみました。その日の序題はやがて紀貫之が書きました。

□

さて又、朱雀院も優におはしますとこそはいはれさせ給ひしかども、將門が亂れなどいできて、恐れすぐさせおはしましゝ程に、やがて、代らせ給ひにしぞかし。其の程のことこそいとあやしう侍りけれ。母后の御もとに行幸せさせ給へりしを、斯る御有樣の思ふやうにめでたく嬉しきことなど奏せさせ給ひ

て、「今は東宮ぞ斯くて見聞えまほしき」と申させ給ひけるを、心もとなく急ぎおぼしめしけるにこそありけれとて、程もなく讓りきこえさせ給ひけるに、后の宮は「さも思ひても申さざりしことを、たゞ行末の事をこそ思ひしか」とて、いみじく歎かせ給ひけり。さておりさせ給ひて後、人々のなげけるを御覽じて、院より后の宮に聞えさせ給へりし、國ゆづりの日、

日の光いでそふ今日の時雨るゝは何れの方の山邊なるらむ

后の宮の御返し、

白雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のひかりながらに

などぞ聞え侍りし。院は數月綾綺殿にこそはおはしましゝか。後には少し悔いおぼしめすことありて、位に復り卽かせ給ふべき御祈などせさせ給ひけりとあるは實にや。御心いとなまめかしくおはしましゝ。御心地おもくならせ給ひて、太皇太后宮の幼くおはしますを見奉らせ給ひて、いみじくしほたれさせ給ひて、

吳竹のわが世はことになりぬとも音は絶えせずぞなほ泣かるべき

誠に悲しくあはれにこそ承りしか。

語釋　○優におはします　風流におはします　○恐れすぐさせおはしましゝ程に　恐れ慎みて過し給ひし程に　○やがてかはらせ給ひにしぞかし　まもなく御讓位になられた　○かゝる御ありさまの云々　天皇にてあらるゝ御有樣の我が思ふ通りに立派にうれしきことを母后は奏したるなり　○今は東宮ぞかくて見まほしき　今は東宮を天皇にして見たしとなり　○心もとなく急ぎおぼしめしける事にこそありけれとて　東宮の位に卽かるゝを待遠しく思はれて母后はかく言はるゝことかと御推量あられて　○さも思ひても申さざりしことを云々　東宮を早く卽位せしめようと思うて申したのではない。只遠き將來を申したるなりとて　◎日の光云々　一首の意は、東宮の位に卽かれて、新しき光の普くさしそうれしき今日なるに、悲しむ聲の聞ゆるは、さて何處ならむとなり　◎白雲のおりゐる方やしぐるらむ云々　表面は、日の光は何れの山をも照らしてへだてはなけれど、白雲のおりゐる方はその雲の爲にさへぎられて、光もさゝず時雨もふるならむとの意にて、裏面は新帝の御めぐみは行きわたれど、位を下りたる院の御方の人々は悲しみに沈むならんとなり　○なまめかし　優美　○御心地おもくならせ給ひて　御病氣重りて　○太皇太后宮　朱雀院の皇女昌子內親王　○しほたれ　歎き悲む　◎吳竹のわが世は云々　吳竹は世の枕詞、音に根をかけて竹の緣語にて言へり。一首の意は、病重くなりていつ此の世を去るもわからず、たとひ別の世界に住むとても、皇女を思ふ心は變りなければ、聲絶えず泣かるゝことならむとなり

通釋　さてまた朱雀院も風流の御門なりと言はれましたけれど、將門が亂など出できて、恐れて過させ給ふほどにやがて御讓位になられました。その程のことは甚だあやしくありました。母后藤原穩子のもとに行幸せられた時に、母后はかやうに天子になり給ひしことのめでたく嬉しきことなど奏しまして、今は春宮の御位に卽かせらるゝを見申したいものと申しました。天皇は母后のさやう申された御心をとりちがへ給ひ、東宮の天位に登り給ふを待遠に思ひまして、われに位を下りよと促し給ふならんと考へられて、程なく御位を讓りました。后の宮は、さやうに思うても申さぬことで、たゞ〳〵末の事を思ひましたとて、非常に歎かれました。さて御讓位の後、人々の歎きますのを御覽じて、朱雀院より后の宮穩子に申し送られた御製、「日の光出でそふけふのしぐるゝはいづれのかたのやまべなるらむ」后の御返し「しら雲のおりゐるかたやしぐるらむおなじみの山のひかりながらに」など申しました。朱雀院は數月綾綺殿に居られました。後には少し御讓位を悔い給ふことあつて、位にかへりつかせ給ふべき御祈りなどせられたといふはまことでありませうか。御心はいとやさしくありました。御病も重くなりまして、太皇太后宮昌子の幼くあらるゝを見まして、ひどく悲しまれて、「くれ竹のわが世はことになりぬともねはたえせずぞな

ほなかるべき」と御よみになられました。まことに悲しくあはれにうけたまはりました。

□

村上のみかど、はた申すべきならず。なつかしうなまめきたる方は、延喜にもまさり申させ給へりとぞ、人申すめりしか。「我れをば人は如何がいふなる」と人に問はせ給ひけるに、「寛になむおはしますと、世には申す」と奏しければ、「さては譽むるなり、王の嚴しうなりなば、世の人いかゞ堪へむ」とこそ仰せられける。

語釋　○はた申すべきならず　また申すまでもない　○人申すめりしか　人は申すやうに見えた。

通釋　村上帝はまた申すまでもない。なつかしくやさしいき方は醍醐帝にもまさつて居られますと、人々が申すやうです。朕をば人は如何なる批評をするかと人に御問ひになりましたに、寛大でおはしますと世の人は申すと奏しました。帝はさてはほむるのである、王がきびしくならば、世の人は如何で堪へようと仰せられました。

□

いとをかしうあはれに侍りしことは、上の天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、何がしのぬしの藏人にて在すがりし時、召りて、若きものどもはえ見知らじ。きんぢ求めよ」とのたまひしかば、ひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に色こく咲きたる木の、容體美しきが侍りしを、掘りとりしかば、家あるじの「木にこれゆひつけてもてまゐれ」といはせ給ひしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりて候ひしを、何ぞとて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

勅なればいともかしこし鶯のやどはととはじいかゞ答へむ

とありけるに、怪しく思召されて、「何者の家ぞ」と尋ねさせ給ひければ、貫之ぬしの御女の住む所なりけり。「遺恨のわざをしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。繁樹「今生の辱詬は是れや侍りけむかし。さるは思ふやうなる木もてまゐりたりとて、きぬかづけられたりしも、からくなりにき」とて、こまやかに笑ふ。

語釋　○いますがりし　いましし　○え見知らじ　見わくることができぬ　○きんぢ　汝　○ひと京　京中　○そこ〳〵なる家　或家に　○容體　ありさま　○ゆひつけ　結びつけ　○あるやうこそはとて　何かわけのあることならんとて　○勅なれば云々　一首の意は、勅なればかしこみて何事も申さぬが、鶯が歸り來つて我が宿は何處に行きしやと問うたら、如何が答へむとなり。○遺恨のわざ　殘念のこと　○あまえおはしましける　うべなふ意にて貫之の女の歌をいかにもと諾ひ給ふなり　○今生の辱詬　此の世での恥辱　○きぬかづけられたりしもからくなりにき　褒美に衣服を賜はりしも天皇は遺恨に思召せば甚だつらく感じたりとなり　○こまやかに　心からをかしさうに

通釋　甚だ面白く感情ふかくありました事は、この村上帝の御時に、清涼殿の御前の梅の木が枯れたので、もとめさせましたに、某の主が藏人であつた時承つて、藏人いふ、若きものどもは見しるまい、汝繁樹求めよと話されたから、京中あるきましたが有りませんでしたに、西の京の或家に、色濃くさいたる木の樣子美しくあるを見つけて、掘り取りました。主人は木にこれを結びつけて參れと言うてわたしましたから、故あることだらうと思うて持

つて參りました。村上帝は何ぞとて、御覽になれば、女の手にて書いてをりました。「勅なればいともかしこしうぐひすのやどはと問はゞ如何が答へむ」とありましたので、不思議に思しめされて、何ものゝ家ぞと尋ねましたれば、貫之のぬしの御女の住む家でありました。村上帝は殘念なることをしたと仰せられて、貫之の女の歌をいかにもとうべなひながら、其のまゝにいたしました。繁樹一生の恥辱はこれでありませう。その故は、よき木をもて參りたりとて、衣などを賜はりたれど、却て心に恥ぢて、我ながら辛くなりましたと言うて、心から笑ひました。

□

繁樹又「いと切に優しく思ひ給へしことは、此の同じ御時の事なり。承香殿の女御と申しゝは、齋宮の女御よ。みかど久しく渡らせ給はざりける秋の夕暮に、琴をいとめでたく彈き給ひければ、急ぎわたらせ給ひて、御傍におはしましけれど、人やあるともおぼしたらで、せめて彈き給ふをきこしめせば、

さらぬだにあやしき程の夕暮に荻ふくかぜのおとぞきこゆる

と彈きたりしほどこそ、せちなかりしと、御集に侍るこそいみじう候へ」といふは、あまり忝なしやな。

語釋　○承香殿の女御　醍醐天皇の皇子重明親王の御女徽子女王なり　○齋宮の女御　齋宮にて伊勢に仕へ給ひしを以て名あり　○渡らせ給はざりける　行幸なかつた　○めでたく　上手に　○人やあるともおぼしたらで　女御は氣もつかずに　○せめて　心をこめて　○さらぬだにあやしき程の云々　一首の意は、思ひなき身にも物がなしく怪しく思はるゝ秋の夕暮に主上の御出でもなく荻ふきゆする音のきこえて一層悲しさを覺ゆる　○せちなかりしと　堪へられなかつた

通釋　繁樹いふ、又心に深くやさしく思ひました事は、この同じ御時の事であります。承香殿の女御と申すは齋宮の女御であります。御門久しく渡らせ給はぬ秋の夕ぐれに、琴を甚だ上手に彈きましたれば、御門は感じ給うて急いで渡らせ給うて、御傍に居られましたが、女御は人の來られたのも心づかで、一心に彈き給ふを聞し召せば、「さらぬだにあやしき程の夕ぐれにをぎふく風のおとぞきこゆる」と此の歌に合せて琴をひき給ひし折は、朕も深く心にあはれと感じましたと陛下の御集に書きおき給うた事は、甚だやさしきことであつたと、九重の奥深きことをかれこれ申すのは、餘り勿體ないことであります。

□

或人「城外やし給へりし」といへば、「遠國にはまからず、和泉の國にこそ貫之ぬしの御任に下りて侍りしか。「蟻通をば思ふべしやは」とよまれたりしたびの供にも候ひき」。雨のふりしさまなど語りしこそ、ふる草子にあるを見れば、程へたる心地し侍るに、昔にあひにたる心地して、をかしかりしか。此の侍もいみじう興じて、「繁樹がめどもこそ、今少しこまやかなる事どもは語られめ」といへば、「われは京人にても侍らず、高き宮仕へなどもし侍らず、若くより、此の翁にそひて候ひにしかば、はか〳〵しき事をも見給へぬものをば」と答ふれば、「いづれの國人ぞ」と問ふ。「陸奥安積沼にぞ侍りといふ。」「いかで京には來しぞ」と問へば、「その人とはえ知り奉らず。歌よみ給ひし北の方おはせし守の御任にぞのぼり侍りし」といふに、中務の君にこそと聞くもをかしくなりぬ。「いと痛き事かな。北の方をばたれとか聞えし。よみ給ひけむ歌はおぼゆるにや」といへば、「その方に心もえで、おぼえ侍らず。たゞ、のぼり給ひしに、逢坂の關におはしてよみ給へりし歌こそ、所々おぼえ侍れ」とて、

都には待つらむものを逢坂の關まで來ぬと告げやゞ遣らまし

など、いとたどたどしげに語るさま、まことにたとしへなし。

語釋　○城外やし給へりし　京都を出でゝ他國に行くこと　○遠國は云々　繁樹の答にて遠國へは行かずの義なり　○貫之ぬしの云々　貫之の任國に下るとき御供した　○蟻通云々「かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは」といふ歌なり。貫之は和泉國日根郡なる蟻通しの神社の前にて馬のたやめるときよめる歌なり。一首の意は、かき曇りて眞暗なる大空に星がありとは誰か思ふぞと　表の意味なり。裏の意は　社殿の無き處に蟻通し明神のあることは知るべくもあらす、故に禮拜をしなかつたからゆるし給へといふ意なり　○ふる草子にあるを見れば程へたる心地するに、昔にあひたる心地してをかしかりしか　古き草子に其の事を書いてあるのを見た時は昔の事のやうに思はれるが、今繁樹の物語をきけば目の前に見る心地して面白い　○此の侍　例の青侍　○繁樹がめども云々　青侍の言なり。繁樹の妻君は女であれば、今少しこまかい事を語られるだらう　○はか〳〵しき事をも見給へぬものを　とりたてゝいふほどの事を見ませんものを　○陸奥の國云々　陸奥の國の安積の沼の近傍のものです、沼は岩代安積郡山之井村にありといふ　○その人とは云々　いかなる人とは知らす　○歌よみ給ひし北の方云々　歌よみを妻君として、陸奥の國守の任はてて上京せし時に御供して上京した　○中務の君　中務卿敦慶親王なり　○をかしくなりぬ　其の話は面白くなつて來た　○いといたき事かな　甚だ面白いことである　○その方に心もえで　歌の方の心得は無いので　○逢坂の關　近江國逢坂山にあり　○都には待つらむものを云々　一首の意は、都にては我等の歸るのを待つて居るだらう、今逢坂の關まで來たと告げてやりたい　○いとたどたどしげに語るさま云々　右の歌をよくおぼえず、不十分にかたるさま、甚だあはれげである

通釋　或人繁樹に向ひ、京の外に出でて、他國に旅行しましたかと問へば、遠國には參りません。和泉の國に貫之のぬしの御任に下りました時に、「ありとほしをば思ふべしやは」と詠まれた時の供に參りましたと言うて、その時雨の降りしさまなどを語りました。其の事をふる草子にて見れば、程へたる心地するに、今語るをきけば、昔にあつた心地がして面白くありました(記者の言)この青侍も大層面白がつて、繁樹の妻君に向うて、女どもは今少し細なる事を語ることはできようといへば、妻のいふ、我は京人でもありません。高き宮仕などもしません。若き時よりこの翁に添うてゐましたから、確として事をも見ませんものをと答へますと、侍がいづれの國人ぞと問うた。妻は陸奥國安積の沼でありますと答へた。侍はなぜに京には來ましたと問へば、妻のいふ、何の某と知りませんが、歌を詠みました北の方ある守の御任にのぼりましたときに具せられて上りましたといふに、其の北の方の方は中務の君であらうと聞くも面白くなりました。侍のいふ、甚だ面白き話かな、北の方をば誰と申しました、其の詠みました歌は覺えてをるかといへば、妻のいふ、歌の方に心得がないから覺えてゐません。たゞ上り給うた時に、逢坂の關にてよみました歌は、ところ〴〵覺えてをりますとて、「みやこにはまつらむものをあふさかのせきまできぬとつげややらまし」など、よくも覺えず不十分にたどるやうにして、かたるさま眞に翁たちのよく物語るに比して、たとへん方なくあはれであります。

□

繁樹「此の人をば人とおぼえずとよ、さやうの方はおぼゆらむものぞ。世間魂はしも、いとかしこく侍るを取り所にて、得去りがたく覺え侍るなり」と言ふに、世繼「いで此の翁の女人こそ、いとかしこくものは覺え侍れ。今一紀が兄にて候へば、見給へぬほどの事なども、あれば知りて侍るなり。染殿の后の宮のひすましに侍りけり。母も上の刀自にて仕うまつりければ、をさなくより參りかよひて、忠仁公をも見奉りけり。童形のほどの、いとものぎたなうも候はざりけるにや。やんごとなき公達も御覽じ入れて、兼輔の中納言、良岑衆樹の宰相の御文なども持ちて侍るめり。中納言はみちのくに紙にかゝれ、宰

相のは、くるみ色の薄様にてぞ侍るめる。

語釋　○さやうの方はおぼゆらむものぞ　中務の君の如き有名な人はたやすく覺ゆるものぞ　○世間だましひはしも云々　世方のあるのはとり所にて今日まで去りがたく連れ添ふのである　○女人　妻君　○一めぐりがこのかみにて　我れよりも十二年も年長者で　○見給へぬほどの事なども　私の知らぬ事も　○あれは　世繼の妻　○染殿の后の宮　文德天皇の皇后にて良房の女明子なり　○ひすまし　厠などを洒掃する卑しき女　○かんのとじにて　世繼の妻の母は御膳宿の刀自にてあつた。刀自は老女の尊稱なり　○をさなくなり參りかよひて　世繼の妻も染殿の后に出入せしなり　○忠仁公　良房　○童形のほどの　若き時の容姿　○ものぎたなう見苦しく　○御置じ入れて　公達は世繼の妻の若き時に懸想せしなり　○みちのくに紙　檀紙　○くるみ色　胡桃の核の如き色

通釋　繁樹は妻に向つて、この歌をよんだ人を何人とも覺えずとや、さやうに人は覺えて置くべきものぞと言うた。繁樹又侍に向つて、この女の取りどころは世事によくなれてゐることで、その爲に己も今日まで離別もせずつれそうてゐるのであるといふに、世繼はいふ、いや私の妻はいとかしこく物を知つて居ります。私より十二年も姉であるから、私の見ないほどの事なども、妻は知つてをります。染殿の后の宮明子の便所などを洒掃する卑しきものでありました。母もかんの刀自で仕へて居りましたので、幼くより參りかようて忠仁公をも見ました。妻の若き姿は物ぎたなくもなかつたのか、尊い公達も見染めて、兼輔の中納言、良岑の衆樹の宰相の御文なども持つて居るやうです。中納言はみちのくに紙に書き、宰相の文はくるみ色の薄様に書いたやうです。

□

此の宰相ぞかし、五十までさせることなく、ほど〳〵朝廷に棄てられたる樣にていますがりけるが、八幡に參り給ひたる雨いみじく降る。石清水の坂登り煩ひつゝ參り給へるに、御前の橋の木の少し枯れて侍りけるに立寄りて、

ちはやぶる神の御前の橘も諸木も共に老いにけるかな

とよみ給へば、神聞き、あはれびさせ給うて、橘も榮え、宰相も思ひかけず頭になりて、宰相までなり給ふとこそ承りしか」といへば、侍「加茂の御まへにとかや、はるかの世の物語にわらはべもぞし侍るめるは」と答ふれば「さもや侍りけむ。程へて、ひがごとも申し侍らむ。宰相をば見奉らざりしかど、人となりてこそ尋ねうけたまはれ」といらふ。

語釋　○八幡　石清水八幡宮　○ちはやぶる云々　一首の意は、神前の橘も此の衆樹も、共に年老いて枯れかゝりたりとの意なり、ちはやぶるは神の枕詞なり　○頭　藏人頭　○加茂の御まへとかや云々　其の話は、加茂神社の前にての話なりと子供等も昔話として話す　○さもや侍りけむ云々　左樣であつたかもしれぬ、何分年へてゐるから問違もあらう　○宰相をば云々　私は衆樹卿をば知らぬが、大きくなつてから、人に尋ねて知つたのだと答へた

通釋　この宰相衆樹は五十までさせる事もなく、殆んど朝廷に棄てられたやうにて居りましたが、石清水八幡にまゐりました、雨がひどく降つて、石清水の坂を登るとき困難しましたが、御前の橘の木の少し枯れて居るのに立ちよつて「千はやぶる神のおまへのたちばなももろきもともに老いにけるかな」と詠みますと、神は聞かれて哀れんで、橘も榮え、宰相も思ひかけず藏人頭になつて、宰相までなつたと聞きましたといへば、青侍のいふやう、賀茂の御前にとか、はるかの古き世の物語として、兒童も申し傳へ居るやうだと答へますと、世繼のいふ、さうでもあつたらう、年へてまちがつた事も申しませう、宰相をば見ましたけれど、この事は私は成長して後、問ひたづねて、右の話を承つたと侍に答へました。

侍「そはさなり。その宰相は五十六にてぞ、宰相になり、左近の中將かけてこそいませしか。」「そのをりは何ともおぼえ侍らざりしかど、此の頃思ひ出で侍れば、見ぐるしかりけることかなと思ひ侍る。」此の侍「いかでさる有識をば、物げなき若人にては取籠められしぞ」と問へば「さればこそ、さやうに好き置き候ひしものゝ、心にもあらず世繼が家には詣で來寄りては、恥にして、如何ばかりの諍ひ侍りしかど、さばかりにこかけ初めて赤らめ爲させ侍りなむや。然る程に居つき候ひては翁を又一夜も外目せさせ侍らぬをやと微笑みたる口附、いとをこがまし。又「此の女どもも世繼も然るべきにて侍りけるぞ、彼の女二百歳ばかりに成りにて侍り。兼輔の中納言、衆樹の宰相も今まで跡姓だに在せず、如何し侍らまし。世繼も、今やうの若き女ども、更に語らはれ侍らじと言へば、斯る命長の生き合はず侍らましかば、いと怪しう侍らましとて快く笑ふ。

通釋　○かけ　兼ねる　○見ぐるしかりけることかな　不體裁なことである　○有識をば　物しり女をば　○物げなき若人　人らしくない若人　○とりこめられしぞ　妻にしたか　○すきおき候ひしものゝ　立派な人達と浮名を流したものゝ　○心にもあらず　本意にあらぬをいふ　○はぢにして　私の身分などを恥と思うて　○いかばかりのいさかひ　甚しき言ひ合ひ　○こかけそめて　手を掛けそめては爭も出來ぬとなり。こはての誤かといへり　○あからめ　目を他にやること即ち心を他に移すこと　○ゐつき候ひては居馴れては　○外目せさせ侍らぬをや　心を他に移すことを許さなかつたるぞ　然るべき因緣だらう　○あとかばね　跡を續けて姓をつげるもの　○いかゞし侍らまし　妻が尼になることを如何にしよう

○今やう　當世　○かたらはれ　妻にすること　○かかる命長の云々　世繼の語なり。兩方ともに長命の人でこそ夫妻は似合ふが、若し若き人を妻とせば、不釣合でけしからぬといふ意なり

通釋　侍のいふ、この宰相の事は御話の如くである。其の人は五十六にて宰相になり、左近の中將を兼ねて居りました。世繼いふ、其の時分は何とも思はながつたが、此の頃思ひ出せば、不相應の年長の妻を娶つたことは見苦しいと思ひますと。侍のいふ、如何にしてそのやうな物識をば、人らしくもない身分のひくき若人は娶られぞと問へば、世繼のいふ、さやうに公達に想はれて色好みせしものが、意外に私の家に參りましては私の卑しきを恥にして、いくらかの夫婦喧嘩がありましたけれど、それほどに手をかけそめては、心を俄に他に移しかへることがあらうか、その中に私の家に落ちつきましては、私を一夜も外目をさせませんと、微笑したる口つき、甚だ馬鹿らしくあります。世繼又いふ、また妻も私も然るべき因緣でありませう。妻は二百歳ほどになつてをります。兼輔の中納言、衆樹の宰相も今まで形骸をも留めず、子孫すらもありません。さて妻は尼になつたならば如何にしませう。世繼も今樣の若き女どもは更に妻とはせられまじ、かかる長命の者が生き合ひて夫婦にならねば、けしからぬことであらうとて快く笑ひました。

□

げにと聞えてをかしくもあり、語るも現の事ともおぼえず。「あはれ今日ぐして侍らましかば、女房の御耳に、今少しとまる事どもは聞かせ給ひてまし。私の賴む人にては、兵衞の內侍の御親をぞし侍りしかば、內侍のもとへは時々まかるめりき」といふに、「とはたれにか」といふ人のあれば、「いで此の高名の琵琶ひきよ。すまひの節に玄上たまはりて、御まへに青海波つかふまつられたりしは、いみじかりしも

のかな。博雅三位などだに、おぼろげには得鳴らし給はざりけるに、此れは承明門まで聞え侍りしは、左の樂屋にまかりて承りしぞかし。かやうに物の榮宜〳〵しき事どもも、天曆の御時までなり。冷泉院の御世になりてこそ、さはいへど世は昏れ塞りたる心地せしものかな。世の衰ふる事も其の御時よりなり。小野宮殿も一の人と申せど、よそ人にならせ給ひて、若く花やかなる御をぢたちに打任せ奉らせ給ふ。又みかどは申すべきにあらず。

語釋　○現の事ともおぼえず　夢の如くだ　○ぐして　一緒につれて　○女房たち　御婦人だち　○私の頼む人　力にしてたよる人　○兵衞の內侍の御親　信濃守藤原隆信をいふといへど時代合はざるに似たり　○とはたれにか　內侍の親とは誰れぞとなり　○すまひの節　相撲の節　○玄上　琵琶の名にて累代の寶物　○青海波　舞樂の名　○博雅三位　醍醐天皇の皇子克明親王の御子にて琵琶の名人なり　○おぼろげには　尋常にてはひくことはできなかつた　○左の樂屋　雅樂に左方右方の別あり。支那傳來の音樂を奏するは左方といひ、高麗傳來の音樂を奏するを右方といふ、卽ち左の樂屋は左方の樂屋なり　○物の榮えうべ〳〵しき事ども　物の體裁のうつくしきことげに美しくよろしいと思ふこと　○昏れ塞がりたる　暗黑で塞がれたる　○小野宮殿　實頼　○一の人　關白　○よそ人に云々　實頼は朝廷と他人になれるをいふ　○御をぢ　伊尹、兼通、兼家をいふ　○みかどは申すべきにあらず　冷泉天皇は村上天皇に比して御聖德のなきは勿論である

通釋　世繼が身の幸を語るのが、なるほど道理よと聞きとられて面白くもあり、又あまり事がらが古く、異常の長壽なる話であるから、現在の世の事とも思はれません。又世繼いふ、「あゝ今日妻をつれて來るならば、女だちの御耳に今少しとまることをも聞かせ申すことは出來ましたらう。妻の力とたのむ人は、兵衞の內侍の御親をして居りましたので、內侍の許へは時々參るやうであるといふに、其の人は誰かといふ人があつた。世繼いふ、いやこの名高い琵琶ひきよ。相撲の節に玄上を給はつて、御前にて、青海波をひきましたことは大層なものであつた。博雅三位などだに、尋常にては玄上を彈ずることはできぬに、兵衞內侍の親人は、玄上を彈じて承明門まで聞えましたから、左の樂屋に參つて聞きました。かやうに物の仕榮えあること、其の詮のあることは、村上帝の御時までゝあります。冷泉院の御代になつては、さうはいふものゝ、世の中は藤原氏が權を專にして、幼君不明の主のみ立ちましたから、世は暗闇にあつたやうの心地しました。世の衰へたことも其の時よりであります。小野宮殿も關白ではあるが、陛下と他人になつて、若く花やかな御をぢたちの伊尹、兼通、兼家にうちまかせました。又御門は村上天皇に比して、聖德の劣り給うたことは申すまでもありません。

□

あはれに候ひたる事は、村上うせおはしまして、又の年小野宮に人々參り給ひて、いと臨時の客などはなけれど、嘉辰令月など打誦せさせ給ふついでに、一條の左大臣殿、六條殿など拍子とりて、席田うちいでさせ給ひけるに、「あはれ先帝のおはしまさましかば」とて、御笏もうちおきつゝ、あるじ殿をはじめ奉りて、事いみもせさせ給はず、上の御衣どもの袖濡れさせ給ひにけり。然る事なりや。何事も聞き知り見分く人の有るはかひあり、無きはいと口惜しきわざなり。今日かゝる事ども申すも、和殿の聞き分かせ給へば、いとど今少しも申さまほしきなりといへば、侍もあまへたりき。

語釋　○臨時の客　毎年正月二日攝政關白家にて大臣以下の公卿を招きて饗宴すること　○嘉辰令月云々　嘉辰令月などいふ朗詠を誦して宴を催し給ふついでに　○一條の左大臣　源雅信　○六條殿　左大臣源重信　○拍子とりて　拍板を打つて調子をとる　○席田　催馬樂の曲名　○事いみもせさせ給はず　祝宴の時に涙を流すは忌むべきなれど其れにかまはずる事なりや　至極尤ものことだ　○あまへたりき　うなづいてゐた　○上の御衣　袍のこと　○さ

通釋　あはれでありましたことは、村上帝が崩じ給うて、翌年小野宮に人々參りまして剏時客などはなけれど、嘉辰令月歡無極、萬歳千秋樂未央」といふ朗詠を吟じ給ふついでに、一條左大臣雅信、六條殿重信など拍子をとつて、席田を吟じ給ふに、あゝ先帝がましまさばとて、御笏をうち置かれて、實頼殿を始めて、祝の席の忌事なる涙を流して、うへの御衣どもの袖をぬらしました。尤も至極のことであります。何事も聞き知り見分くる人のあるは、かひのあるものであるが、無きは甚だ口惜しきことであります。今日かゝる事などを申すも、あなた（青侍をさす）は聞きわけて下さるから、ます〳〵今少しばかり申したいと思ふといへば、侍も悦びました。

□

藤氏の御事をのみ申し侍るに、源氏の御事もめづらしう申し侍らむ。此の一條殿六條殿たちは、六條の一品式部卿の御子どもにおはします。寛平の御孫なりとばかりは申しながら、人の御有様有識にあはしまして、いづれをも村上のみかど時めかし申させ給ひしに、今少し六條殿をば愛し申させ給へりけり。兄殿はいとあまりうるはしく、公事より外の事は、多分には申させ給はで、ゆるぎたる所のおはしまざりしなり。弟殿は密事には無才にぞおはしましかど、若らかに愛敬づき懐しき方はまさらせ給へりしかばなんめりとぞ人申しゝ。父宮は出家せさせ給ひて、仁和寺におはしましゝかば、六條殿、修理大夫にておはしましゝほどなれば、仁和寺へ參らせ給ふゆきかへりの道を、一度は東の大宮よりのぼらせ給ひて、一條より西ざまにおはしまし、又一度は西の大宮よりくだらせ給ひて、二條より東ざまなどに過ぎさせ給ひつゝ、内裡を御覽じて、破れたる所あれば修理せさせ給へり。いと手ききたる御心ばへなりな。

語釋　○一品式部卿宮　敦實親王　○寛平　宇多天皇　●有識　朝廷の故實に通ずること　○いづれをも　兩方ともに　○時めかし　御用ゐになられた　○うるはしく　端正嚴格　○公事　公務　○ゆるぎたる所　うちとけたる所　○みそか事　男女の關係　○なんめり　なるめり　○仁和寺　山城葛野郡花城村にあり　○修理大夫　宮城の造營修理を掌る、修理職の長官なり　○手ききたる　物事に注意深く鋭敏なること

通釋　藤氏の御事ばかりを申しましたから、源氏の御事も珍らしく申しませう。この一條殿、六條殿は六條の一品宮式部卿敦實の御子どもであります。宇多帝の御孫であるから、人がらの貴い事は言ふまでもないが、人の御ありさま、萬事にいたり深く、有識でありまして、何れをも村上の御門は寵愛されましたに、今少し六條殿の方を愛し申しました。兄殿は甚だ端正で公事よりほかの事は、多くは申しませんで、寛かなる所の無い方でありました。弟殿は男女間の密事にはたらきが無かつたが、若く愛敬づき、なつかしい方は、優つて居りましたからであらうと、人は申しました。父宮は出家になられて、仁和寺に居られました。重信は修理の大夫であつた時分であるから、仁和寺へ參り給ふ往復の道を、一度は東の大宮より上りまして、一條より西の方に御出でになり、又一度は西の大宮より下りまして、二條より東の方に過ぎられ、内裡を御覽になつて、破損した所あれば修理させました。甚だ才覺のすぐれた御心であります。

□

又一條殿の仰せられけるは、「親王たちの中にて、世の案内も知らず、たづきなかりしかば、さるべき公事のをりは、人よりさきに參り、事はてゝもいと末にまかりいでなどして見習ひしなり」とぞのたまは